

美濃加茂市民ミュージアム

紀 要

第17集

2018

美濃加茂市民ミュージアム紀要 第17集(2018)

目次

岐阜県可児地域に分布する平牧層の含巨礫凝灰岩層	鹿野 勘次	—————	1
美濃加茂地域の地形・地質と地名の関係について	鹿野 勘次 水谷 敬	—————	8
美濃加茂市川合町の古墳出土須恵器とその背景	渡邊 博人	—————	20
尾崎遺跡 25 号住居址出土資料について	磯谷 祐子	—————	28
森金次郎 — その家族と親友・有賀好風	西尾 円	—————	42
<hr/>			
「文化の森コレクション展」展示資料について	可児 光生	—————	1

岐阜県可児地域に分布する平牧層の含巨礫凝灰岩層

鹿野 勘次

キーワード：瑞浪層群，平牧層，火山碎屑岩，含巨礫凝灰岩，陥没盆地、形成過程

1 はじめに

岐阜県可児地域には、中新統の瑞浪層群が広く分布する。本層群は大量の火山碎屑岩からなり、下部の蜂屋層は火山学的な報告があるが、中村層と平牧層は火山学的な研究が少ない。

平牧層は凝灰岩が豊富に分布するため、特定の凝灰岩を鍵層として層序が組まれてきた(糸魚川、1980)。しかし、造成工事で出現した巨大な露頭で観察すると、厚さ5mの凝灰岩が浸食されて急激にせん滅する、厚さ数mの凝灰質砂岩が数10cmに変化する、など水平方向への変化がしばしばみられる。また、小露頭で観察した凝灰岩層が、大露頭では直径数mの凝灰岩の巨礫として観察される。堆積場が氾濫原であることを合わせると、平牧層において凝灰岩層対比には課題がある。

吉田(1977)は平牧層下部層において、巨礫を含んで岩相変化が甚々しい層準は、乱堆積構造を示すとした。阿部・犬塚(1997)は、巨礫を含む凝灰岩を含巨礫凝灰岩層として研究し、火山活動に関係させた形成過程を論じた。

本報告では平牧層にみられる巨礫を含む凝灰岩層の分布全域を検討し、その形成過程を考察する。

2 地形地質概説

可児地域は多角形状の盆地を形成し、飛騨川・木曾川・可児川・加茂川などが低所を流れる。盆地の名称は、美濃加茂盆地・太田盆地・可児盆地などと呼ばれるが、標高の最低地域が美濃加茂市に位置することから、本論では美濃加茂盆地



図2 美濃加茂盆地周辺地域の地形

「赤色立体地図©アジア航測株式会社」を使用
濃い部分の地形が急傾斜、薄い部分は平坦な地形

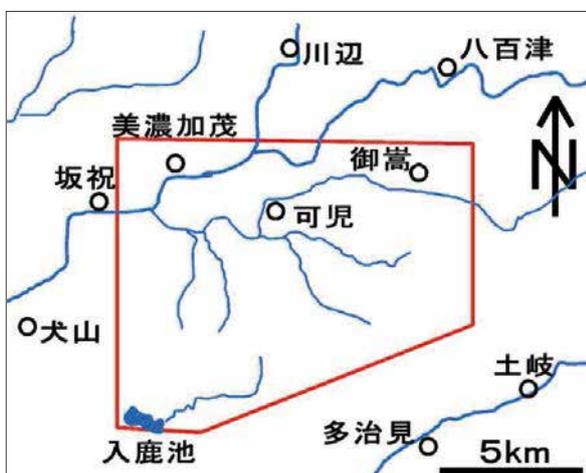


図1 調査地域(赤線内)

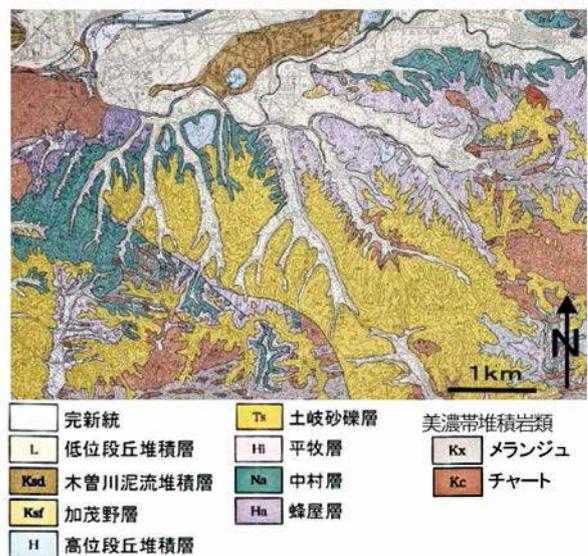


図3 調査地域の地質図

美濃加茂市民ミュージアム (2003) を使用

と呼ぶ。盆地の周囲には低山性から丘陵性の山地と準平原をなす美濃高原が広がる。

地質は、古い順に美濃帯堆積岩類・土岐花崗岩(鬼岩花崗岩・八百津花崗岩)・花崗斑岩類・瑞浪層群・瀬戸層群(土岐砂礫層)・段丘堆積層・谷底堆積層が分布する。

瑞浪層群は、下位から蜂屋層・中村層・平牧層(津橋層)が分布し、積算層厚は600m以上に達する。蜂屋層と平牧層は火山砕屑岩を大量に含み、蜂屋層は安山岩質溶岩や溶結凝灰岩を含む。中村層は砂岩・泥岩・礫岩を主体とし、2層の凝灰岩をはさむ。

3 平牧層

本層は、凝灰岩・軽石質凝灰岩・含巨礫凝灰岩・火山礫凝灰岩・凝灰角礫岩などの火山砕屑岩類を大量に含む。これらの地層は水平方向への連続性がある。ほかに、二次堆積による凝灰質砂

岩などの砕屑岩類が分布するが、水平方向への連続性に欠けることが多い。本層は本地域の広域にわたってほぼ水平に分布し、最上部は上位の土岐砂礫層に覆われて不明だが、全層厚は130m以上に達する。平牧層は下部層と上部層に区分される。

下部層は、含巨礫凝灰岩の最上部までとし、凝灰角礫岩・火山礫凝灰岩・凝灰岩・凝灰質砂岩・含巨礫凝灰岩で構成され、その厚さは40～70mである。下位の中村層と整合関係にあるが、地域によって凝灰角礫岩・火山礫凝灰岩・巨岩塊凝灰岩が中村層を直接覆っている。

上部層は珪藻質泥岩から土岐砂礫層の直下までとし、凝灰岩・凝灰質砂岩・凝灰質泥岩・礫岩・砂岩・泥岩・炭質砂岩・炭質泥岩・褐炭で構成され、その厚さは50～80mである。

平牧層は活発な火山活動を示唆する数層の火砕岩を介在することを特徴とする。主要な火砕岩は下位から、凝灰角礫岩・含巨礫凝灰岩・軽石凝灰岩の3層準である。凝灰角礫岩(図5)は直径10cm以上の安山岩類の角礫を多量に含む。含巨礫凝灰岩は次項で述べる。軽石凝灰岩は多量の軽石を含み、火山豆石(図6)、ベースサージ堆積物(図7)、脱ガス構造(図8)などがみられる。

火砕岩の割合が高い平牧層において、哺乳動物・魚類・樹幹・植物ほかの化石が豊富に産出する(可児市教育委員会、1977)・(糸魚川、1980)。

平牧層の形成年代は、5層準の凝灰岩等でフィッシュン・トラック年代が測定(鹿野、2003)されており、その年代を総合地質柱状図に示す(図4)。

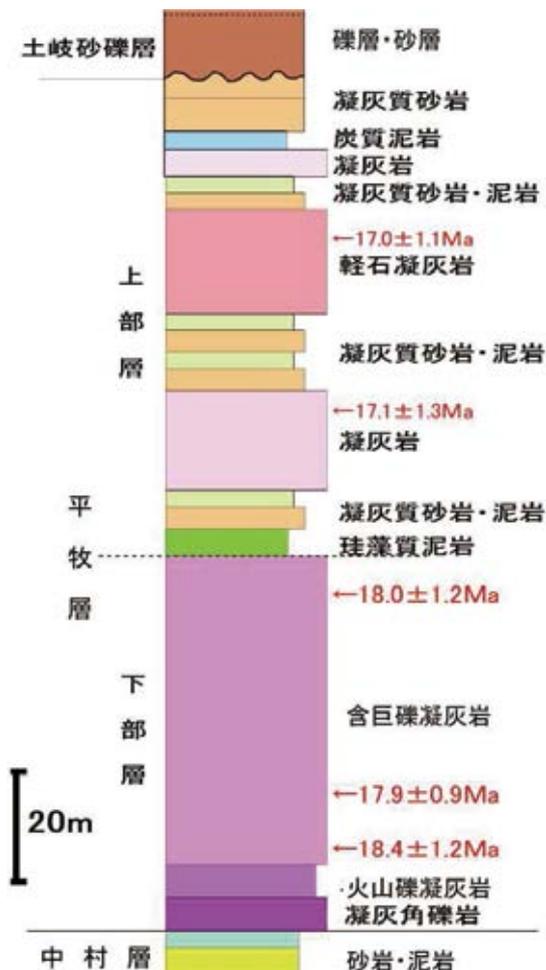


図4 平牧層の総合地質柱状図



図5 凝灰角礫岩(可児市土田)



図6 火山豆石(可児市久々利)



図7 ベース サージ堆積物(可児市二野)
岩相はグラウンド サージ、またはグラウンド層に相当



図8 脱ガス構造(可児市二野)
垂直模様ガス抜け跡を示し、焼けた樹幹からもガスが発生

4 含巨礫凝灰岩層

模式地：可児市羽崎

分布：御嵩町南山から可児市一帯、多治見市北小木町、犬山市今井にかけての地域

岩相：直径25mから数cm以下の礫が、凝灰岩～凝灰質砂岩の基質中に様々な割合で混入

層厚：最大70m、平均40m

上下関係：下位の中村層などに整合し、上位は珪藻質泥岩に覆われる。

形成年代：18.1±1.1Ma (F T年代)

地層名：羽崎凝灰岩層(新称)

本層は、凝灰岩あるいは凝灰質砂岩の基質に大小さまざまな、多種類の礫を大量に含む(図9)。基質の凝灰岩は均質で層理が認められないが、凝灰質砂岩の岩相を示す部分がある。最大の礫は直径約35mで、10m以上の巨礫から1cm以下の小礫まで多様で、乱雑に混在する。礫種も多様で、含巨礫凝灰岩層の下位の岩石のすべてがみられる。礫は角礫～垂円礫(図11)が雑多に混じるが、角礫の割合が高い。一部では中村層の砂岩・泥岩・褐炭などが不定形に変形(図16下)していることから、未固結の状態で堆積した可能性がある。また、美濃帯堆積岩の層状チャートのブロック化した礫(図16上)が源岩の形体を保っている。

礫種は、含巨礫凝灰岩と近接する地域に分布する岩石や下位に分布する岩石と密接に関係する。美濃帯堆積岩の分布地域は砂岩・泥岩・チャート・メランジュの割合が高くなる。中村層の分布地域は中村層の礫岩・砂岩・砂岩泥岩互層・泥岩・褐炭の割合が高くなり、一部の地域では中村層起源の礫を主体とする。また、2種類の凝灰岩礫がみられるが、含巨礫凝灰岩の下位で平牧層において観察されていない凝灰岩や、中村層の凝灰岩に似ている。なお、蜂屋層起源の礫は含まれない。

基質の凝灰岩～凝灰質砂岩は淡灰白色で、斜長石・シソ輝石・普通輝石・角閃石を含み、軽石・岩片・火山ガラスもみられる。斑晶の含有量は少ないが、不均質で斑晶や軽石などの目立つ部分がある。

本層の最大層厚は約70mを越えるが、地域差が大きく、10m以下の地域もある。また、分布も限定された範囲に限られる(図17)。



図9 含巨礫凝灰岩の産状(可児市柿田)
色調の異なる部分が全て礫

本層は分布中心地域や塩河地域において、中村層をほぼ水平に覆い(図12・13)、上位は珪藻質泥岩に水平に覆われるが、下位や上位の地層には地域による違いがある。本層の下位に美濃帯堆積岩、凝灰角礫岩が分布する地域がある。上位を凝灰質砂岩、礫岩が覆う地域があり、平牧層上部層の礫岩が本層を浸食して堆積(図14)する地域もみられる。また、本層と中村層がほぼ垂直に接する地点があり、断層がみられないことから高角度のアバット関係である(図10)。



図11 灰色凝灰岩の巨礫(可児市柿田)
赤破線で囲んだ直径約6mの部分



図10 含巨礫凝灰岩層と中村層の境界
高角度のアバット関係, で火道壁の可能性有
花フェスタ記念公園



図12 含巨礫凝灰岩層の産状(可児市塩河)
中村層を水平におおう、下段の写真は上段の□部

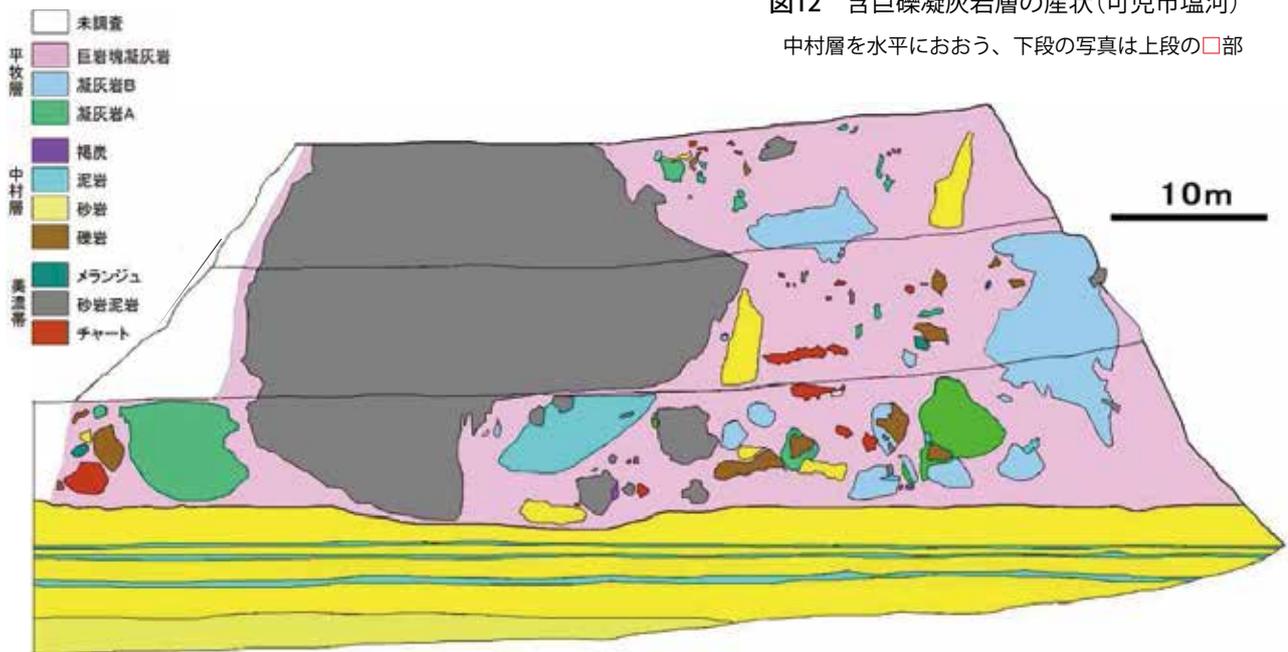


図13 含巨礫凝灰岩スケッチ図(可児市塩河)

阿部・犬塚(1997)を使用して編集・作図 図12上の全体をスケッチ

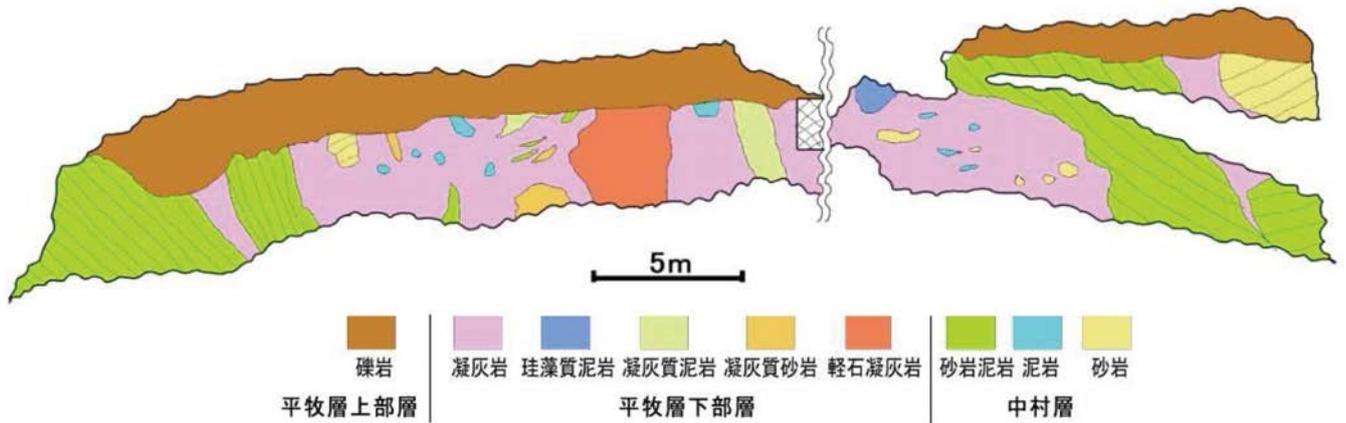


図13 含巨礫凝灰岩スケッチ図(可児市羽崎)

本層のF T年代(鹿野、2003)は $18.4 \pm 1.2\text{Ma}$ 、 $17.9 \pm 0.9\text{Ma}$ 、 $18.0 \pm 1.2\text{Ma}$ と求められた。

阿部・犬塚(1997)は、本地域の含巨礫凝灰岩層について、塩河・可児川・久々利の3露頭を詳細に調査し、火山噴出物としての形成過程および火山活動を論じた。

5 堆積環境

含巨礫凝灰岩層は次の特徴をもつ。

- ・層厚は10～70mで地域差があり層厚変化がある。
- ・大小さまざまな大きさの角礫～亜円礫を含み、最大は直径約35mで、直径10m以上の巨礫が多い。
- ・巨大礫が大量に分布する地域がみられる。
- ・礫は下位の岩石で、変形・破壊などがほとんどみられず、源岩の状態を保っている(図16上)。
- ・巨礫の種類には地域差があり、その地点の下位の岩石や近接する岩石(美濃帯、中村層)の割合が高い。蜂屋層起源の礫は見られない。

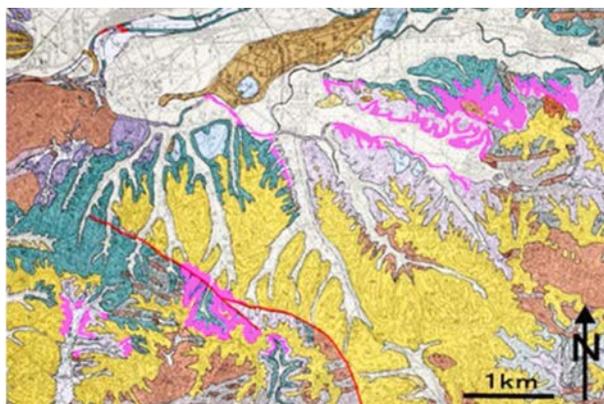


図15 含巨礫凝灰岩層の分布地

美濃加茂市民ミュージアム (2003) を使用して桃色で加筆

- ・本層の下位層の平牧層に由来する礫は凝灰岩と火山礫凝灰岩で、少量である。
- ・中村層の砂岩・泥岩・褐炭(図21)が地層の状態を保った状態で移動・堆積している。
- ・限定された範囲に分布し、その範囲の外部には分布しない(図15・17)。
- ・基質の凝灰岩が淡黄褐色凝灰岩の巨礫に脈状に貫入する(図19)。

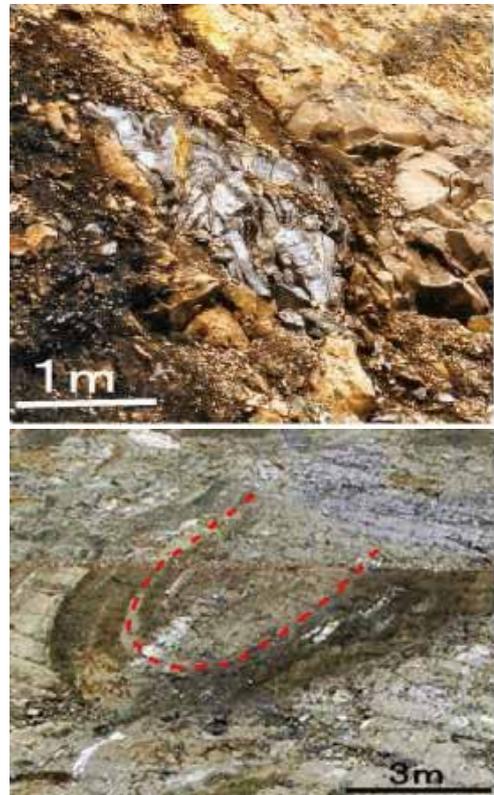


図16 巨礫の産状

上:小褶曲を持つ層状チャート層(可児市塩河)
下:U字型に変形した砂岩泥岩層(可児市柿田)

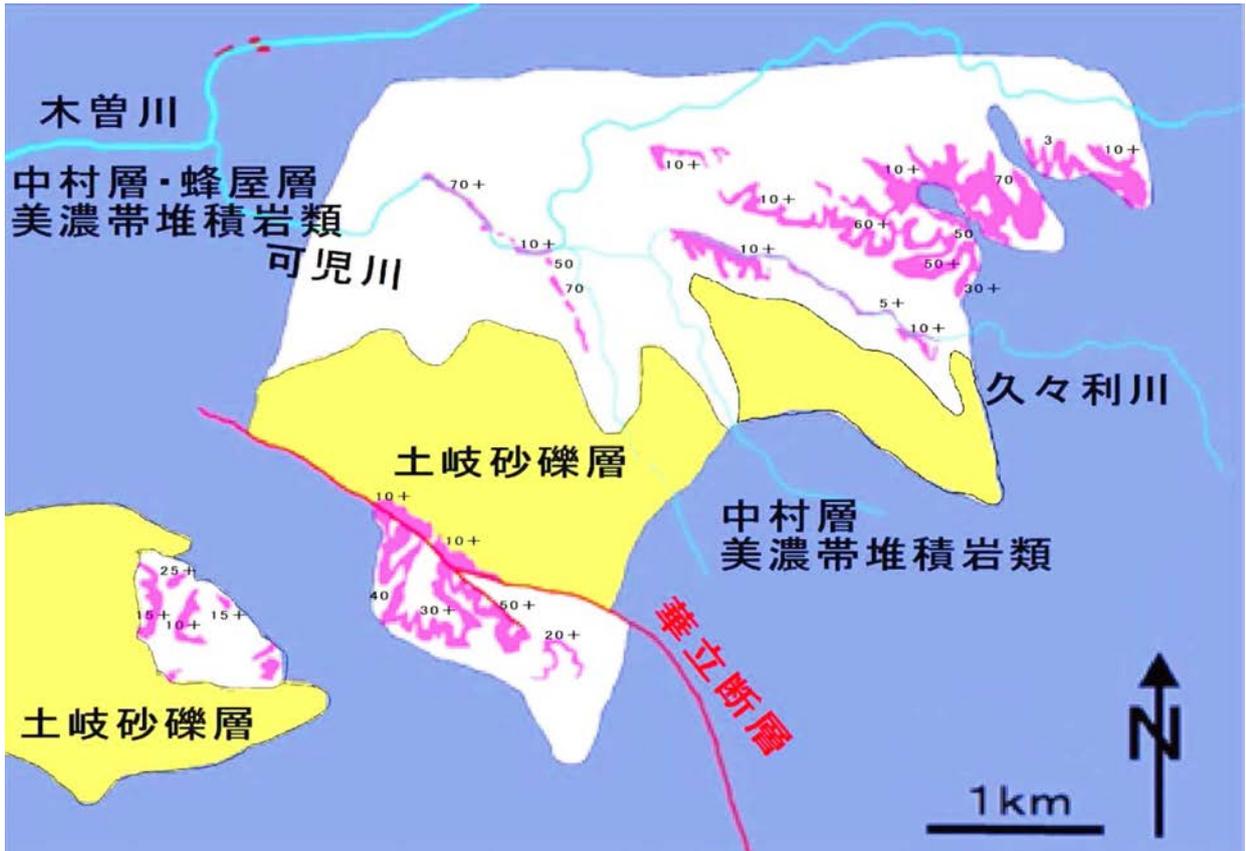


図17 含巨礫凝灰岩層の露出と推定分布範囲

図 15 より作図した分布範囲 部に含巨礫凝灰岩が分布 数値は層厚(m)



図18 含巨礫凝灰岩層の推定堆積盆地

華立断層による水平ずれを戻して復元 部に含巨礫凝灰岩が分布



図19 巨礫に貫入する基質の凝灰岩
(御高町古屋敷)

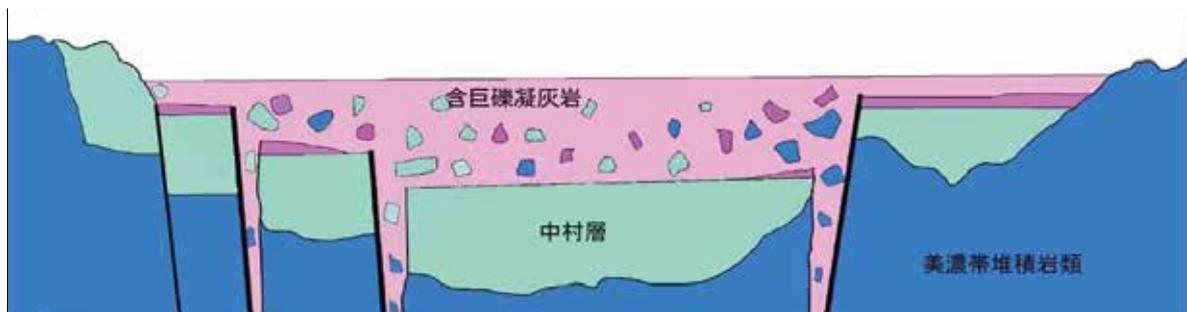


図20 含巨礫凝灰岩層の堆積環境モデル図



図21 中村層の褐炭層の巨礫(可児市兼杖)

これらのことから、形成過程および火山活動の概要を考察する。

平牧層における最大規模の火山活動によって大量の火山灰が噴出し、陥没盆地が形成された(図18)。陥没盆地内では、火道付近の岩石や地層が礫として取り込まれ、陥没盆地周縁部の急崖から崩壊した巨礫が火山灰に混じって堆積した(図20)。噴火口は含巨礫凝灰岩層の分布地域内で、凝灰岩と礫は複数の火道から供給された。

6 まとめ

- (1) 含巨礫凝灰岩層は陥没盆地を形成した火山活動で供給された凝灰岩を主体に構成される。
- (2) 巨礫は、基盤や下位層の岩石から取り込まれた、また、陥没壁の崩壊などによって供給された。
- (3) 平牧層の凝灰岩は、陥没盆地内の噴火で直接供給された火山灰で、凝灰質砂岩などの凝灰質岩石は盆地内の火山碎屑物が二次移動して堆積した。
- (4) 火山灰と巨礫は複数の火道から供給され、巨礫の種類が火道地域の地質を反映している。
- (5) 含巨礫凝灰岩層の堆積後、火山活動の長期休止期間があり、静穏な陥没盆地内でケイソウ質泥岩が堆積し、生物が繁栄した。

謝辞

岐阜大学名誉教授小井土由光氏には、現地調査に同行いただき、平牧層や瑞浪層群の火山活動について助言を受けた。各務原西高等学校教諭林譲治氏には、平牧層、瑞浪市の本郷層、御嵩町の津橋層を共同調査して討論をいただいた。また、本原稿をとおして助言を受けた。岐阜大学1997年卒業生の阿部美紀・犬塚由美子氏には現地調査でご協力いただいた。

ここに記して感謝する。

(しかの かんじ 岐阜大学応用生物科学部非常勤講師)

文献

- 阿部美紀・犬塚由美子(1997) 瑞浪層群平牧累層における含巨礫凝灰岩層について. 岐阜大学教育学部地学科卒論, 30p.
- 糸魚川淳二(1980) 瑞浪地域の地質. 瑞浪市化石博物館専報, 1, 1-50.
- 可児町教育委員会(1977) 平牧の地層と化石. —可児ニュータウン化石調査報告書—. 可児町, 105p (図版別).
- 鹿野勘次(2003) 岐阜県美濃加茂盆地の下部中新統・瑞浪層群のフィッシュン・トラック年代. 美濃加茂市民ミュージアム紀要, 2, 1-8.
- 美濃加茂市民ミュージアム(2003) 美濃加茂周辺地域の地質図. 企画展「美濃加茂にサイヤゾウがいた頃」図録, 52p.

美濃加茂地域の地形・地質と地名の関係について

鹿野 勘次
水谷 敬

キーワード：地名、地形、地質、地名と自然・文化

1 はじめに

美濃加茂地域の地質は約2億年前以降に形成され、その間に、隆起・浸食・沈降・堆積などの変動を受けてきた。地形は数10万年前から現在までに形成されたが、現在の地形のほとんどが数万年前以降に形成された。

縄文時代から美濃加茂地域に、住む人たちによって土地の表層が利用されてきた。人々は、地表面一帯の形状や特性に注目し、言葉や文字で地名として表現してきた。美濃加茂地域の地形・地質が、どのような地名で表現されているかについて検証した(図1)。

本報告では、美濃加茂地域の地形・地質など、大地の形状や特性を反映した地名を取り上げ、地名が示す地点の特性を、自然科学・人文科学の視点から考察する。



図1 調査地域

「グーグルアース」を使用し、加筆した

2 地形地質概説

地形は、山地、丘陵性山地、丘陵地、崖錐性斜面、扇状地、段丘平坦面、谷底平坦面、河跡堆積面などが分布する(図2)。

地質は古い時代から、美濃帯堆積岩類、瑞浪層群の蜂屋層・中村層・平牧層、瀬戸層群の土岐砂礫層、更新統の高位段丘堆積層・中位段丘堆積層、更新一完新統の低位段丘堆積層・谷底堆積層が分布する(表1、図3)。

美濃帯堆積岩類は玄武岩・石灰岩・チャート・砂岩・珪質泥岩・泥岩・礫岩・メランジュで構成される。蜂屋層は流紋岩質溶結凝灰岩・自破碎溶岩・火山角礫岩・凝灰角礫岩・火山礫



図2 美濃加茂地域の地形概観

「赤色立体地図©アジア航測株式会社」を使用し、加筆した色の濃さが傾斜の強さを示し、薄い部分が平坦度を示す

表1 美濃加茂地域の地質と地形

地質年代	絶対年代	地質	主な堆積物	主な地形	
第四紀	完新世	2万年	谷底堆積層	砂層・泥層	河跡堆積面
	更新世	5	低位段丘堆積層	礫層・砂層	段丘堆積面
		約10	木曾川泥流堆積層	火山泥流堆積物	
	約50	加茂野層	礫層・砂層、軽石	段丘平坦面	
新生代	約260万	山之上礫層	くさり礫層		
	約500	土岐砂礫層	礫層・砂層	丘陵地	
	530万年	1800	平牧層	火山礫凝灰岩・砂岩	丘陵性山地
	新第三紀	1900	中村層	砂岩・泥岩	
		2400-2000	蜂屋層	火山角礫岩・凝灰角礫岩	
古第三紀	2300万年				
中生代	白亜紀	6600万年			
	ジュラ紀	1.45億年			
	三畳紀		美濃帯堆積岩類	チャート・砂岩・泥岩	山地
古生代	ペルム紀	2.52億年		石灰岩・玄武岩	

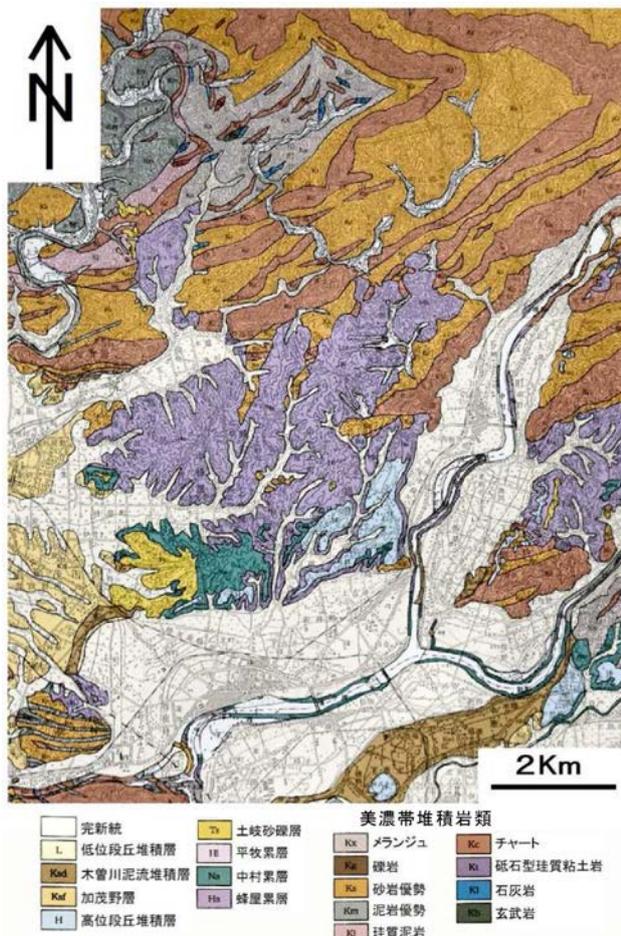


図3 美濃加茂地域の地質図

美濃加茂市民ミュージアム (2003) 発行の「美濃加茂地域の地質図」の一部を使用した

凝灰岩・凝灰岩・礫岩・砂岩・泥岩・夾炭砂岩(褐炭)で構成される。中村層は砂岩・泥岩・礫岩・夾炭砂岩(褐炭)・凝灰岩で構成される。平牧層は火山礫凝灰岩・凝灰岩・凝灰質砂岩・凝灰質泥岩で構成される。土岐砂礫層は礫層・砂層で構成され、礫が風化して半くさり礫になっている。高位段丘堆積層は山之上礫層が分布し、礫が風化してくさり礫層になっている。中位段丘堆積層は加茂野層と木曾川泥流堆積層で構成される。加茂野層は軽石を含む礫層・砂層、木曾川泥流堆積層は火山泥流堆積物・砂層から成る。低位段丘堆積層は礫層・砂層、谷底堆積層は礫層・砂層・泥層・炭質層から成る。

3 大地の形状・特性を示す地名

本論では、大字・小字・小地名・旧地名などを同等に扱う。地名は、各地の地形地質を加味して分類した。【 】は代表的な地形を示す。

① 山【山地、急傾斜地】

山之上・富士山・高木山(山之上町)
 愛宕山“米田富士”(川辺町)
 大山・山下(加茂野町)
 奥山(三和町)

② 野【低平地、山裾の緩傾斜地、水供給少】

加茂野・南野・東野・西野・北野(加茂野町)
 切野・野寺・野笹(本郷町・野笹町)
 牧野・上野(下米田町)
 野地原・野黒(伊深町)
 上野(山之上町)、市野々(三和町)

③ 田【平坦地、水供給多】

太田・深田(太田町)
 米田(下米田町)
 矢田・諸田・引田・奥田(蜂屋町)
 泉田・深田(加茂野町)

④ 平【緩傾斜地、緩斜面、緩崖地】

上平・中平・下平(本郷町)
 前平(前平町)
 大平(下米田町)
 大平・猪ノ平(蜂屋町)
 平ノ越(山之上町)
 中田平・表平(伊深町)

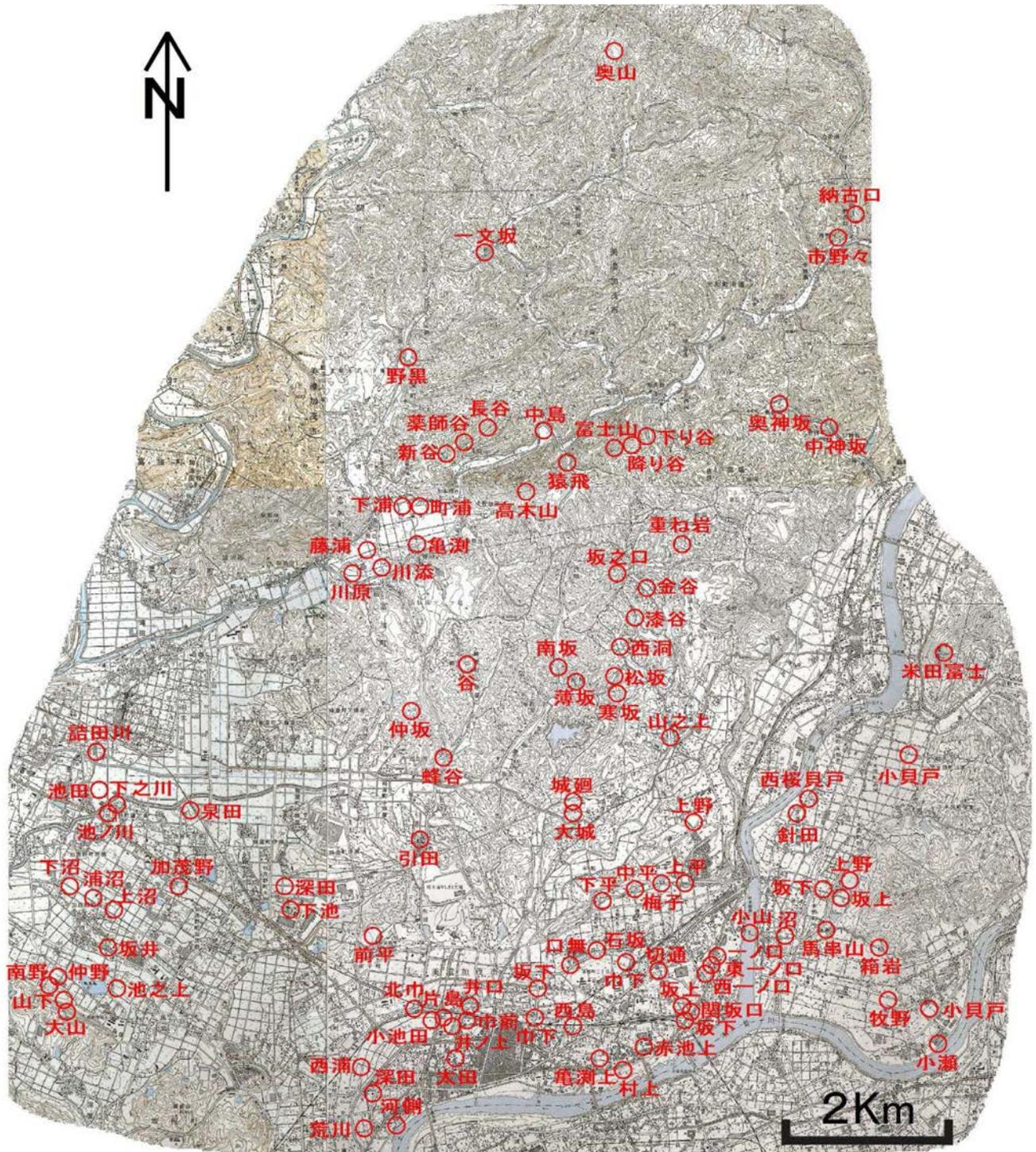


図4 おもな地名の位置・地点

国土地理院発行の2.5万分の1地形図「美濃関」・「上麻生」・「美濃加茂」の一部を使用、加筆した

⑤ 坂【河岸段丘の段丘崖、傾斜度転換地】

薄坂・寒坂・坂之口・南坂(山之上町)
 坂上・坂下・関坂口・石坂(古井)
 坂上・坂下(下米田町)
 明戸寺坂(太田町)

仲坂(蜂屋町)
 一文坂(伊深町)
 坂井(加茂野町)
 中神坂・奥神坂(川辺町)

- ⑥ 口【崖の上面・下面、出入り口】
 一ノ口・口洞・西市ノ口・東市ノ口・関坂
 口・口無(本郷町・川合町)
 坂之口・細口・田之口(山之上町)
 糠洞口・岩井洞口・田口洞(伊深町)
 野口(下米田町)
 一之口(加茂野町)
 井口(太田町)
 納古口(三和町)

- ⑦ 巾・幅【段丘崖】
 北巾・巾前(太田町)
 巾下(本郷町)

- ⑧ 島【平坦面の高まり、旧中洲】
 中島(伊深町)、片島(太田町)
 田島・西島・島(古井)

- ⑨ 河・池・淵・川・沼・浦・瀬
 【旧河道、三日月湖、湿地、扇端部】
 村上・水神下・亀淵上・赤池上・川幅(古井)
 河側・木曾川・荒川・西浦・亀淵(太田町)
 川原・沼・小瀬(下米田町)
 上沼・浦沼・下沼・池田・詰田川・下之川・
 池ノ川・池之上・下池(加茂野町)
 勝負池・亀淵・川添・川原・町浦・下浦・藤
 浦(伊深町)

- ⑩ 谷【山地や丘陵地の浸食】
 長谷・薬師谷・新谷(伊深町)
 金谷・漆谷・降り谷(山之上町)
 蜂屋“蜂谷”・谷(蜂屋町)
 下り谷(三和町)

- ⑪ 洞【丘陵地や山地の浸食谷、水供給少短谷、
 人工改変谷間】
 隠レ洞・春日洞・寺洞など約28件(山之上町)
 島之洞・太郎洞・正洞・作り洞ほか(蜂屋町)
 宮洞・治田洞・樽上洞ほか(三和町)
 寺洞・岩井洞・少洞・田口洞ほか(伊深町)

- ⑫ 猿【崖、急傾斜地】
 猿飛(山之上町)
 猿啄(坂祝町)

- ⑬ 岩・山【独立峰、岩峰、巨岩】
 箱岩・馬串山・小山(下米田町)
 重ね岩(川辺町)

- ⑭ 壟(ハリ)・針・貝戸・垣内【開墾地、開発地】
 針田・小貝戸・針田・西桜貝戸(下米田町)
 大貝戸(古井)
 大針(坂祝町)
 金針・深針(太田町)
 針添(加茂野町)

4 地形地質と地名

特徴的な地名について、地形学・地質学の見地から検証・解説する。

(1) 山

● 山之上(山之上町)【急傾斜地の上面】

川辺町の南西部に、高度差約50mの河岸段丘の段丘崖が2km以上連なる。この段丘崖を幕引山と呼んでいる(図5)。また、古井の北部は、高度差約40mの段丘崖が2km以上続く。川辺町や下米田町から眺めると、段丘崖の上の高位段丘面は幕引山(図6)の上面に相当する。また、太田・蜂屋・伊深・三和から「山之上」への道路は登り坂のため、山の上へ登ることになる。



図5 山之上南部の地形

「赤色立体地図©アジア航測株式会社」を使用、加筆した色の濃さが傾斜度を示し、濃いと急傾斜、薄いほど平坦面

蜂屋町や伊深町等から見ると標高が高いことから山の上に相当する。山之上町北部は丘陵地が、山之上町南部は緩やか～平坦な地形が広がる。



図6 幕引山の広がり
下米田町則光から西の段丘崖を望む

● 富士山・高木山(山之上町)・愛宕山(川辺町)
【山地】

富士山に関する山として、山之上富士と米田富士がある。山之上富士は、国土地理院の地形図に「富士山」と記載してある。「ふじさん」と読む山は、南島原市の「富士山」があるが、

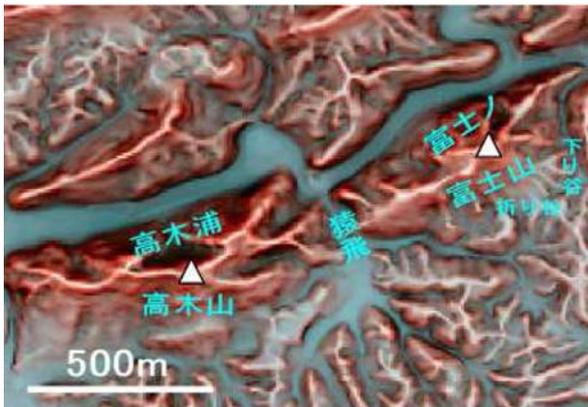


図7 富士山地域の地形と地名
「赤色立体地図 © アジア航測株式会社」を使用、加筆した

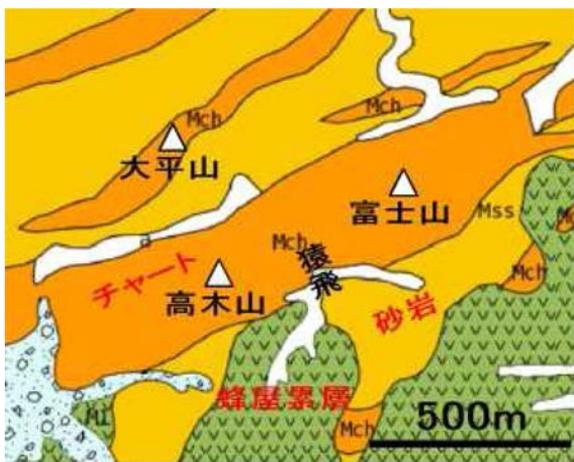


図8 富士山地域の地質と地名
岐阜県地質図「ジオランドぎふ」を使用、加筆した

国土地理院の地形図には「愛宕山」と記されている。また、「ふじやま」と読む富士山は、埼玉県1座、群馬県2座、栃木県3座がある。山之上富士が国土地理院の地形図に「富士山」(ふじさん)と記載されていることは全国的にも極めて珍しい。米田富士は国土地理院の地形図に「愛宕山」と記されている。なお、〇〇富士は全国に約180座ある。

山之上富士の命名は、江戸期に駿河出身の高僧白隠が岩瀧山で修行したことが関係しているとされる。

山之上富士や米田富士は浸食されにくいチャートで形成され、富士山と同じような円錐型の景観(図9・10)をなす。山之上富士の北斜面はチャートが絶壁を形成し、地名は「富士ノ」である。高木山の北斜面も絶壁で地名は「高木浦」である。

山之上富士と高木山の間を、富士川が浸食して断崖を形成し、その地名は「猿飛」である。

地名の「富士山」・「高木山」は山の南斜面一帯(図7)を指し、山本体の名称も「富士山」・「高木山」(図8)である。



図9 山之上富士
高木山から望む

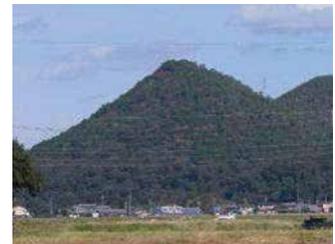


図10 米田富士
下米田町西脇から望む

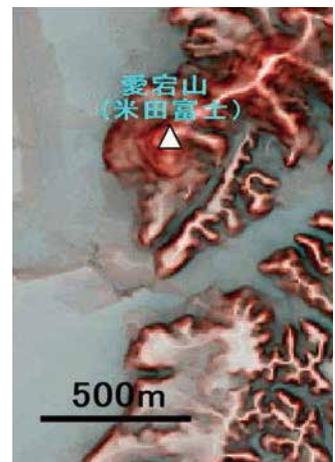


図11 愛宕山の地形
「赤色立体地図 © アジア航測株式会社」を使用、加筆した

● 大山・山下(加茂野町稲辺)

【稜線状山地と山麓平坦地】

稲辺南端のカナクス山一帯は西北西から東南東へ稜線が続く。この山の高い部分はチャートが分布して浸食されにくいいため、チャートの分布方向に稜線が連なる(図12)。この稜線の北斜面一帯を「大山」と呼び、その北側の平坦地を「山下」と呼び、加茂野層の砂礫層が分布する(図13)。

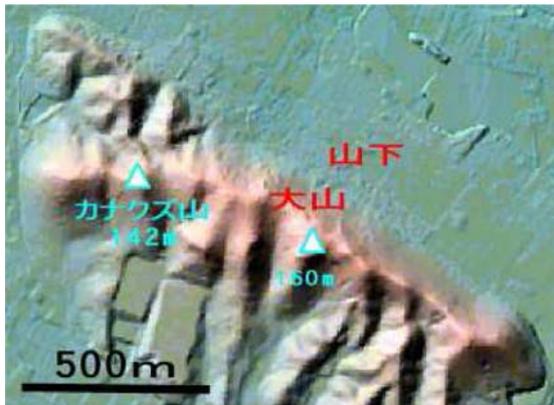


図12 稲辺地域の地形と地名
グーグルアースの色別標高図を使用、加筆した

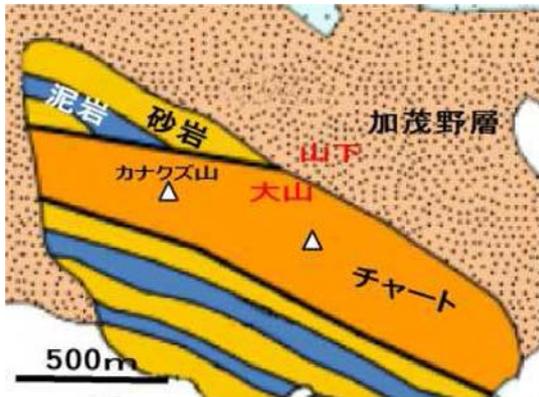


図13 稲辺地域の地質と地名
岐阜県地質図「ジオランドぎふ」を使用、加筆した

(2) 田

● 太田・深田・宝田・小池田(太田町)

【平坦地、水供給多】

太田町一帯は河岸段丘の低位段丘Ⅰ～Ⅳが分布して礫層が広範囲に堆積し、砂層や泥層が小規模挟まれる(図15)。

「太田」「深田」は低位段丘Ⅳに属して美濃加茂盆地で標高が一番低い地域である。また、加茂川

最下流部一帯は低位段丘Ⅳの面積が狭くなる場所である。そのため、豪雨時には、深田地域は湛水しやすい自然条件にある(図14)。

太田町のこの地域は礫層が広く分布するが、段丘面の低い部分は砂層や泥層がみられる(図15)。

美濃太田駅西方の段丘崖に「北市」、段丘崖の上に「井口」、下に「巾下」・「巾前」などの地名が並ぶ。なお、肥沃な土地を意味する地名「宝田」の位置は、加茂川が蜂屋層の鉄・マグネシウムに富む風化土を低位段丘Ⅳに堆積した場所である。また、「片島」は低位段丘Ⅳの高まりで、古木曾川の中洲に相当する。「小池田」は、古木曾川の本流部に相当する。



図14 太田町地域の段丘崖と地名
グーグルアースの色別標高図を編集し、加筆した



図15 低位段丘の礫層・砂層
左：低位段丘Ⅰ（新池町）、右：低位段丘Ⅳ（西町）

(3) 野

● 牧野・上野(下米田町)【平坦地、水供給少】

牧野は低位段丘Ⅰ～Ⅳが幅広く広がり、段丘面全域の面積に対して白山南斜面の集水面積が狭い(図16)ため、水の供給が少ない地域である。

「上野」は木曾川泥流堆積層が分布する中段段丘に位置する。この段丘崖には泥流堆積物が露出したが、現在は草木や石垣により観察できない。高

度差数mの段丘崖を挟んで「坂下」と「坂上」の地名(図17)がある。

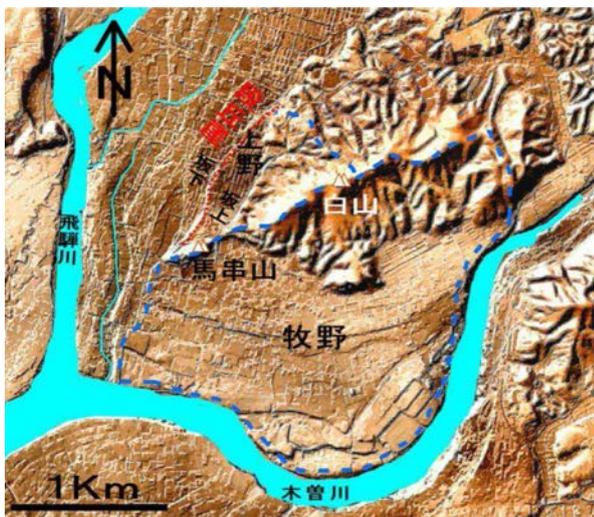


図16 下米田町地域の河岸段丘と地名
 ゴーグルアースの色別標高図を編集し、加筆した
 水色破線は降水の集水範囲、赤破線は中位段丘崖



図17 河岸段丘崖と坂道(下米田町今)

(4) 平

● 上平・中平・下平(本郷町)【段丘崖・斜面】

古井の低位段丘 I の北に高度差約40mの段丘崖が連なる。段丘崖と直下の緩斜面に、上流から下流に「上平」・「中平」・「下平」の地名が並ぶ(図18)。

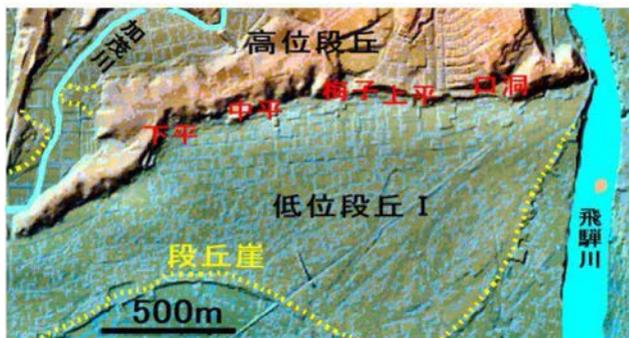


図18 段丘崖付近の地名と地形
 ゴーグルアースの色別標高図を編集して加筆した

(5) 坂・口・巾

● 石坂・一ノ口・坂上・巾下など(古井)

【河岸段丘、段丘崖】

低位段丘 I の段丘崖と低位段丘 II の段丘崖付近に、段丘崖に関係した地名が並ぶ。「巾下」・「坂上」・「坂下」は段丘面に位置し、「口無」・「石坂」・「切通」・「西一ノ口」・「東一ノ口」・「一ノ口」は段丘崖に位置する(図19)。

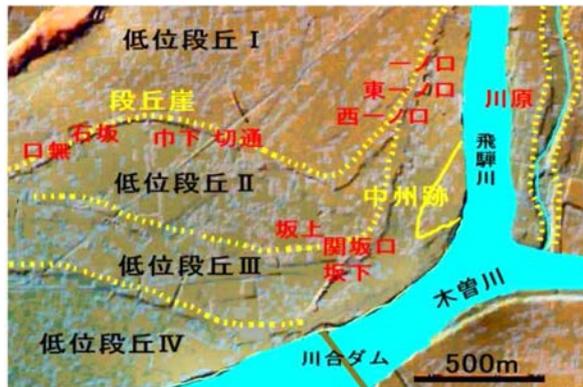


図19 古井の段丘崖と地名

ゴーグルアースの色別標高図を編集して加筆した

(6) 島

● 中島(伊深町)【川浦川の旧中洲】

川浦川が大きく蛇行する内側に「中島」が位置する。川浦川がチャート分布地域から、浸食されやすい砂岩分布地の北北西方向へ流れるため、大きく蛇行している(図20)。蛇行の内側では堆積作用が進んで他地点より堆積物が厚くなった。また、この地域は富士川ほかの小河川が合流するため、湛水しやすいため、「中島」の下流「牛牧」地域は氾濫しやすい場所である。

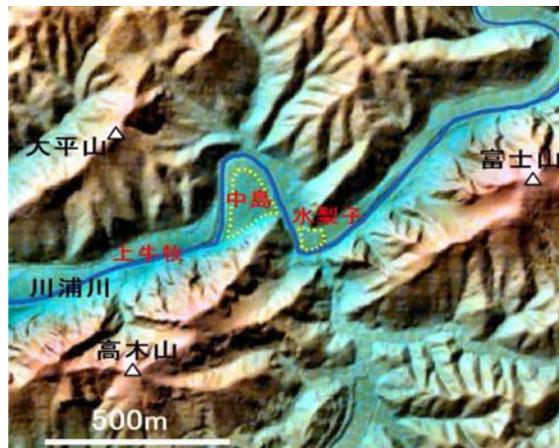


図20 川浦川の旧中洲と地名

ゴーグルアースの色別標高図を編集して加筆した

● 赤池上・亀測上・村上・水神下(古井)

【木曾川の旧中洲、旧河道】

川合ダム下流木曾川右岸の旧河道沿いに河跡湖が分布する(図21～23)。2つの河跡湖(赤池、亀測)があり、小川で結ばれている。その北側に



図21 旧河道と地名(御門町)の関係
 ゲーグルアースの色別標高図を編集、加筆した



図22 1947年木曾川の河道と池

国土地理院の地図・空中写真閲覧サービスを使用した
 11976分の1「美濃加茂」1947年12月20日米軍撮影

「赤池上」・「亀測上」の地名がある。旧中洲一帯の地名は「村上」で、その一部が中ノ島に相当する。なお、「水神下」・「川幅」はダム湖底に相当する。

● 亀測・川添・川原・藤浦・町浦・下浦

(伊深町)【川浦川の旧河道、川原、湿地】

伊深町の平野部は川浦川が氾濫して蛇行を繰り返して形成した。「天王」から「神明」にかけての地域は扇状地を形成し、扇頂部が「天王」で、「北沖」・「中沖」・「南沖」付近が扇端部である。「町浦」・「下浦」は扇端部に位置し、扇状地の伏流水と「寺洞」からの沢水により、湿地などが形成されやすい地域である。

平野南西部は、川浦川が蛇行して形成されたので川原の痕跡や河道の痕跡がみられ、「亀測」・「川添」・「川原」・「藤浦」などの地名がある(図24)。



図24 伊深町川浦川沿いの地形と地名

国土地理院の地図・空中写真閲覧サービスを使用した
 11976分の1「美濃加茂」1947年12月20日米軍撮影



図23 1909年木曾川沿いの地形図と地名

国土地理院の地図・空中写真閲覧サービスを使用した
 5万分の1「太田」1909年大日本帝国陸地測量部測定

(7) 谷・洞

● 長谷・薬師谷・新谷(伊深町)

● 金谷・漆谷(山之上町)

● 隠し洞・春日洞・寺洞など多数(山之上町)

【丘陵地の小規模浸食谷、水供給少短谷】

谷は全国各地に分布するが、山之上地域では、谷の地名は少なく、洞の地名が多い。

洞は岐阜県に異常に多く分布し、西日本では九州中央部に散在し、東北北部・東海に散見するが、他の東日本にはほとんどみられない。洞は山之上町から蜂屋町にかけて多い。地質的には、丘

陵地～丘陵性山地をなす蜂屋層分布地に多い。蜂屋層が浸食されて小さな谷を多数形成し、谷の氾濫原を利用して水田が開発され、集落が分布する。

谷や洞の地形や形態は地質によって大きな違いがみられる(図25)。美濃帯堆積岩類が分布する地域の谷は、大きい、深い、長い、数が少ない、などの特徴があり、急峻な地形を成す。蜂屋層が分布する地域の洞は、小さい、浅い、短い、数が多い、などの特徴があり、緩やかな丘陵性の地形を成す。

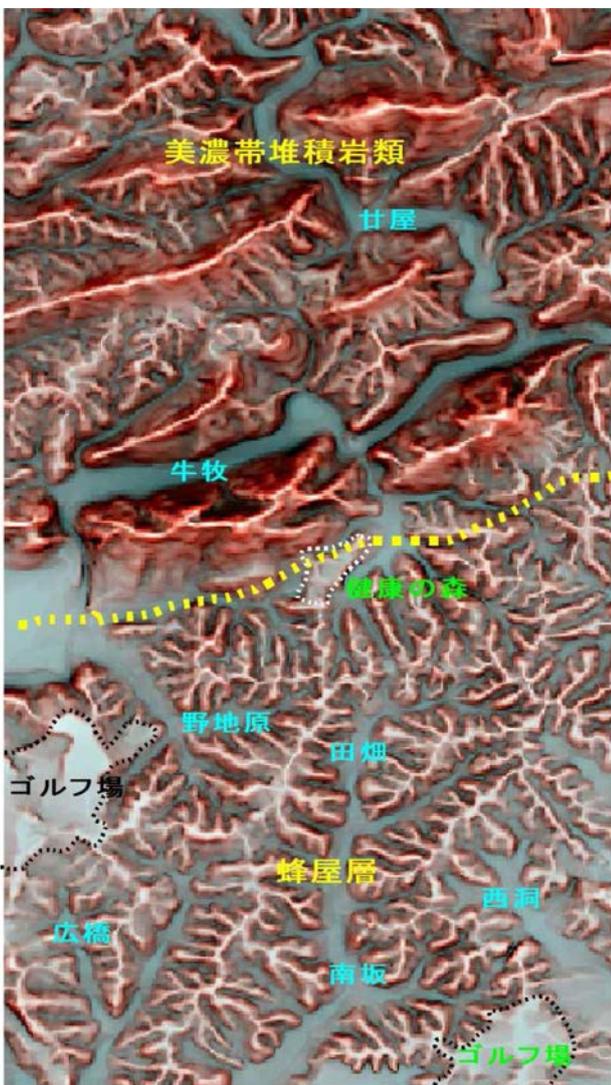


図25 蜂屋層と美濃帯堆積岩類の地形差

「赤色立体地図 © アジア航測株式会社を使用し、加筆した谷の発達形態と分布数が、地質によって明瞭に異なる

(8) 岩・山

● 小山・馬串山・箱岩(下米田町)

【独立峰・岩峰】

下米田町に、独立峰の「小山(観音)」・「馬串山」・「箱岩」が東西方向に配列する。この地域は浸食に強いチャートで形成され、チャートの分布方向に並んでいる(図26)。岩峰はチャート中の割れ目などの弱線が関係した浸食作用によって形成された。

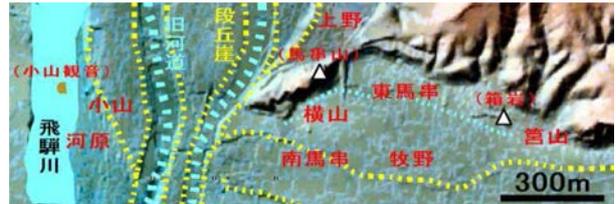


図26 山・独立峰と地名

グーグルアースの色別標高図を編集して加筆した

● 重ね岩(川辺町鹿塩)【巨岩】

蜂屋層の火山角礫岩の巨岩が平曾の北の稜線付近に祭ってある。このような産状は珍しくて貴重なため、川辺町の文化財に指定されている。

火山角礫岩層に挟まれる薄い砂岩層が風化したため、岩塊が重なっているように見えることから「重ね岩」と呼ぶ(図27)。



図27 重ね岩

5 地名と自然・文化・生活・災害

(1) 地名と文化・生活

可児市と多治見市の境に「柿下入会」という地名がある。現在は大規模団地が造成され、その団地名「臯ヶ丘」・「桜ヶ丘」が地名になっている。この団地の中に旧市町村境界があるが、そのことを知

らない住民が多い。高等学校の学区はこの旧市町村界で指定されるので、団地内における境界が問題になったことがある。

団地の名称は、聞いて良い印象を受けるものになりやすい。一般的に「旭ヶ丘」「緑ヶ丘」などは全国的にみられる。団地は、上下水道・道路などのインフラが整備されて好条件な居住地になっているが、本来は居住に適しない場所が多い。大規模な災害などでインフラが破壊されると、いろいろな課題・問題等が発生する可能性がある。

団地造成などで古来の地名が改変されることで、その地域の本来の特性が見えなくなる。言い換えると、行政により旧地名が新地名に変更されると地名が持つ本来の意味が忘れられ、消失する。

人は地名に歴史を託してきたことから、地名は文化遺産の要素を含む。地名の改変は文化財の破壊と同程度とも言える。さらに、地名には科学的な見方・考え方も含まれる大切な文化財である。安易な地名改変には課題が残る。地名はその土地におきた歴史や自然の特徴を子孫に伝えるメッセージを含む。開発などで地名を変えた結果、先人からのメッセージが伝わらず、災害に見舞われてはじめて本来の地形地質が示すメッセージを知ることがある。

2014年8月の広島土砂災害は、死者行方不明74人、家屋全壊133戸の大惨事となった。住民は「20年住むが、こんなことは思いもしなかった」と語る一方「あの地点が土石流の通り道だと聞いていた」の声もあった。花崗岩が風化した真砂土が混じった土石流に襲われた地域一帯は扇状地であり、その地名は「蛇落地」・「悪谷」などと呼ばれていたのである。地名が変わり、先人の教えが忘れられていたことも、被害をより大きくしたと言える。

私たちの周りにはこのような事例が、各地でくりかえしてみられる。ふるりの身近な自然や先人の知恵をよく理解することが肝心である。それには、郷土の地名、歴史、地形、地質の理解が、快適な生活や防災教育への近道である。

(2) 地名を探る

● 大木洞・森山団地(森山町・山之上町)

山之上 - 古井の高位段丘南端部と段丘崖一帯に森山団地地域があり、そこには「大木洞」・「梅子」・「上平」・「口洞」の地名がある。日当たり、大気の流れなど快適な環境にあるが、地域の一部に深い谷や池があったことは十分に知られていない(図29)。この地域に5つの池があり、大木洞は通称“三ツ池”と呼ばれていた。現在残っている池は美濃加茂高校下の1つだけである(図28)。また、大木洞の深さは最大40m以上で、長さは1km以上に達していた。

一般的に、大規模に造成した地域では、埋立地と掘削地で地盤の強さに大きな差が生じるので、地震対策に配慮が必要である。

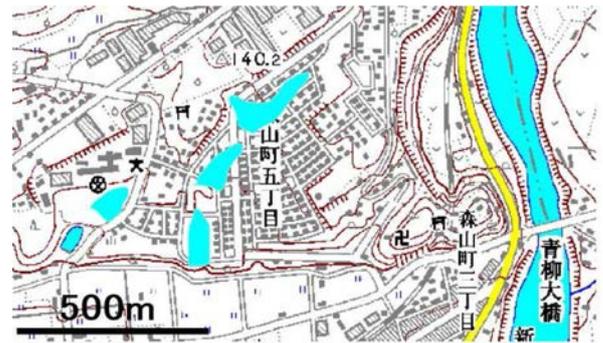


図28 森山団地の地形図

2010年国土地理院2.5万分の1地形図に
団地造成前の池を加筆した

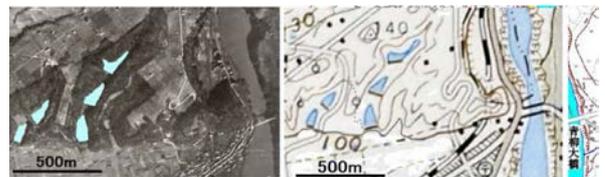


図29 空中写真と地形図

左：1948年米軍撮影 右：1962年国土地理院作成

● 大城・城廻(山之上町)【人為的特異地形】

山之上町佐口に「大城」・「城廻」の地名があり、その地域の地形地質を検証すると人為的で特異な地形がみられる。

地質は蜂屋層の最上部層に相当する凝灰質砂岩層が分布する。この砂岩は“さば土”と呼ばれ、乾燥と湿気で割れ目が発生するため、容易に掘削

できる地層である(図30)。

図31の桃色破線内には自然では見られない次の地形や特徴がある。西斜面の人工崖(高さ最大7m)、東斜面に階段状の微地形、径70cmの水がめ(図31の赤○)、平坦な山頂部、平坦部にみられる凹凸と小溝、などである。

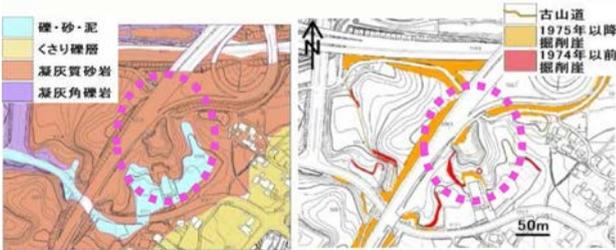


図30 地域の地質図

美濃加茂市地理情報システムの地形図を使用、加筆した

図31 大城地域の崖分布

美濃加茂市地理情報システムの地形図を使用、加筆した

● 大岩壁・七洞(可児市塩)【地震地形等】

可児市に「虹ヶ丘」と呼ぶ団地がある。団地地域には、「七洞」という高度差が50mを越える大きな谷が存在し、『大岩壁』と呼ぶ約30mの垂直な崖が存在した。団地北東端には、濃尾大地震を発生させた根尾谷断層の延長の梅原断層が位置し、濃尾地震で崖の崩壊、地割れ、巨岩落下などが発生した。団地造成工事で、崖の崩壊跡や地割れ跡、落下した巨岩は掘削・埋積されて消滅した。現在、その場所は道路等である(図32)。



図32 虹ヶ丘周辺地形図

2010年国土地理院2.5万分の1地形図を使用した



図33 空中写真と地形図

国土地理院を使用した(左:1982年 右:1973年)

「七洞」地域の地質は蜂屋層の凝灰角礫岩が主体のため、掘削した場所は地震に強いが、埋め立てた場所(図33)は揺れへの対策が必要となる。

本地域の西南西方には「大欠」・「欠」の地名があり、そこには美濃帯堆積岩の崩れやすい泥岩や珪質泥岩が分布することから、山崩れなどがあったことを示唆する。

6 まとめ

- (1) 人は自然の一員として長年、自然に適応して生活してきた。そして、ふるさとの自然現象の特徴を反映した地名を生み出し、現在に伝えている。
- (2) 地名は、ふるさとの地形、地質、歴史、環境、災害などの事実を語り伝える語句を含むことがある。
- (3) 地名は文化遺産であり、文化財と言える。安易な地名改変は文化財的価値を消滅させる可能性がある。
- (4) 身近な地名を大切にすることによって、ふるさとの歴史、文化、地形、地質、災害などの理解を深めることができる。

〔 しかの かんじ 岐阜大学応用生物科学部
非常勤講師
みずたに けい 岐阜地理学会会員 〕

文献

アジア航測株式会社(2017)赤色立体地図。
 Google Earth. 衛星写真・色別標高図。
 国土地理院. 地図・空中写真閲覧サービス. 国土地理院ウェブサイト。
 美濃加茂市民ミュージアム(2003)美濃加茂周辺地域の地質図. 企画展「美濃加茂にサイヤゾウがいた頃」図録, 52p.
 美濃加茂市. 美濃加茂市地理情報システム, Cloud GIS Service.
 鹿野勤次・水谷 敬(2017)美濃加茂地域の自然災害と地名—危険地名を読み解き減災の道を探る—. 美濃加茂市民ミュージアム紀要, 16, 1-15.
 Web版岐阜県地質図「ジオランドぎふ」(2014)地質各説. 岐阜県地質調査会, Web配信サービス。

美濃加茂市川合町の古墳出土須恵器とその背景

渡 邊 博 人

はじめに

ここに紹介する須恵器は、1990年頃に筆者が岐阜県美濃加茂市森山町在住のI氏から家に古い土器があるので見てほしいと依頼され、拝見したものである。I氏によれば「川合の古墳」から出土したと、I氏自身が入手されたものではなく、同氏の先代か先々代が入手されたとのことであった。その際に当時は美濃加茂地域から出土した古墳関係資料はあまり知られていなかったので実測図を作成させていただいた。

あれから30年近くが過ぎ、当地域の考古資料は遺跡の緊急発掘などにより増加し研究も進展しているが、こうした伝世資料は遺跡の性格や出土経緯に不明な点が多いことから取り上げられる機会が少なく、その多くは知られていない。

この須恵器が出土した川合地区もかつては多くの古墳が存在していたが、その実態については不明な点が多い。そのため遅ればせながら資料の少ない当該地区の一例としてここに資料紹介を行い、あわせて周辺地域の後期古墳時代の様相について若干の私見を述べてみたい。

資料の解説

須恵器高杯 (図1-1・2)

図1-1は、脚部は細い柱状からなだらかに裾部が開き、端部は丸く突き出して接地部は鋭い稜状を呈する。柱部の中位には2本の沈線が巡り、その上下に2段3方向の長方形透かし孔が施されるが、上部の透かし孔は内面まで届いていない。杯部は底部にやや丸みがあり、口縁部と底部の境にはかすかに2本の沈線が巡る。口縁部はやや外に開き端部は内側に段をなして丸くおさめる。焼成は良好で胎土は暗灰色を呈し、微砂粒、白色粒子、黒色粒子を多く含み粘性がある。杯底部内面中央に「又」字状のヘラ記号がある。口縁部径10.2cm、裾部径推定9.8cm。器高10.7cm。

図1-2は、脚部は細い柱部からなだらかに裾部

が開くがかすかに丸みを帯びている。裾の端部はやや角張るが接地部は稜状を呈する。柱部の中位には2本の沈線が巡り、透かし孔はない。杯部は底部にやや深みがあり、口縁部と底部の境には2本の沈線が巡る。口縁端部はやや丸みがあり上部で少し外反して端部を丸くおさめる。端部の内側は段状を呈し1本の沈線が巡る。焼成は良好で胎土は黒灰色を呈し、微砂粒、白色粒子を濃密に含み粘性がある。口縁部径10.0cm、裾部径8.8cm、器高11.6cm。

須恵器フラスコ形瓶 (図1-3)

胴部はほぼ球形を呈している。胴部の表面には直径9.5cmの円形の粘土板接合痕がみられ、裏面には中位まで回転ヘラケズリが施されている。口頸部は強くラッパ状に開き、口縁部の外面に一段稜を形成して端部は直角三角形に仕上げられている。口頸部外面中位には2本の沈線が巡る。焼成は良好で胎土は暗灰色を呈し、微砂粒、黒色粒子、白色粒子をやや多く含み粘性がある。口径7.4cm、胴部径14.0cm、胴幅13.6cm、器高19.8cm。

以上、3点の須恵器について解説を行った。先にも述べたように、これらの須恵器がどのような状況で出土したのかはわからないが、高杯は2点とも蓋を伴わない長脚形式の高杯で小型化が進んだタイプである。(2)に比べて(1)のほうに脚部の2段3方透かし孔や、裾端部の調整の鋭さなど古式な特徴が残る。猿投窯のH-15号窯式、陶邑窯のTK217型式に比定されよう。(3)のフラスコ形瓶は愛知県猿投窯や静岡県湖西窯において多く生産され、東海地方以西にはほとんど存在しない器種である。猿投窯のH-15号窯式以降、湖西窯の4期以降の生産で東海から関東、東北地方に広く分布するが、美濃においてはほぼH-15号窯式期に限り存在する器種である。これら3点の須恵器の年代はおよそ7世紀前半と考えられる。

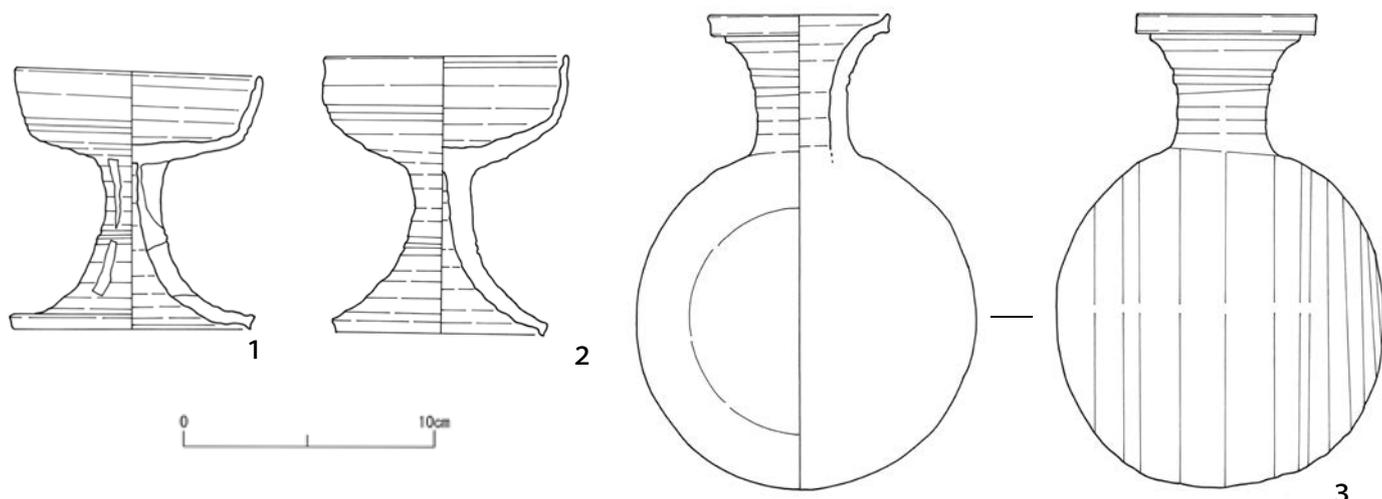
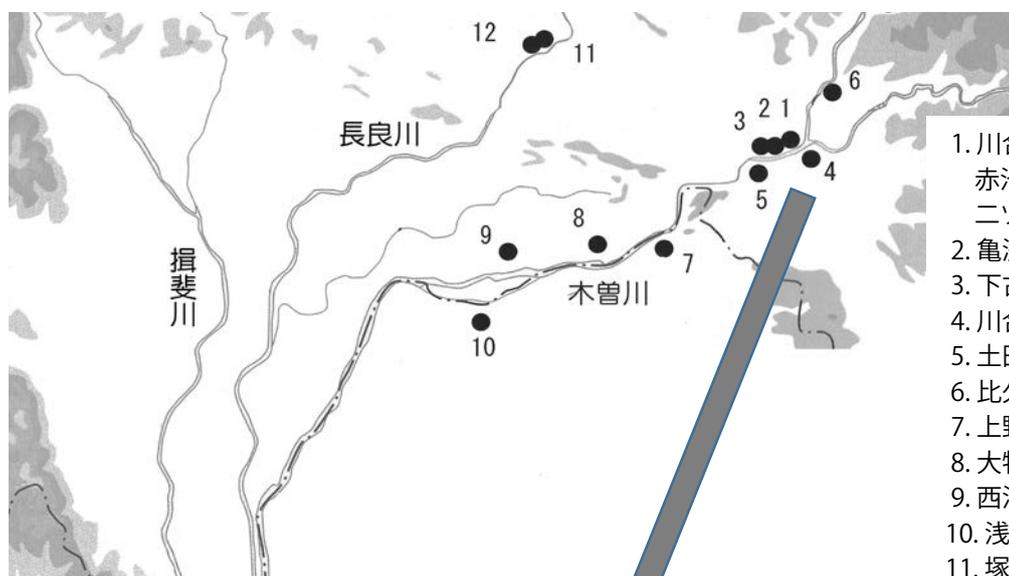


図1. 美濃加茂市川合町出土須恵器



1. 川合塚原古墳群 (美濃加茂市)
赤池古墳群
二ツ塚
2. 亀淵古墳群 (美濃加茂市)
3. 下古井塚原古墳群 (美濃加茂市)
4. 川合古墳群 (可児市)
5. 土田古墳群 (可児市)
6. 比久見古墳群 (川辺町)
7. 上野古墳群 (犬山市)
8. 大牧古墳群 (各務原市)
9. 西洞山古墳群 (各務原市)
10. 浅井古墳群 (一宮市)
11. 塚原古墳群 (関市)
12. 陽徳寺裏山古墳群 (関市)



図2. 美濃加茂・可児地域、木曾川流域の古墳位置図
(国土地理院5万分の1 美濃加茂)

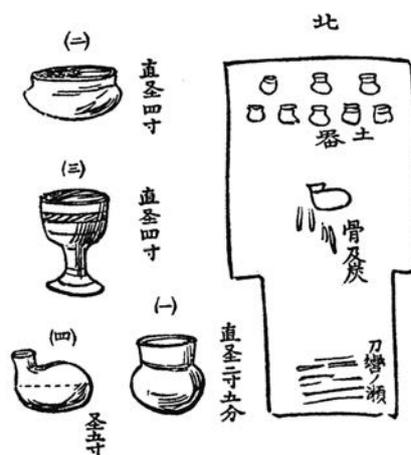


図3. 川合字塚原の古墳遺物出土図(註4より転載)

川合地区の古墳

須恵器を出土した「川合の古墳」についてふれてみたい。「川合」という地名は現在の美濃加茂市川合町のこと、昭和20年代までは加茂郡古井町上古井字川合という地区であった。地名は地区の東方で木曾川と飛騨川が合流することから生じたと考えられ、木曾川を挟んだ南側の可児市にも「川合」という地名がある(図2)。

美濃加茂市の川合地区から西方の下古井地区にかけては、かつて川合塚原古墳群(基数不明)、赤池古墳群(3基)、二ツ塚(基数不明)、亀淵古墳群(16基)、下古井塚原古墳群(10数基)など数十基の古墳が存在していた(註1)。それらは明治以降の道路建設や田畑の開墾などによって大部分が滅失し、現在では赤池古墳群に2基の古墳が残るのみである。しかし平成11年に赤池古墳群の西に位置する野笹遺跡Ⅱ地区の発掘調査において、墳丘が削平された横穴石室の古墳が発見され、赤池4号墳として調査が行われた(註2)。このことは過去に破壊され滅失したと思われていても、地下に埋もれた状態にある古墳が周囲に少なからず存在する可能性を示している。

発掘報告書によれば、赤池4号墳は幅約2mの周溝を有する直径約12mの円墳である。主体部は川原石積みの横穴石室で玄室はやや胴張りを呈している。石室の規模は報告書に掲載された実測図から読み取ると、石室の羨道部前方が不明のため現存長4.16m、玄室部長さ2.72m、奥壁幅0.76m、玄室最大幅1.08m、玄門部幅0.84m、羨道部現存最大幅1.0m、玄門部現高0.48mである(図4-9)。墳丘や横穴石室の規模からして小規模な古墳である。築造時期は出土した須恵器が猿投窯のH-15号窯式~I-101号窯式の小型の高杯と平瓶であることから7世紀前半代と考えられる。

文献にみられる古墳

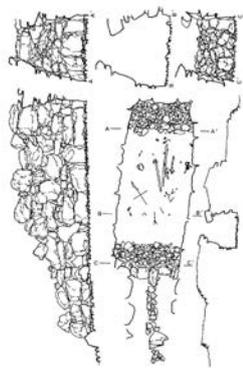
川合地区とその周辺では古墳の発掘調査例はこれ以外に無いが、過去に開墾等により発掘された記録が残されている。

明治から大正・昭和にかけて美濃加茂地域の遺跡や古墳を調査した林魁一氏は、明治31年に「美

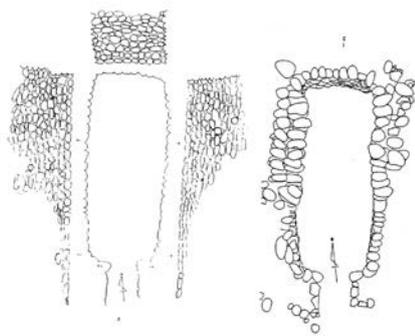
濃加茂郡古井村大字川合字塚原ノ古墳」(図3)(註3)において「(前略)塚原ト云フ所ニ圓形ノ古墳數多アリ其中大ナル者ハ周圍二三十間餘アリ此所ヲ開墾セントシテ邊渡(渡邊か・筆者注)某ノアル古墳ヲ發掘セリ此古墳ハ橢圓形ニシテ内部ニ石槨アリ石槨ハ丸石ニテ積ミ上げ蓋ハ大ナル切石ニシテ切り口ハ南ニアリ石槨ノ長サハ凡ソ十間中ハ凡ソ一間ニシテ中央ヨリ以北ハ巾二尺許リ廣クナリ高サハ四五尺ナリ(以下略)」と発掘時の様子を報告しており、出土遺物については「(一)圖ノ如キ土器四個(二)圖ノ如キ土器二十個餘(三)圖ノ如キコップ形ノ土器一個高杯ノ如キ土器數個(四)圖ノ如キ土器一個曲玉一個刀二本轡一組発見セリ」とされている。

大正10年刊行の『美濃國加茂郡誌』(註4)では、「(前略)古井村下古井字塚原には十数個の円形古墳ありたり、明治初年頃より道路の開墾又は土地の開墾にて漸次発掘せられ、以前に古墳累々たる山林も現今にては畑宅地となり原形を有するもの一もなしと云ふべく、今より明に其大を知る能はずと雖も、大なる古墳は直径十間、高二間程あり又僅に自然の高き所なりと思ふが如き古墳もありたり。其古墳には大抵丸石を以て積み上げたる石槨あり或は奥壁及び天井石のみに角ある岩石を用ひたるものもありたり。或一個の古墳を發掘せし時の状況によれば土地僅かに高く殆ど盛土なきを以て古墳と思わずして農夫之を開墾したるに丸石を以て積みたる、石槨内より壺三個偏口壺一個椀形土器二個高杯二個褐色素焼き土器破片及び金環一個銀環二個刀一本鉄片少量人骨等発見せり(以下略)」とされている。いずれも正式な発掘調査ではないが、おおよその古墳の規模や石室の形態、副葬品の内容などがわかる報告である。

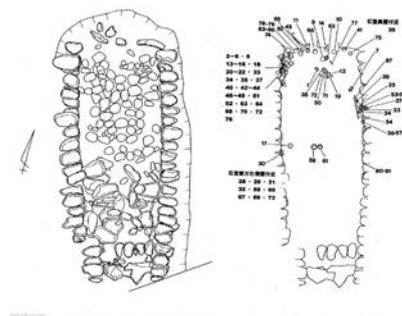
これらの記述内容からふたつの古墳の年代を考えてみると、古井村大字川合字塚原の古墳から出土した遺物では、刀や轡などの馬具類の副葬は美濃地域では6世紀末~7世紀初頭頃までの古墳にみることができ、直口壺や広口鉢の副葬は7世紀前半代まで、そして平瓶は7世紀初め頃から副葬が始まり、7世紀後半になると胴部の形態が丸味のない直線的な小型品が多くなる。そして古井村下古井字塚原の古墳から出土した「偏口壺」は現在の「提



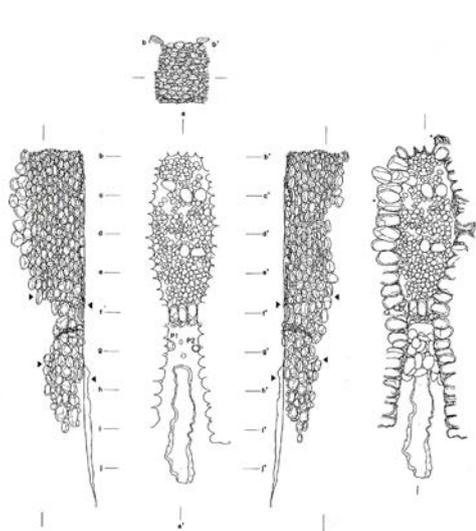
1. 各務原市西洞山6号墳(註12より)



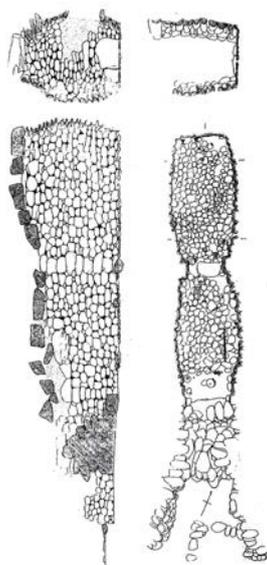
2. 関市陽徳寺裏山1号墳(註14より)



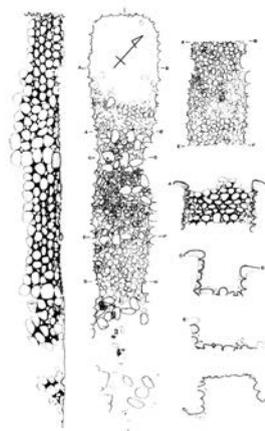
3. 川辺町比久見2号墳(註13より)



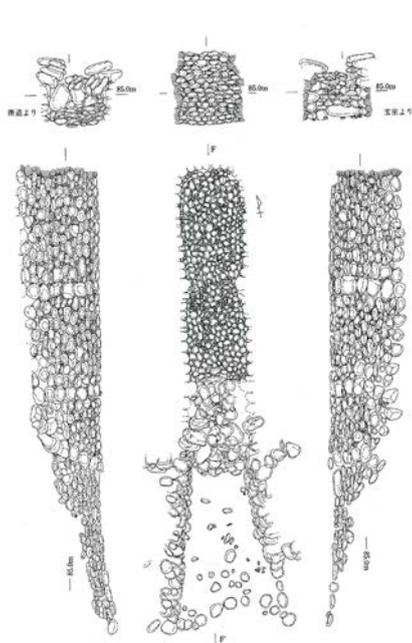
4. 各務原市大牧5号墳(註10より)



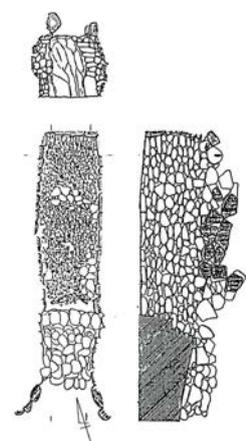
5. 名古屋市高蔵1号墳(註17より)



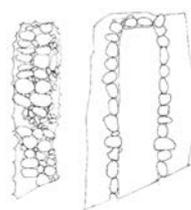
6. 一宮市浅井神社古墳(註8より)



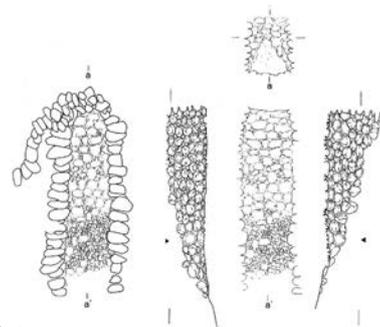
7. 可児市稲荷塚1号古墳(註6より)



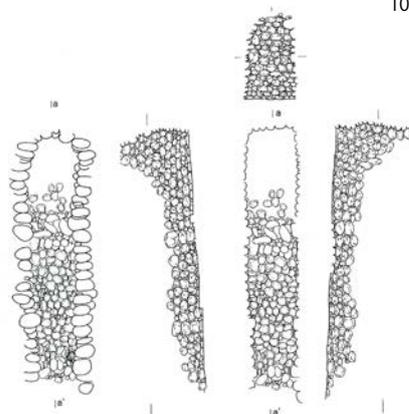
8. 関市塚原1号墳(註15より)



9. 美濃加茂市赤池4号墳(註2より)



10. 各務原市大牧2号墳(註5より)



11. 各務原市大牧3号墳(註5より)



図4. 横穴石室実測図

瓶」、あるいは「横瓶」のことであり、6世紀後半から7世紀前半の古墳から出土する例が多い。こうしたことから、ふたつの古墳の年代は6世紀後半から7世紀前半までの時期が考えられる。

川原石積み横穴石室について

少ない例ではあるがこれまで川合地区周辺で時期が判明、あるいは想定できる古墳はほぼ6世紀後半から7世紀前半代に築造されたと考えられる。そして林魁一氏の「石櫛丸石ニテ積み上げ蓋ハ大ナル切石ニシテ切り口ハ南ニアリ」という記述や『美濃國加茂郡誌』の「大抵丸石を以て積み上げたる石櫛あり」という記述から、ふたつの古墳の内部主体は赤池4号墳と同様な川原石積み横穴石室であった可能性が高い。「丸石」とは丸みの強い「川原石」のことで、大きさが30cmから1mほどの木曾川中流域に豊富に産する石材のことである。

川原石積み横穴石室は、川原石の小口面を壁面に揃えて積み上げ、石と石との隙間に大小の川原石を込めて間隙を無くするようにしているため、一見、乱雑な積み方にも見える。石室内から眺めると壁面から丸い川原石が突き出しているかのようである。木曾川中流域では美濃加茂市、可児市、各務原市、そして愛知県犬山市、一宮市に分布しており(図2)、赤池4号墳に類似する例としては各務原市大牧2号墳がある(図4-10)(註5)。

川原石積み横穴石室は、多くの場合、玄室の側壁が湾曲した胴張りを呈しており、玄室と羨道部の間に前室を設ける複室構造も知られている。複室構造の例としては可児市稲荷塚1号墳(図4-7)・2号墳や次郎兵衛塚3・5号墳(註6)、各務原市大牧3号墳(図4-11)(註7)、愛知県犬山市坂下1号墳(註8)、愛知県一宮市浅井神社古墳(図4-6)(註9)がある。

川原石積み横穴石室の築造時期は、猿投窯の蝮ヶ池窯式の蓋杯が出土した大牧5号墳が古い例であり(図4-4)(註10)、新しい例としては猿投窯のI-101号窯式の須恵器が出土した前述の大牧2号墳がある(註11)。なお、実測図にみられるように、時期が降る石室は小型化するとともに胴張りもあまり目立たなくなる。

横穴石室の石材と構築方法

川原石積み横穴石室は河川沿岸部に所在しているが、しかし、石材としての川原石が豊富に存在することだけが当該石室が出現した理由なのであろうか。

各務原市に所在する西洞山古墳群は、木曾川沿岸の西洞山(標高97m)南麓に築かれた30基以上からなる古墳群である(註12)。西洞山の南方は木曾川の氾濫原が広がり、現在の木曾川はここより南2kmのところを流れている。堤防が整備される江戸時代以前の木曾川流路は西洞山の南麓際まで及んでいたと考えられるので、石材としての川原石の入手は容易だったはずである。しかし、発掘された4基の古墳(3～6号墳)の内部主体は西洞山の基盤層であるチャートの角礫を用いた横穴石室で川原石は用いられていない。なお、3・4・5号墳の石室は幅が狭く細長い無袖式横穴石室だが、6号墳(図4-1)は片袖式横穴石室で玄室の幅は広い。このことは6号墳から雲珠や轡などの馬具類、特に雲珠が出土していることと関連するのかもしれない。

石材に川原石を用いてはいるが、石室の形態や構築方法が異なる例が美濃加茂市川合町から約4km遡った飛騨川左岸加茂郡川辺町に所在する比久見2号墳である(図4-3)(註13)。同古墳は発掘調査の時点で墳丘は削平され周囲の畑と見分けのつかない状態であったが、地表面下の地山層を掘り下げて構築された石室の基底部分が遺存していた。石室は玄室に規模の小さい羨道部が取りつく竪穴系横口式石室で、羨道部は地上から地下の玄室床面に向けて斜めに下る。

石室部分は奥壁の基底部に砂岩の山石が一個体残っていたが、全体に川原石を用いて構築されており、玄室の幅は広く側壁には緩やかな張りがみられる。川原石は一段一段、水平に積み上げられほぼ目地が揃っている。内部には須恵器や土師器、鉄鏃や直刀などの武器類が副葬されていたが馬具は存在しなかった。築造時期は出土した須恵器に型式差があり複数回の埋葬が想定されるが、最古型式は猿投窯の蝮ヶ池窯式に比定されることから6世紀中葉と考えられる。

比久見2号墳と同様な例として、関市の長良川右岸に所在する陽徳寺裏山古墳群がある(註14)。小高い尾根状の丘陵先端部に立地しており全体で19基の古墳が確認されている。1号墳(図4-2)は主体部が川原石積みの横穴石室で小規模な羨道部が付くが、形態や構築方法が比久見2号墳に類似している。4号墳も川原石積みであるが、1号墳よりやや小形の無袖式横穴石室である。両古墳は出土した須恵器から複数回の追葬が認められるが、最古型式が猿投窯のH-61号窯式で6世紀前葉に築造され、6世紀末から7世紀初頭の猿投窯H-15窯式、陶邑窯のTK217号窯式まで続いたと考えられる。

陽徳寺裏山古墳群から上流800mに位置する関市塚原古墳群(註15)はお互いの景観を目視できる位置にあるが、陽徳寺裏山古墳群1・4号墳とは石室の形態や構造が異なっており、立地する場所も河川敷に面する低地である。6世紀後半から7世紀後半まで続いた古墳群で37基が確認されている。そのうち1号墳(図4-8)からは猿投窯のH-44号窯式～H-15号窯式の須恵器が出土しており、同時期の木曾川中流域の川原石積み横穴石室と同様、川原石を小口積みにする構築方法だが、玄室の胴張りは弱くこの点が木曾川流域の川原石積み横穴石室との違いである(註16)。

木曾川と伊勢湾を結ぶ高蔵1号墳

石室の形態や構築方法については、同じ立地環境であっても古墳が築造された時期や地域の違いに被葬者やその集団の性格、階層が反映していると考えられる。また、地域が違っても同じ形態や構築方法の石室が造られることは、被葬者あるいは築造集団に何らかの共通する性格があると考えられる。6世紀後半という時期に木曾川中流域において、きわめて斉一性の強い川原石積み横穴石室が出現したことによるどのような意味があるのか、このことについて愛知県名古屋市熱田区の高蔵1号墳(註17)を取り上げたい。

高蔵1号墳の内部主体である横穴石室(図4-5)は、木曾川中流域の川原石積み横穴石室にきわめて類似するとともに、使われた石材も木曾川で産出する川原石であることが注目される。しかも前

述の大牧5号墳の石室の玄室と高蔵1号墳の石室は、平面形態と規模においてほぼ一致することが興味深い(註18)。

高蔵1号墳の築造時期は出土した須恵器から猿投窯のH-15号窯式期で6世紀末～7世紀初頭と考えられる。

高蔵1号墳が所在する熱田台地は、古墳時代には海岸線が台地際まで達していたと考えられ、被葬者は海上交通や漁労と関わりのある人物と考えられている。そしてどのような方法やルートを経たのかは不明であるが、近隣の庄内川ではなく、わざわざ木曾川の川原石を用いて同じ形態の石室を構築していることは、被葬者が木曾川中流域と深い関わりを有していた可能性が高いといえよう(註19)。

古墳時代後期の木曾川中流域

美濃加茂市の川合地区は木曾川と飛騨川の合流点であり、平安時代の『和名類聚抄』に記された美濃國賀茂郡「亘理郷」に比定されている。また木曾川対岸の可児市川合地区も同様に可児郡「亘理郷」の比定地であり、「亘理」とは「渡り」のことで川の渡河地点や渡し場を表すと考えられる。なお、可児市川合地区と対岸の美濃加茂市下米田地区の遺跡からは7～8世紀代の製塩土器が多く出土しており、伊勢湾で生産された塩が川を遡って陸揚げされた地点であった可能性が高い(註20)。そして時代は下るが、中世から近世、近代にかけて、愛知県一宮市、犬山市、岐阜県各務原市、美濃加茂市、可児市の木曾川中流域一帯は、筏流しや舟運、渡船によって密接に結ばれていた地域なのである。

こうした木曾川の水上交通の要地において、6世紀後半から7世紀にかけて流域全体で数百基に及ぶと思われる川原石積み横穴石室墳が築かれ、そのなかで大牧古墳群の大牧1号墳(全長約45m、註5に同じ)、同じくふな塚古墳(全長約45m、註21)が木曾川沿岸を代表する最後の前方後円墳として出現している。

大牧1号墳は後円部に畿内型両袖式横穴石室を有し、チャートや硬質砂岩の大型山石からなる玄室には木曾川流域最大の組合せ式家形石棺を納めていた。副葬品には須恵器のほか鞍金具や雲珠、杏

葉、辻金具、轡、鏡などの馬具、挂甲、鋒、鉄鏃、刀子などの武具・武器類、そしてガラス製玉類やトンボ玉、銀製空玉、金環などがあり、盗掘を受けてはいたが豊富な内容を示していた。築造時期は玄室から出土した須恵器の長脚無蓋高杯と壺が陶邑窯のTK43型式～TK209型式、後円部盛土最下層、或いは墳丘下黒色土層中から出土した須恵器蓋杯や壺が猿投窯H-4号窯式からH-15号窯式に比定できるので6世紀後葉代と考えられる。

もう一方のふな塚古墳は、前方部と後円部にそれぞれ内部主体部を有する古墳である。後円部は大正時代から昭和初期にかけて破壊を受け内部主体も滅失しているが、その際に出土した馬具の杏葉は、透かし彫りの双鳳文と蟠龍文の優品で6世紀後半には下らないとされている。一方、前方部には木曾川に向けて開口する川原石積み横穴石室が検出されており、玄室には組合せ式家形石棺が納められていた。玄室の天井は硬質砂岩の山石が用いられていたが、側壁は玄室・羨道部・前庭部に至るまですべて川原石で構築されていた。盗掘により副葬品は土器類以外ほとんど失われていたが、玄室から出土した須恵器は猿投窯のH-15号窯式以降である。位置からすれば後円部の主体部が前方部より先行すると考えられるので、後円部から出土した杏葉の型式を考え合わせるとふな塚古墳は6世紀後半でも古い時期に築造されたと考えられる。そうすると、ふな塚古墳は大牧1号墳と同時期か、あるいはその先代の首長墓と考えられる。

このように木曾川中流域の各務原市において最後の前方後円墳が築造されたあと、さらに上流の可児市川合古墳群において次郎兵衛塚1号墳(註6に同じ)が7世紀前半の大型方墳(一辺30m)として出現している。同古墳は二段築成の墳丘全面が川原石の葺石で覆われており大牧1号墳と同様に横穴石室の玄室が奥壁と天井石に山石が用いられ、側壁部分は大型の角張った川原石で構築されている。石室の規模や石材からして当地域の首長墓にふさわしい古墳である。墳形が方墳であることは、畿内中央において前方後円墳が造られなくなり、天皇陵や蘇我氏などの墓が大型方墳へと移

行することに連動するものと考えられる。地域は異なるが同じ木曾川流域のなかでこうした最後の前方後円墳から最初の大型方墳の出現という動きについては、それぞれの被葬者が古代の木曾川の水運に関わったかどうかは明らかではないが、大牧1号墳やふな塚古墳に納められた組合せ式家形石棺の石材が可児地域で産する凝灰質砂岩であることから、両地域の間にも木曾川を介してなんらかの交流が存在したことが考えられる。さらに前述の名古屋市高蔵1号墳の築造がふな塚古墳、大牧1号墳、そして次郎衛塚1号墳の築造・埋葬時期と重なることから、そこに6世紀後半代に木曾川中流域を基盤として畿内勢力と結びつきを強め、有力化した新興の首長層とその同族集団の存在を想定することが可能ではないだろうか。

(わたなべ ひろと 元各務原市埋蔵文化財調査センター所長)

註

- (1) 『美濃加茂市史 通史編』美濃加茂市 昭和55年
- (2) 岐阜県文化財保護センター『野笹遺跡II・赤池4号古墳』岐阜県文化財保護センター調査報告書第71集 2002年)
- (3) 『美濃國加茂郡誌』岐阜県加茂郡役所編 大正10年
- (4) 林魁一「美濃加茂郡古井村大字川合字塚原ノ古墳」『東京人類學會雜誌』第147号 明治31年
- (5) 『大牧1号墳発掘調査報告書』各務原市埋蔵文化財調査センター 平成15年)
- (6) 『川合遺跡群』可児市教育委員会 平成6年
- (7) 註5に同じ
- (8) 『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』愛知県 平成17年
- (9) 註8に同じ
- (10) 『大牧5号墳発掘調査報告書』各務原市埋蔵文化財調査センター 平成13年
- (11) 註5に同じ
- (12) 『西洞山古墳群発掘調査報告書』各務原市教育委員会 平成3年
- (13) 渡辺博人「岐阜県川辺町比久見2号墳の発掘調査」『美濃の考古学』第5号 美濃の考古学刊行会 2002年
- (14) 大江まさる『陽徳寺裏山古墳群』関市教育委員会 1976年
- (15) 篠原英政『塚原遺跡・塚原古墳群』関市教育委員会 1989年

- (16) 長瀬治義「第4章 古墳時代から奈良時代」『可児市史 第1巻 通史編 考古・文化財』可児市 平成17年
- (17) 榑崎彰一「名古屋市熱田区高蔵第1号墳の調査」『名古屋大学文学部研究論集XI』1955年
- (18) 大牧5号墳の玄室の長さは3.80m、奥壁幅1.0m、玄室最大幅1.48m、玄門幅0.72mである。高蔵1号墳は複室構造の横穴石室であり、後室の長さ2.90m、後室奥壁幅1.20m、後室中央幅1.50m、前方幅1.08m。前室の長さは3m、前室奥壁幅1.10m、前室最大幅1.48m、前方幅1.06mである。側壁の張り出した形態と最大幅がほとんど一致している。
- (19) 伊藤秋男「川原石積古墳と木曾川の水運」『木曾川学研究 第9号』各務原市役所 木曾川学研究協議会 平成24年)
- (20) 『針田遺跡・東坪之内遺跡 田中浦遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書 第70集 2001年
- (21) 『ふな塚古墳発掘調査報告書』各務原市埋蔵文化財調査センター 平成12年

尾崎遺跡 25 号住居址出土資料について

磯谷 祐子

はじめに

美濃加茂市蜂屋町に所在の尾崎遺跡は、開析によって舌状台地の地形を呈した木曾川、飛騨川の高位段丘上に展開する集落遺跡である。当該地には現在美濃加茂市民ミュージアムがあり、本遺跡は、その建設に先立って、平成5年7月から14年3月まで同市教育委員会による発掘調査が行われた。その南では、平成4年から5年まで(財)岐阜県文化財保護センターによる国道41号線美濃加茂バイパス建設に伴う発掘調査が行われ、弥生時代中期～奈良時代、中世に属する遺構が検出されている(註1)。

周辺では、南へ0.5kmの地点に太田大塚古墳(前期、円墳、規模不明)、西へ1.4kmの地点に矢田廃寺跡(古代)があり、南側段丘下には条里水田が確認されている。

本遺跡の資料に関しては、報告書刊行後も継続している資料調査の成果を踏まえ、随時紹介を行ってきたが、今回は報告書には写真のみの掲載となっていたものの多い25号住居址に関わる資料に焦点を当てて紹介したい。

25 号住居址出土資料

25号住居址は、本遺跡の展開する舌状台地の頂部に位置し、遺存状態の比較的良好な遺構であったが、発掘調査時の測量作業の遺漏のため、報告書に十分な遺構実測図を掲出できなかった。また、同遺構出土資料に関しても、紙面の都合等により写真図版のみとなっていたものが多くあり、今回改めて実測図を掲出することとした。

以下に各資料について述べていくが、その内須恵器に関しては、渡辺博人氏の美濃における須恵器編年に準拠して年代観などを加えている(註2)。

図2、3の1～28は、25号住居址内より、全部ないしは一部が出土した資料である。

1、2は、カマド部分から出土した土師器甕である。1は推定復元口縁部径13.6cm、残存部高4.4cmと

なり、口縁部小片1と胴部破片多数があるが、底部を欠く。凶化できなかった胴部は下位ほど器肉が厚く、1.1cm程になる。胎土は密で、白色砂粒が多く、黒色のガラス質粒も若干含む。焼成状態はやや良く、二次的な被熱によりやや脆くなっている。色調は赤褐2.5YR5/6～橙7.5YR6/6、一部灰5Y4/1を呈する。調整は内外面共にナデを施す。2は推定復元底部径4.0cm、残存部高5.1cmとなり、1片で、底部から胴部下位にかけての1/4程度の部分となる。胎土は密で、2.0mm程度までの砂粒を若干含む。焼成状態はやや良く、色調は、外面で橙7.5YR6/6、内面で黄灰2.5Y5/1～2.5Y4/1を呈する。内外面共に平滑にナデ調整を施し、厚手で重量感がある。

3～5は貯蔵穴内から出土し、3、4は土師器甕、5は須恵器坏蓋である。3は底部径6.9cm、残存部高4.1cmを測り、1片で底部から胴部下位の全体となる。胎土はやや密で、白色微粒と5.0mm程度までの砂粒を多量に含む。焼成状態はやや良く、色調は外面が明赤褐2.5YR5/6～5YR5/6、内面が暗灰黄2.5Y5/2を呈する。外面は多量の砂粒により器面の荒れが甚だしいが、内面は砂粒が少なく比較的平滑である。4は小片のため口縁部径が不明であるが、12cm程度と推測され、残存部高3.1cmとなる。口頸部の細片が多数見られる。胎土は密で、微砂粒をやや多く含む、焼成状態は良好である。色調は内外面が灰10Y5/1、器肉内部がにぶい橙7.5YR7/3を呈する。5は推定復元口縁部径13.9cm、器高3.5cmとなり、口縁部3/4程度を欠く。胎土はやや密で7.0mm程度までの白色砂粒を若干含む、器肉が層状を呈する。焼成状態は良い。色調は灰10Y6/1～5/1に灰白10Y8/1が混じる。内外面に回転ナデ調整を施し、やや粗雑な作りである。胎土は美濃須衛窯産のものに類似するが、技法的には畿内系TK217型式に併行すると見られる。紀要第3集第3図の8に既に報告がある(註3)。

6～9は、住居址内北東部から出土し、6は土師器甕、7～9は須恵器坏である。6は口縁部径

12.3cm、底部径5.0cm、器高12.7cmを測り、口縁から胴部の1/4程度を欠く。胎土はやや粗く、4.0mm程度までの円角礫砂粒を多量に含む。焼成状態はやや良い。色調はにぶい黄橙10YR6/4、外面の一部で黒褐2.5Y3/1を呈する。口縁部内外面にヨコナデ、胴部外面に縦位のハケメ、胴部内面に不整方向のナデ調整を施す。報告書図版25の8に写真の掲載がある。7は推定口縁部径13.6cmとなり、全体の1/2程度を欠く。胎土はやや密で、白色微砂粒少量と、白色土粒を若干含む。焼成状態はやや甘い。色調は外面が口縁から受部の下までオリーブ灰2.5GY6/1、以下で灰白5Y7/1～灰5Y6/1に灰白2.5Y8/2が筋状に混じる。内面は灰白5Y7/2～灰オリーブ5Y6/2を呈する。口縁部内側に段を有し、外面受部下より下位に回転ヘラケズリ、その他の部分に回転ナデ調整を施して丁寧な作りである。H-61号窯式の猿投窯産とみられる。紀要第3集第3図の10に報告がある。8は推定復元口縁部径13.5cm、残存部高4.7cmとなり、全体の1/2程度を欠く。胎土は密で、2.0mm程度までの円角礫砂粒と白色微砂粒を多く含む。焼成状態は良好である。色調は外面が暗青灰5B4/1～5PB5/1を呈し、内面は青灰5PB5/1に灰白10Y7/1が筋状に混じる。また、器肉内部では灰褐7.5YR6/2を呈する。肩部外面と口縁部内面に稜を有し、外面肩部より上位に回転ヘラケズリ、それ以外に回転ナデ調整を施す。内面中央に当て具痕が見られる。陶邑窯MT15～TK10型式に併行のものと思われる。報告書図版25の2に写真の掲載がある。9は口縁部径12.4cm、器高4.7cmを測り、ほぼ完形である。胎土は密で、砂粒は少ない。焼成状態は良好である。色調は暗青灰5B4/1～5PB4/1に灰白N7/が筋状に混じる。口縁部はやや内傾気味に立ち上がってから垂直に伸びる。底部はやや丸みを持った平底になる。内外面共に回転ナデ調整を施し、内面中央に当て具痕が見られる。内外面に摩耗が見られ、特に外面腰部で顕著である。陶邑窯TK43型式に併行と思われるが、やや古相である。紀要第3集第3図の9に報告がある。

10～12は住居址内中央部からの出土であるが、10と12は遺構外包含層からも一部が出土している。

3点共に須恵器坏である。10は推定復元口縁部径14.6cm、器高3.2cmを測り、口縁部1/2程度を欠く。胎土は密で、1.0mm程度までの砂粒を若干含み、黒斑の溶出が少々見られる。焼成状態はやや良い。色調は外面下半部で灰10Y5/1、一部オリーブ黒10Y3/1、上半部で灰7.5Y6/1を呈し、内面では灰10Y6/1に灰10Y4/1と灰白10Y7/1が混じる。外面上位1/2程度の範囲に回転ヘラケズリ、他の部分に回転ナデ調整を施す。扁平な形態で、外面肩部に明瞭な稜、口縁部内面に段を有す。H-61号窯式の猿投窯産とみられる。紀要第7集第3図の2に報告がある(註4)。11は口縁部径11.8cm、器高4.6cmを測り、ほぼ完形である。胎土はやや粗く、3.0mm程度までの白色円礫砂粒を多量に含み、黒斑の溶出がやや多い。焼成状態は良い。色調は青灰5PB6/1～5/1と灰N6/～5/の間である。口縁部内面に沈線線を有し、外面受部直下以下に回転ヘラケズリ、他の部分に回転ナデ調整を施す。系統の異なる技法が混在して産地は不明だが、H-61号窯式新段階～蝮ヶ池窯式に併行すると考えられる。報告書掲載の28号住居址出土坏身(第49図の9)に類似している。報告書図版25の3に写真の掲載がある。12は推定復元口縁部径12.5cm、残存部高3.9cmとなり、全体の1/3程度があるが、口縁部は僅かである。胎土はやや密で、白色微粒を若干含む。焼成状態はやや良い。色調は全体に灰N4/、外面の一部で暗灰N3/、内面で筋状に灰10Y6/1、器肉内部で灰赤2.5YR5/2を呈する。全体に回転ナデ調整を施す。やや小型ながら、口縁部の成形は丁寧で、肩部の屈曲が明瞭であり、9と同時期のものと思われる。内外面共に摩耗が顕著である。紀要第3集第3図の7に報告がある。

13～15は、住居址内南西部角から出土した土師器甕である。13は底部径5.9cm、残存部高13.5cmを測り、口縁部を欠く全体の2/3程度がある。胎土はやや密で、2.0mm程度までの白色砂粒、角礫砂粒をやや多く含む。色調はにぶい褐7.5YR5/4、外面の一部で黒7.5YR2/1、器肉内部で褐灰10YR4/1を呈する。報告書第49図の6に既出の資料である。14は口縁部径16.2cm、胴部径20.1cm、底部径5.4cm、器高27.6cmを測り、ほぼ完形である。

胎土はやや密で、3.0mm 程度までの円角礫砂粒を多量に含む。焼成状態はやや良い。色調は外面で褐7.5YR4/6、下位の一部でにぶい赤褐2.5YR4/4、内面で灰黄褐10YR4/2を呈する。外面は口頸部と底部にナデ、胴部にハケメ、内面には頸部に横位ハケメ、他の部分にナデ調整を施す。平底で、薄手の作りである。報告書第49図の7に既出の資料である。15は口縁部径20.4cm、胴部径21.7cm、残存部高18.8cmを測り、底部を欠く。胎土は密で、2.0mm 程度までの円角礫砂粒をやや多く含む。焼成状態はやや良い。色調はにぶい黄橙10YR6/4、外面の一部で黒褐10YR3/1、内面は口縁部で灰黄褐10YR6/2、下位でにぶい褐7.5YR5/4を呈する。外面上位に斜位、下位に横位のハケメ、内面にナデ調整を施す。やや厚手である。紀要第3集第3図の12に報告がある。

16～26は住居址内南東部から一部が出土し、16～18、23以外は遺構外包含層出土の資料と接合関係の有るものである。16、17は土師器、18、19は須恵器坏蓋、20、22は須恵器短頸壺、21は須恵器直口壺、23は須恵器碗か鉢、24は須恵器甗、25、26は須恵器提瓶である。16は推定復元底部径3.4cm、残存部高1.3cmとなり、胴底部の小片9片がある。胎土は密で、2.0mm 程度までの白色円角礫砂粒をやや多く含む。焼成状態は良好である。色調はにぶい黄橙10YR7/3、一部で褐灰10YR4/1、外面の一部で赤褐2.5YR4/6を呈する。内外面共にナデ調整を施し、厚手で、平底である。17は推定復元底部径7.6cm、残存部高1.4cmとなり、胴底部小片15片がある。胎土はやや密で、角礫の白色微粒を多く含む。焼成状態はやや良い。色調は外面でにぶい赤褐2.5YR4/4、内面で褐灰7.5YR5/1を呈する。外面は平滑にナデ、内面は不整方向のナデ調整を施す。18は推定復元口縁部径13.2cm、残存部高4.1cmとなり、小片7片で肩部以下の小部分がある。胎土はやや密で、白色微粒をやや多くと微砂粒を少量含む。焼成状態はやや不良。色調は灰白10Y7/1～灰10Y6/1、外面一部で灰10Y5/1を呈する。口縁部内面に明瞭な沈線、外面肩部に稜と段を有し、肩部より上位に回転ヘラケズリ、他に回転ナデ調整を施す。猿投窯蝮ヶ池窯式の頃に

併行するとみられる。19は残存部高1.4cmとなり、2片で頂部1/2程度の部分がある。胎土はやや密で、白色微粒を少量含む。焼成状態は良い。色調は灰白N7/～灰6/と明紫灰5P7/1～紫灰5P6/1の間である。頂部外面回転ヘラケズリ後、内外面に回転ナデ調整を施す。破片2点共に二次的な被熱の痕跡があり、内1点にはさらにもう一度断面から内面にかけての被熱が見られる。蘇原6号窯式の美濃須衛窯産の可能性もある。20は口縁部径9.3cm、胴部径14.4cm、器高10.4cmを測り、全体の2/3程度の部分がある。胎土は密で、白色微粒を若干含む。焼成状態は良い。色調は外面が灰5Y5/1、内面が青灰5PB5/1～灰N5/を呈し、筋状に灰白N7/が混じる。肩部が張り、口縁部は直立して、端部が微かに内弯気味になる。底部に回転ヘラケズリ、他の部分に回転ナデ調整を施し丁寧な作りである。H-115号窯式の猿投窯もしくは尾北窯産とみられる。報告書第66図の9に既出の資料である。21は推定復元口縁部径8.0cm、同胴部径13.1cm、器高10.3cmとなり、全体の1/3程度の部分がある。胎土は密で、白色微粒を若干含む。焼成状態は良い。色調は外面が灰10Y6/1、内面が灰10Y6/1～7/1の間を呈する。肩部がやや丸みを持って張り、口頸部は直立して20に類似の形状を呈するが、やや長い。外面は頸部中位に2条の沈線、胴部上半部に回転カキメ調整、以下に回転ヘラケズリ調整を施し、内面は回転ナデ調整を施す。口縁端部、外面肩部以下、内面底部の摩耗が顕著である。20と同時期のものである。22は推定復元胴部径15.8cm、残存部高7.7cmとなり、胴部1/4程度の部分がある。胎土はやや密で、1.0mm 程度までの白色粒をやや多く含む、微砂粒も若干含む。焼成状態はやや不良である。色調は外面が灰10Y6/1、内面は灰N4/～暗灰N3/を呈する。肩部外面に1条の沈線を有し、内外面共に回転ナデ調整を施す。内面全体が黒く変色している。20と同時期のものである。23は推定復元口縁部径20.4cmとなり、口縁部小片、底部片各1点がある。胎土は密で、白色微粒、微砂粒をやや多く含む。焼成状態は不良である。色調は口縁部外面が明褐灰5YR7/2、一部黄灰2.5Y6/1、内面が明褐灰5YR7/1で赤褐10R5/3が筋状に混じる。底部

は外面が灰白10YR8/2と赤10R4/6が混じる浅黄橙7.5YR8/3、内面は灰黄褐10YR6/2を呈する。口縁部内面に浅いが明瞭な沈線、外面中位に鋭い稜を有し、底部外面に回転ヘラケズリ調整後、全体に回転ナデ調整を施す。焼成は甘い、成形技術は確かです。丁寧な作りになっており、粗悪品と言うより、意図的に軟質に仕上げていた可能性もある。24は胴部径9.4cmを測り、口縁部直下から胴部の1/2程度の部分がある。胎土はやや密で、白色微粒を若干含む。焼成状態はやや不良である。色調は外面頸部で青灰5B6/1、それ以外で灰10Y6/1を呈し、外面一部に灰オリーブ5Y4/2の自然釉が見られる。口縁部直下、頸部、肩部に沈線を有するが、文様は見られない。胴部外面下半部に回転ヘラケズリ調整、他に回転ナデ調整を施す。やや作りが甘く厚手である。陶器窯TK217型式古段階に併行するとみられる。25は残存部高18.3cmとなり、口頸部と胴部の1/4程度を欠く。胎土はやや密で、白色微粒と円角礫微砂粒を若干含み、微細な黒斑の溶出が若干見られる。焼成状態は良い。色調は外面で黄灰2.5Y5/1～6/1、内面で灰白7.5Y7/1～灰7.5Y6/1を呈する。胴部が丸く張りを持ち、一方の面が平らになって、口頸部の径は大きい。外面には平行タタキの後、沈線で区画した文様帯を残して回転ナデ調整を施し、内面には不整方向のナデ調整を行う。外面全体に摩耗が顕著である。文様帯を持つのは美濃、尾張の製品の特徴であり、H-115号窯式に併行するとみられる。26は口縁部径5.8cm、器高16.3cmを測り、胴部の一部と把手を欠く。胎土はやや密で、3.0mm程度までの角礫白色粒をやや多く含む。焼成状態は良い。色調は青灰5PB5/1と灰白10Y7/1が互層を為し、一部で灰10Y4/1を呈する。口頸部中位に粗雑な沈線を有し、華奢な把手がつく。外面の一面に回転ヘラケズリ調整、他に回転ナデ調整を施す。内面に焼成時の剥離痕が多く見られる。H-115号窯式の尾張産とみられる。

27、28は25号住居址内覆土からの出土で、27は須恵器長脚二段無蓋高坏、28は須恵器坏身である。27は推定復元口縁部径11.0cm、残存部高2.7cmとなり、口縁部～腰部の小片である。胎土はやや密で、白色微粒、微砂粒を若干含み、黒斑の溶出

が若干見られる。焼成状態は良好で堅緻な仕上がりである。色調は外面で灰10Y6/1～5/1、内面で灰N6/、口縁部付近で灰N5/を呈する。口縁部内面に微かな段、中位外面に鋭い稜を有し、全体に回転ナデ調整を施す。TK217型式併行とみられる。28は推定復元口縁部径11.0cm、残存部高2.9cmとなり、口縁部～腰部の小片である。胎土はやや密で、1.5mm程度までの白色砂粒を少量含む。色調は外面で灰10Y6/1に灰白7.5Y8/2と暗灰N3/が筋状に混じり、内面で灰N6/に灰白10Y7/1が筋状に混じる。口縁部は内傾気味に立ち上がってから垂直になり、受け部は横方向に小さく出る。外面腰部以下に回転ヘラケズリ調整、他に回転ナデ調整を施す。口縁部端部に若干の摩耗が見られる。H-115号窯式に併行するとみられ、胎土は猿投窯産のものに類似するが、技法的に畿内系の要素が見られる。

なお本住居址からは、今回紹介の資料以外に、紀要第16集の22の須恵器無蓋高坏と報告書図版37の2の須恵器甕の一部が出土しているが、高坏に関しては重複となるので割愛した。甕については、いずれ稿を改めて紹介したい。

25号住居址の遺構について

前述のごとく、25号住居址については遺構実測図の不備のため、報告書に十分な図が掲出できず、南西部角の遺物出土状況のみの掲載となっていた。

今回、図4に遺構全体の平面図および断面図、各部の断面図を掲出しているが、これは遺構内の遺物出土状況を検討するにあたって参考に資するために、一部概略を復元して加筆したものである。平面図中の破線部分がそれに該当する。また、貯蔵穴と柱穴の断面図は実測によるが、セクション・ポイントの記録を欠いている。

規模などについては報告書に記載があるので、ここでは繰り返さず、覆土の状態に関して説明を加えるにとどめたい。

住居址全体の覆土では、1から13までの主たる層位が認められた。1は黄褐色土で、砂礫はあまり含まず、やや軟らかい。2は暗褐色土に橙褐色土が混じり、2.0cm程度までの砂礫が多く、焼土、焼礫、炭化物もやや多く含んで、やや硬い。3は暗褐

色土で、2、5より暗く、赤土が混じらない。1.5cm 程度までの砂礫をやや多く含む。4は3よりやや明るく、0.8cm 程度までの砂粒をやや多く含む。5は暗褐色土で、砂礫を含み、炭化物、焼土もやや多く含む。6は暗褐色土で、5に似るが砂礫が小さく少ない。焼土、炭化物を若干含み、やや硬い。7は6より暗いが類似しており、やや硬い。8は茶褐色土で、2より赤みが強く、10より暗い。1.0cm 程度までの砂礫がやや多く、炭化物、焼土粒も少量含む。9は8より暗く、1.0cm 程度までの砂礫をやや多く含んで2に類似し、硬く締まる。10は黄茶褐色土で、2.0cm 程度までの砂礫を多く含み、炭化物、焼土細粒も若干含んで、硬く締まる。11は暗褐色土で、0.7cm 程度までの砂礫、0.7cm 程度までの炭化物粒、焼土粒を多く含み、やや軟らかい。12は2に類似するが暗く、やや大きな炭化物粒を含み、1と同程度の硬さである。13は12より明るく、1.0cm 程度までの砂礫を多くと、焼土粒、炭化物粒を若干含み、12より硬い。

カマド部分では、1から6までの主たる層位が認められた。1は暗茶褐色土で、2.5cm 程度までの砂礫を多く含み、やや硬く粘性がある。2は暗褐色土で、0.5cm 程度までの白色砂粒、やや大型の炭化物粒、焼土小ブロックを多く含み、やや硬く粘性がある。3は暗褐色土で2より明るく、2.0cm 程度までの砂礫、炭化物粒を若干含む。4は黄茶褐色土で、1.0cm 程度までの砂礫を多くと炭化物細粒、焼土細粒を少量含み、硬く粘性がある。5は黄褐色土で、1.5cm 程度までの白色砂礫を多量に含み、硬く粘性がある。6は暗褐色土で、2.0cm 程度までの砂礫、炭化物細粒、焼土細粒を多く含み、やや硬く、やや粘性がある。

貯蔵穴では1から5までの層位が認められた。1は茶褐色土に黄色土が若干混じり、1.5cm 程度までの砂礫を多くと炭化物を若干含む。やや硬く締まり、粘性がある。2は1より黄色みが強く明るい。1.0cm 程度までの砂礫を多く含み、炭化物はあまり含まない。3は暗茶褐色土で、1、2より暗く、0.5cm 程度までの砂粒をやや多く含む。炭化物も若干含むが、1より小さく少ない。やや硬く、粘性がある。4は暗褐色土で、黄色土が若干混じるが、1～3よ

り暗い。0.5cm 程度までの砂粒をやや多くと炭化物粒を若干含む。やや硬く粘性がある。5は暗黄褐色土で2より明るく、2.0cm 程度までの砂礫を多くと0.5cm 程度までの炭化物粒を若干含む。やや硬く粘性がある。

柱穴ではそれぞれ1、2の層位が認められた。1は柱痕部分で、暗褐色土に1.0cm 程度までの砂礫を多く含む。2は黄褐色土で、1.5cm 程度までの砂礫を多く含む。

出土状況

図5には、25号住居址における遺物の出土状況を平面および立面で示している。図中の数字は図版での番号、▲は土師器、●、○は須恵器であり、そのうち○は住居址外の包含層や他の遺構にも破片の分布が認められた個体を表している。なお垂直分布については、南北方向では東から、東西方向では南から見通した状況となっている。

また、図6の上半に住居址外出土の破片と接合関係のある資料について、その分布状況を示している。ここでも数字は図版での番号であり、今回掲載しない高坏は▲、甕は●で表している。

まず、平面分布から住居址内の遺物出土状況を概観すると、いくつかのグループに区分が可能であると思われる。すなわち、カマド部分(1、2)、貯蔵穴内(3～5)、住居址北東部(6～9)、同中央部(10～12)、同南西部角(13～15)、同南東部(16～26)である。以下、その区分に沿って述べていきたい。

1、2はカマド内から出土しており、25号住居址の構築時ないしは廃絶時、すなわち住居の存続時における遺物であると判断して差し支えないと考えられる。

貯蔵穴内の資料3～5のうち、3は貯蔵穴床面直上からの出土であり、住居に伴うものと考えられるが、その他は上層から一部破片が出土したのみであった事から、遺構に伴うとは考えがたい。5については、北東方向に約12m 離れた小グリッド出土の破片と接合している。

6～9は住居址内北東部からまとまりを持って出土しており、遺構外への拡がりは認められない。6

～9共に床面直上からの出土で、特に8は壁際の最も低い位置から出土している。そのような状況から、これらの資料は本住居址の存続時、もしくはそれに極めて近接した時期の遺物である蓋然性が高いと思われる。

10～12は住居址内中央部にやや散在しており、10、11はほぼ床面直上、12は覆土第2層と第5層の境界辺りからの出土である。10、12は遺構外にも広がり、10は住居址から南西方向に約10mの範囲に、12は25号住居址を通る北東－南西方向の直線上に約40mの間隔を置いて出土している。当該区域の資料については、遺構外の分布の在り方が南東部出土の資料とは傾向を異にする。

13～15は住居址南西部角から一括して出土しており、その位置は貯蔵穴とも近接している。その場に設置、もしくは投棄された状況を示していると考えられる。

16～26は住居址内南東部からまとまって出土しており、遺構外への広がりを持つものが殆どである。遺構外との接合関係の見出せなかったものも、それ自体が小片であり、住居に伴う遺物とは断じがたい。16～26全般に、壁付近では覆土中の高い位置での出土、遺構中央部寄りでは床面付近での出土と言う傾向が認められる。16～18、23については遺構外遺物との接合関係は不明である。19は住居址から北へ約6mの破片と接合した。20は住居址の東約10～22mの範囲に破片の分布の中心があり、一部がその西側で南北約42mの範囲に散在している。21は住居址からの検出は破片1点のみであり、分布の中心は東約20mにある。22は住居址と東北東約16m、その北約10mの3地点に分かれて検出された。24は住居址と東約20～30mに分かれて分布し、一部両地点の間からも検出された。25は住居址の東北東約20m周辺に分布の中心があり、一部が北～西方に散らばっている。26は住居址と東約20mに分布の中心があり、一部がその周囲南北約58mの範囲に散在している。

27、28は25号住居址の覆土中からの出土であるが、位置は不明である。

▲の高環は住居址内から5点の破片が検出され、住居址の北東から南東の南北約46m、東西約32m

の範囲に分布している。●の甕は住居址内から4点の破片が検出され、分布の中心は住居址の東約10～26mにあつて、全体では南北約72m、東西約54mの範囲に散在している。

尾崎遺跡における25号住居址の位置

ここからは、以上に見てきた状況から読み取りうる事柄について、若干の所見を述べたい。

尾崎遺跡の展開する舌状台地の調査区部分は、西に向かって開析された小規模な谷によって、南北に二分されている。今回紹介した25号住居址は、その内の北半部の中央付近、台地頂部の最も高い位置に存在した遺構である。遺存状態の良好さもさることながら、その構造も、本遺跡内においては比較的整ったものであった。

25号住居址の遺構自体に伴うと考えられる最も確かな遺物は、カマド部分出土の1、2である。その時期を検討するにあたり、周辺の遺跡の報告を参照したところ、1に比較的類似した形態のものが、恵那市の花無山遺跡(大野吾遺跡)に認められた(註5)。その時期は、当該遺跡の時期区分におけるⅡ期-2が近いと思われる。Ⅱ期-3にMT15～TK10型式の時期の年代観が与えられているので、その直前の時期となるであろうか。土師器としては宇田式併行期に当たる。

貯蔵穴内出土の3は同じく花無山遺跡Ⅱ期-3に近いものと考えられ、住居に伴う可能性があるが、4、5は後世の流れ込みであろう。

住居址北東部の内、特にまとまりを持って出土した7、8は渡辺編年の概ね2型式、即ち猿投窯H-61号窯式、陶邑窯MT15～TK10型式の時期に相当し、住居に伴う可能性が高い。9はそれに比べ散在的であり、住居址内南部にも一部の破片が検出されている。また、3～4型式と時期も若干降るものとみられる事から、住居の廃絶時もしくはその直後に投棄された遺物と見るべきであろう。

住居址中央部出土の内、10と12は投棄の様相と見られる。ただし、10は7、8とほぼ同時期とみて差し支えないものであり、12は9と同時期のものと認められる。また、11はまとまりを持って出土しており、遺構外への広がりも認められないが、12と

同様に7、8に比べ若干後出的であり、9と同時期のものと考えられる。このような状況をどう解釈するかは、憶測の域を脱しないものではあるが、やはり住居廃絶時の廃棄、および周辺への投棄の可能性を考えるべきではないだろうか。住居の存続期間にある程度の年数があれば、その当初に使用を始めた器物と、後に使用を始めた器物に若干の型式差が生ずる可能性はあり、特に、土師器に比べて堅牢で加熱使用のあまりない須恵器については、両者の併存もあり得ると考えられる。しかし一方で、10、11が床面直上の出土であるのに対して、12は最下層上面付近の出土であり、また、11については25号住居址の東約30mに位置する28号住居址において類似性の高い坏身が検出されている事もあり、これらの解釈については、今後さらなる検討を要するであろう。

住居址南西部角出土の13～15は、その出土状況から一括性が高いと考えられるが、15のみは破碎された状況であった。14、15については、周辺遺跡の資料との比較から、宇田式併行期の終わり頃か、それに続くいわゆる濃尾型甕の時期との過渡期に相当と推察されるが、13は地域色が強いいためか、類例が判然としない。総じて1、2などの土師器に比べてやや後出的と見られ、9、11、12の須恵器と同時期のものと考えて齟齬はないと思われる。住居廃絶時に使用していたものをそのまま放置、もしくは設置しておいた可能性も考えられるであろう。

住居址南東部出土の須恵器については、18が4型式、19が6型式である外は、全て7型式に相当と考えられ、また、遺構内から検出されたのは一部の破片に過ぎないので、当然住居に伴う遺物ではない。ただし、遺構内の一角に集中している状況からすれば、自然な流入と言うより意図的に投棄されたとみるべきであろう。壁付近で高く中央部付近で床面に近い在り方は、流入の様相にも見えるが、廃絶後の住居址に周辺の土砂が崩落して埋没する過程のある時期に、その現況を改変することなく、人為的な投棄が差し挟まれたと捉えるのが妥当と思われる。さらに、遺構外での分布状況を概観すると、住居址に近接した位置にはあまり見られず、主に東

方向へ10m以上隔たった辺りに集中していることから、破碎した須恵器の一部を分割して、選択的にこの遺構に投棄した可能性が考えられる。上記遺構外の分布集中域は、25号住居址と標高差の全くない、連続した台地頂部の中央である事からも、自然流入の可能性は低いと思われる。なお、この集中域は、紀要第16集で検討した高坏の分布域の一つに重なり、時期もそれと共通するが、高坏では畿内系が中心であったものが、今回紹介の資料については尾張系に含まれるものが主となっている。高坏の中でも、同じく25号住居址南東部から一部が検出された第16集の22は、坏部が尾張系、脚部が畿内系の技法で作られ、土質もそれぞれの部分で異なる個体であった。このような状況が何を示唆しているかは、今後他の資料の調査を重ねてから改めて検討していきたい。

以上のことから、25号住居址は土師器では宇田式併行期、須恵器では2型式の時期、実年代としては6世紀初頭から前葉頃に構築、使用が始まり、土師器では濃尾型甕の時期との過渡期、須恵器では3～4型式の時期、実年代としては6世紀中葉頃に廃絶された遺構であると推察される。その後、若干の期間をおいて、各種須恵器類を中心とする破片が投棄されたのが、7型式の時期、およそ6世紀末葉から7世紀初頭の頃と考えられる。この投棄は、前回紀要第16集に紹介したところの、掘立柱建物南東側周辺を中心とした投棄行為の一環にかかるものであろう。その投棄が、1個体の破片を分割して複数の場所に行われている状況は、第16集でも確認されたとおりであり、そのような一定の形式に則った儀礼が行われていたと推察される。本遺跡においては、広く各種須恵器類が破碎、投棄された状態で検出され、一部は凹地として残存していた先行の遺構を利用した状況がうかがえるが、これもその一例と言えるであろう。

おわりに

本稿では、良好な遺存状態で出土遺物も豊富であったにもかかわらず、報告書では十分に紹介できなかった25号住居址の資料について検討を行った。僅か1基の遺構ではあるが、それは当該期に

おける尾崎遺跡の在り方の縮図とも言えるものであったのではないだろうか。

これから後も、居住空間と祭祀空間が複雑に混在する本遺跡の様相を、少しずつでも解明していけるよう努力したい。

附 53号住居址出土須恵器高坏蓋について

以下には、紀要第16集に紹介した尾崎遺跡出土の須恵器高坏について、本稿脱稿後に新たに判明した遺漏の1点を追加して補遺としたい。

図3の29の高坏蓋がそれであるが、本資料は紀要第3集に既に掲出されているものである(註6)。口縁部径13.4cm、残存部高4.3cmを測り、全体の1/2程度の部分とつまみ部を欠く。胎土は精良で白色微粒を少量含む。焼成状態は良好で堅緻な仕上がりにある。色調は外面で灰N4、内面で暗青灰5PB4/1、器肉内部で灰赤7.5R4/2を呈し、外面一部は自然釉のため黒7.5Y2/1を呈する。肩部外面に稜を有し、口縁端部内面に凹線で段を為す。外面肩部以上に回転ヘラケズリ調整、他に回転ナデ調整を施すが、やや粗雑な作りである。陶器窯 TK43～TK209型式に併行するとみられる。

本資料は、図6の下半に示したとおり53号住居址内覆土と36号住居址上層の包含層から出土し、同じく53号住居址から出土の紀要第16集の69と同時期、同系統のものである。紀要第16集において36号住居址を中心とする南東向き緩斜面とした分布域に属し、3～4型式頃の畿内系短脚有蓋高坏が集中する、当該分布域の様相にも矛盾はないと言えるであろう。

(いそがい ゆうこ 日本考古学協会会員)

註

- (1) 『尾崎遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター 1994
- (2) 渡辺博人「美濃の後期古墳出土須恵器の様相—蓋坏の型式設定とその編年試案—」『美濃の考古学』創刊号『美濃の考古学』刊行会 1996
- (3) 藤村俊「尾崎遺跡における古墳時代後期土師器煮炊具について—尾崎遺跡発掘調査報告書 補遺—」『美濃加茂市民ミュージアム紀要第3集』美濃加茂市民ミュージアム 2004
- (4) 藤村俊「尾崎遺跡における古墳時代後期の須恵器—いわゆる美濃系蓋坏を中心として(尾崎遺跡発掘調査報告書 補遺)—」『美濃加茂市民ミュージアム紀要第7集』美濃加茂市民ミュージアム 2008
- (5) 『阿木川ダム関係遺跡発掘調査報告書』恵那市教育委員会 1982
- (6) 註3に同じ。

参考文献

- 内堀信雄「土師器煮炊具の様相—地域色と使用痕—」『東海の古代①美濃・飛騨の古墳とその社会』八賀晋編 2001
『川合遺跡群』可児市教育委員会 1994
『顔戸南遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター 2000
『阿曾田遺跡発掘調査報告書—阿木川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—』中津川市教育委員会 1985
『H-115号窯発掘調査報告書 学校法人愛知淑徳学園学校整備工事に伴う発掘調査』名古屋市教育委員会 2007

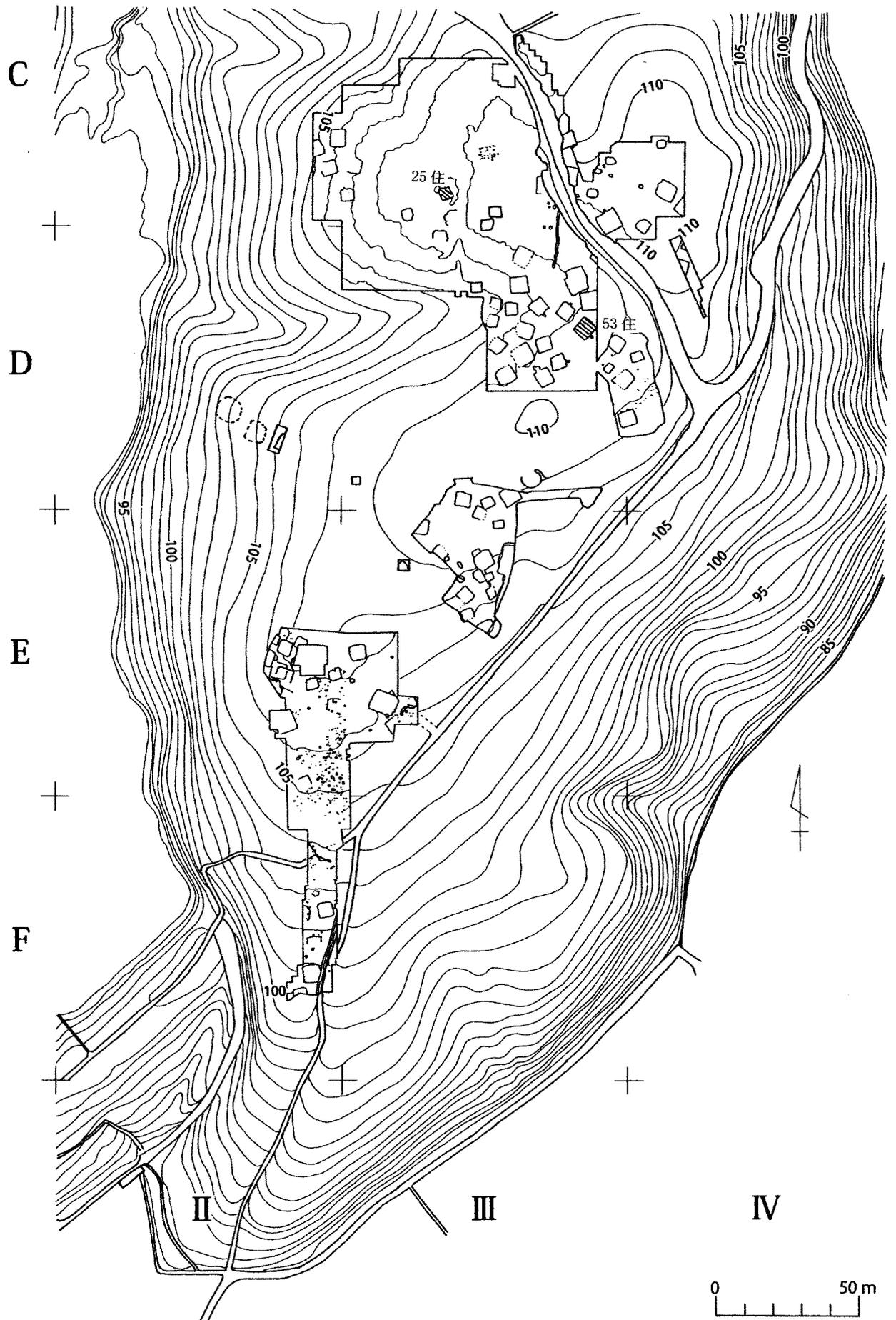


図 1 尾崎遺跡 関連遺構位置

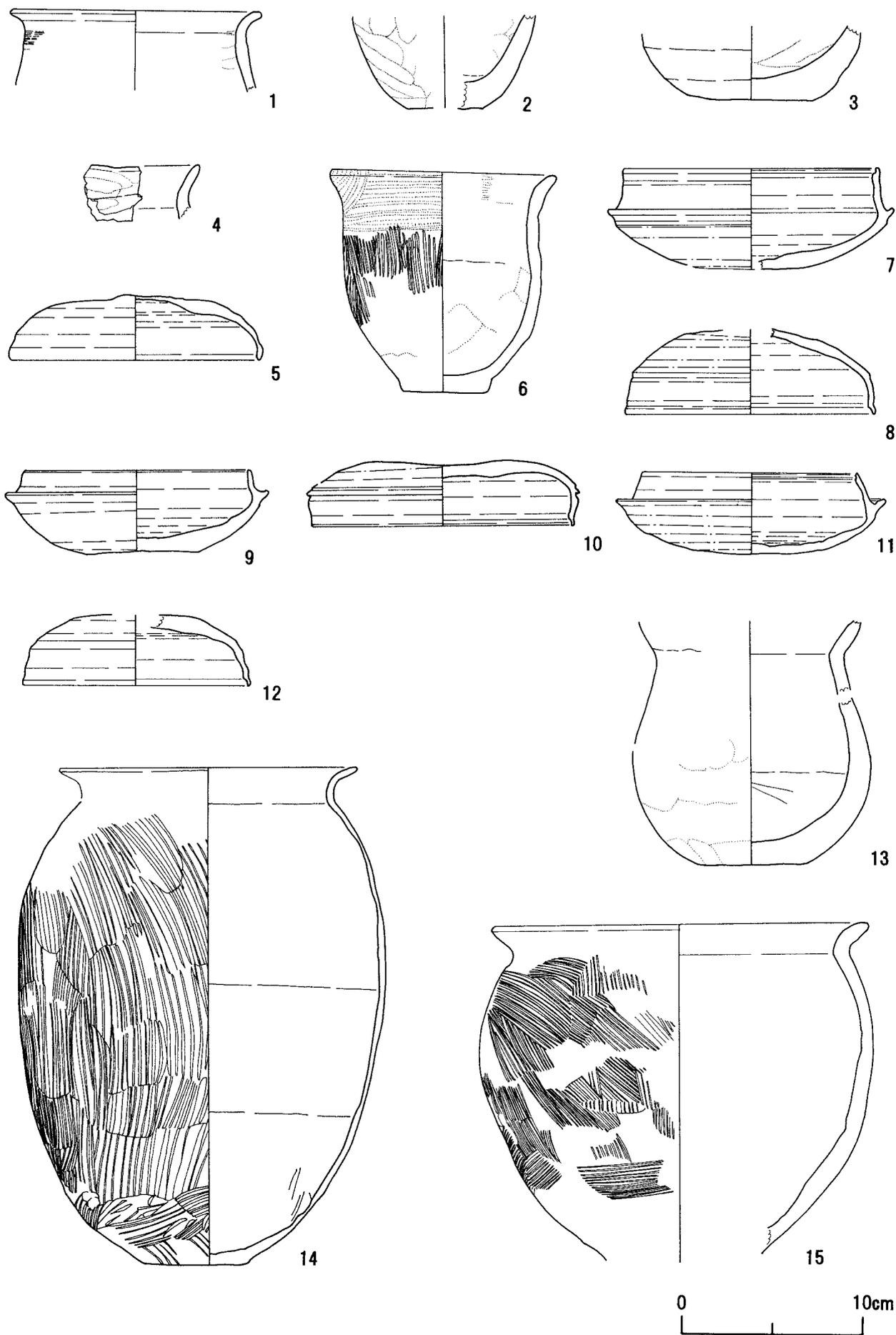


图 2 25号住居址出土遗物 (1)

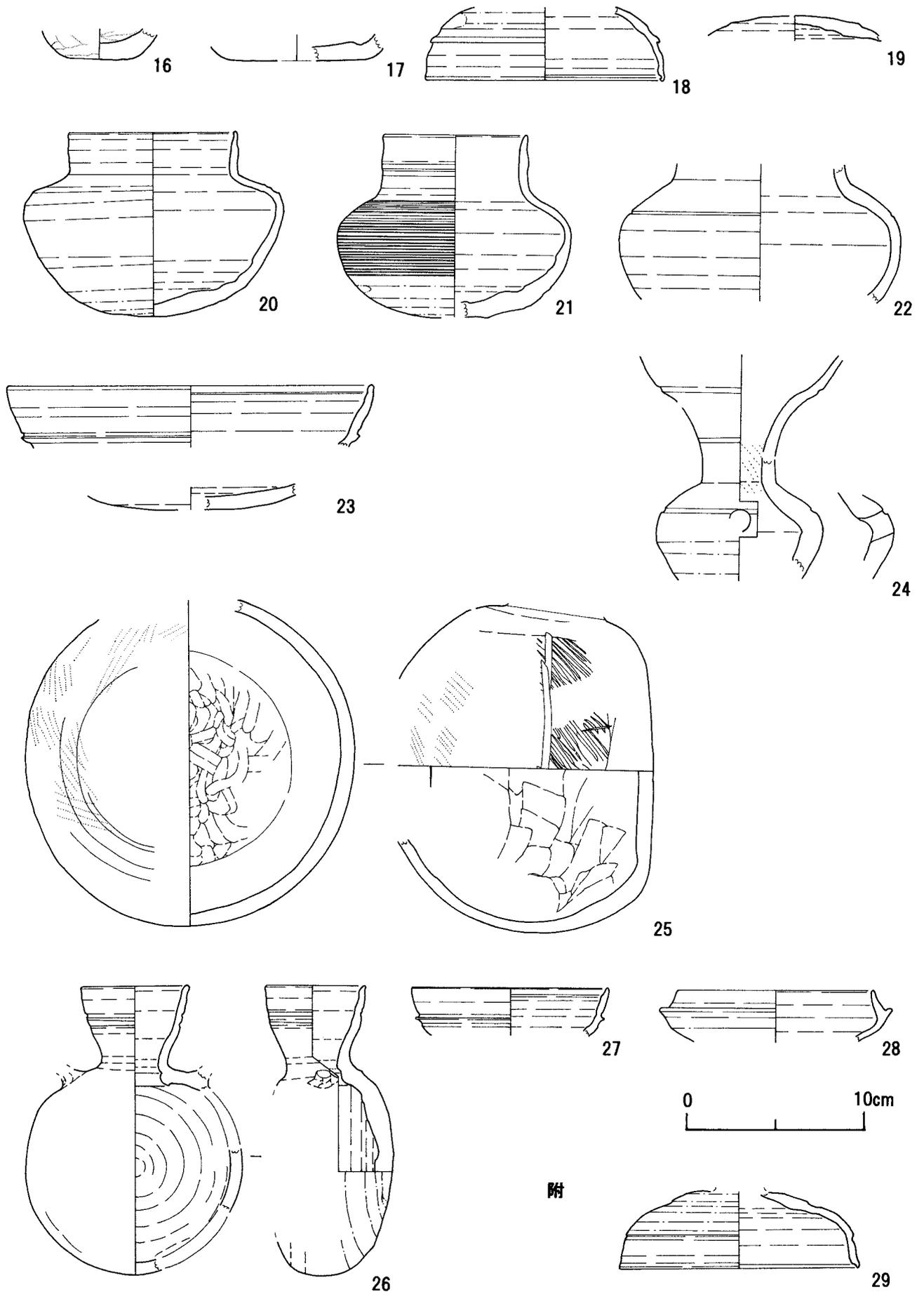


图 3 25 号住居址出土遺物 (2), 附 53 号住居址出土須惠器高坏蓋

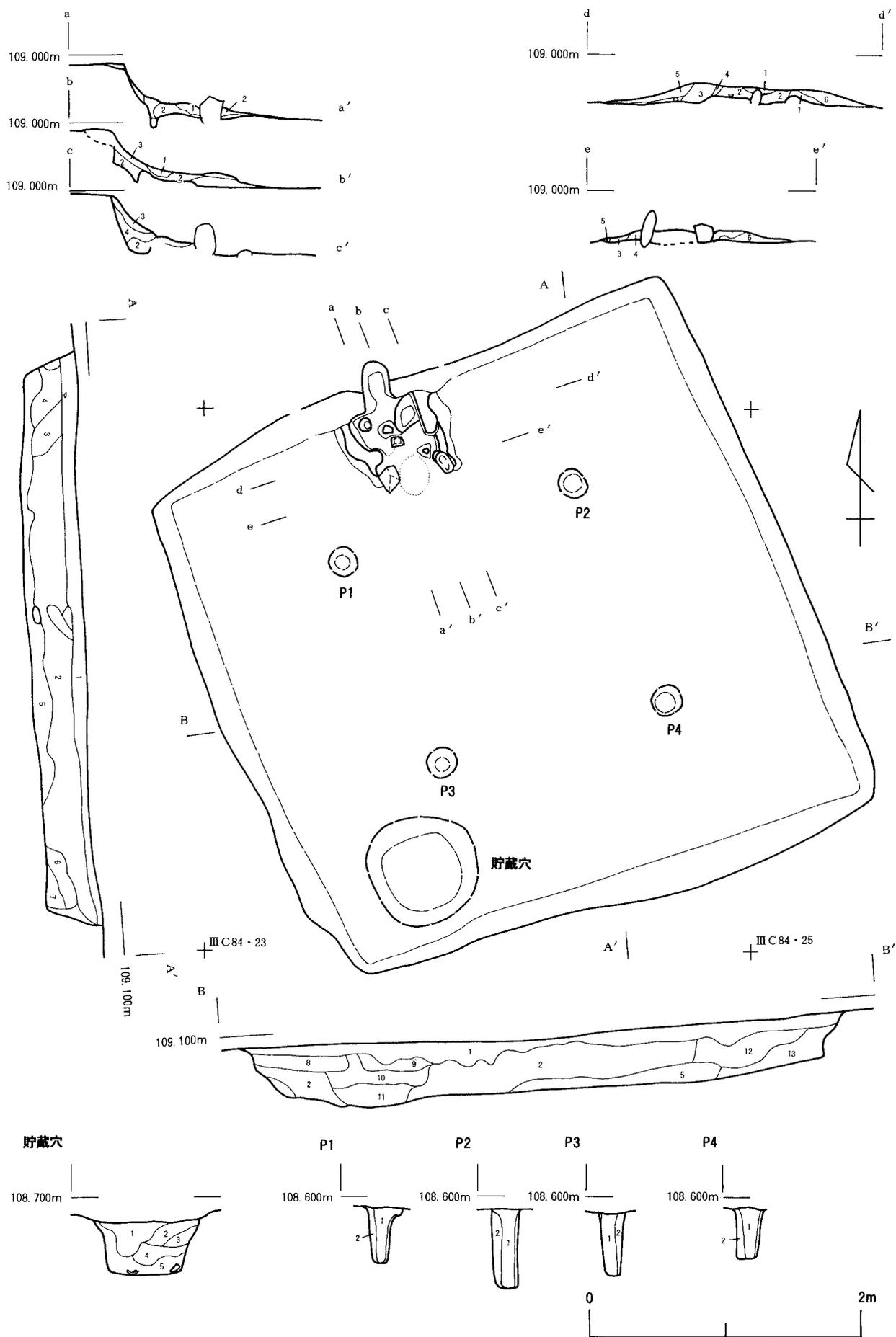


图 4 尾崎遺跡25号住居址



图 5 25号住居址遺物出土位置

森金次郎 — その家族と親友・有賀好風

西 尾 円

1. はじめに

森金次郎に着目することになったきっかけについて、少し長くなるが以下にまとめておく。

2016年度、美濃加茂市民ミュージアムも加盟している岐阜県博物館協会が創立50周年を迎えた。協会ではその50周年の節目に向けて『岐阜県博物館協会創立50周年記念誌』を作成することとなり、筆者はその編集委員として、岐阜県内での博物館の誕生や岐阜県教育行政の動向などを中心に、協会発足につながる歴史の一端をまとめる機会をいただくことができた。岐阜県内の博物館では、名和昆虫博物館が早くから博物館としての活動を展開していたが、岐阜県教育会による郷土博物館、岐阜県師範学校による郷土室、大垣城郷土博物館などが、岐阜県の中で博物館として先頭をきって活動に取り組もうとしていたことなどが分かってきた。さらに岐阜県博物館協会の発足や発足後の活動には、愛知県犬山市にあるモンキーパークの学芸員であった広瀬鎮氏も携わっていたことを恥ずかしながら初めて知ることとなり、岐阜県博物館協会の初期の活発な活動に触れることができた。また岐阜県出身の棚橋源太郎自身の博物館観、博物館教育観についても今の博物館の現状に照らして考えてみたい、そして棚橋源太郎は自身の故郷である岐阜県の博物館の活動の発生になにか関わりを持っていたのか、あるいは関わらなかったのか、直接ではないにしろ、人を介して関わっていたのかどうか、改めて調査してみたいと感じた。

そこで、棚橋源太郎氏教育功労記念会による『棚橋源太郎氏と科学教育』（1938年）や宮本馨太郎編『棚橋先生の生涯と博物館』（六人社 1962年）をもとに、棚橋源太郎と近い人物の絞り込みをおこなった中の一人に森金次郎がいた。絞り込みの時に鍵になるだろうと考えたことが、森金次郎が棚橋源太郎と共著で『物理実験室案内』（1914年）や『化学実験案内』（1916年）を著したこと、東京高等師範学校を卒業したこと、「尾張・美濃」という地域的な

つながりのある愛知県犬山市の生まれであったことの3点であり、調査を開始した。

本稿は岐阜県・加茂地域において、森金次郎にゆかりのある人々の足跡を辿り、それらを通じてこの地域における森金次郎を中心とする人物の交流を明らかにすることを目的としている。

2. 森金次郎とは

森金次郎（もりきんじろう：1880年～1980年）はここ数年その研究が注目されている、大正期から第二次大戦前までの博物館界を牽引した一人といえる。例えば、青木豊他編著による『博物館学人物史下』（雄山閣 2012年）や、同じく青木豊他編著『博物館学史研究事典』（雄山閣 2012年）などにも取り上げられ、その論文についての研究がなされている。

経歴等については、森金次郎自身が執筆した『思い出草 昭和49年初夏』⁽¹⁾『続編 思い出草 昭和52年秋』⁽²⁾が第一次資料である。以下、これにより森金次郎について簡単にまとめる。

森金次郎は1880(明治13)年に、父森勲と母森竹子の三男として愛知県犬山市で生まれた。1902(明治35)年東京高等師範学校に入学、卒業後は鹿児島師範学校、福岡県直方高等女学校、滋賀女子師範学校等に勤務し、教師教育、中等教育に携わっていた。1917(大正6)年に、棚橋源太郎が館長を務めていた東京教育博物館に従事することになり、学校教育の場から社会教育の場、すなわち博物館に携わるようになる。その後、海外の博物館の調査研究のため、欧米へ派遣され、特に科学館における教育活動を中心に視察している。帰国後には、欧米留学で得た知見をもとに、海外の事例紹介にとどまらず、科学知識の普及のための論考の執筆、そして郷土博物館論等博物館学の分野でも論文執筆を行い、当時の博物館界へ提言を数多くおこなっている。また学芸官として東京教育博物館に勤める傍ら、棚橋源太郎のもと、博物館事業促進会の

活動にも積極的に取り組み、「博物館研究」の編集委員等も務めている。さらにかつての勤務校の同窓生との交流や修学旅行生との交流も行うなど、活発な社会活動も展開している⁽³⁾。東京教育博物館を退職した後は、在職中から従事していた女子大学等で講師として勤務し、高等教育にも尽力している。

3. 森金次郎の家族

(1) 父勲と母竹子 - 八百津での森一家

森一家は1882(明治15)年、森金次郎が2歳の時に、現在の愛知県犬山市から岐阜県加茂郡八百津町に転居してきたことは、『思い出草 昭和49年初夏』にまとめられている⁽⁴⁾。

父森勲(もりいさお:1844年～1927年)は、1882(明治15)年から1903(明治36)年まで21年間、善恵学校杉沢支校(現在の岐阜県加茂郡八百津町立八百津小学校の前身)に勤務した。八百津町内の学校勤務者としては長年勤続者に挙げられるほど、この地で長く学校教育に携わっていた人物である。もともと森勲は美濃国円城寺(現在の岐阜県羽島郡笠松町)の出身である。養嗣子として現在の愛知県犬山市の森家に迎えられた。杉沢地区へ転居する前は、愛知県の役人であった。明治4年に犬山県属となり、明治9年に愛知県改組備、明治12年5月には愛知県土木課員となり、入鹿のため池の工事に携わっていたという⁽⁵⁾。杉沢支校に招かれた理由は明らかではないが、森金次郎によると「知人の周旋によって」のことという⁽⁶⁾。

母森竹子(もりたけこ:1851年～1892年)は、犬山藩士森常右衛門の二女として生まれ、勲を夫に迎え、森家を継いだ。杉沢地区に移ってきてからは、勲とともに地区の人々への道徳や知識の普及に努めた。特に、女子に対しては紡績(機織)や裁縫の技術、さらには自ら範を示しながら女性としての徳育など慈愛あふれる教えを、同地区はもちろんのこと、広く近隣の村にも説き、感化したとのことである。

その母竹子は森金次郎の妹を出産した後に42歳で亡くなっている。森金次郎11歳の時のことであった。杉沢地区の人々はその死を悼み、遺徳碑(図1)を地区内の共同墓地に設置した⁽⁷⁾。碑文の文字は森金次



図1 杉沢地区にある森竹子の遺徳碑

森姓諱竹子以嘉永第四歲三月生尾張國犬山藩中考諱常右衛門
二女妣中島氏 失同胞依迎先生於美濃圓城寺配竹子而 家竹子
天性至孝又善事夫伉儷二十有八年于茲終始姑如一日未常失琴 之
和其治家儉而有節其教子慈而有方一家諧合內政備足雍雍之氣宛
然如春者即是竹子斡旋之効也明治十五年十月先生挈家來于我鄉
校也盡力教授處世之知識道徳之本旨而竹子便從事女子於紡績裁
縫之技孳孳懇誨朱嘗倦如此十春秋大有所造詣風化自延而及于近
隣或闖鄉敦厚是舉可想見令茲明治壬辰歲三月十五日歿年四十二
聞者莫不惋惜焉生等親接其風者不禁追悼之情乃刻子石傳其事亦
欲以慰魂於地下也嗚呼悲夫

明治二十五年九月

東福寺管長敬沖大和尚篆額 門生某等建立

町広報(第101号 昭和48年6月 八百津町発行)にはその遺徳碑についての記事が「地域ぐるみで敬愛された森竹子先生の遺徳」と題して紹介されている。佐藤弥太郎が「個人の碑が町内に存在するのは戦死者は別として大正の潭海、昭和の星野両和尚ぐらいのもの」^⑧と評しているように、一個人である森竹子の碑が、地区の共同墓地の入口にあることは特別な意味があると言える。森勲・森竹子夫妻が一心同体となり、杣沢地区の人々の暮らしに深く入り込み、徳育、知識の普及に携わった。その恩を、「遺徳を石に刻み遺すこと」により「魂の慰みとなること」で、後世に伝えようとした先人たちの二人への思いが伝わってくる。

(2)兄・森鋒尾

森金次郎の長兄は名を森鋒尾(「もりほこお」か: 1876年～1909年?)と言う。『思い出草 昭和49年初夏』^⑨によると、当時の岐阜日日新聞社で小説の挿画を描く仕事に就いた後、岐阜師範学校に入学、後に教員となり、加茂郡加茂野村今泉の学校に勤めたとのことである。「加茂野村今泉の学校」とは現在の美濃加茂市立加茂野小学校のことである。市立加茂野小学校は1873(明治6)年3月、今泉村に啓童義校が設置されたことによる。1947(昭和22)年には加茂郡加茂野村立加茂野小学校となり、1954(昭和29)年には町村合併により、現在の校名となっている。

『美濃加茂市立加茂野小学校 百年のあゆみ』^⑩には、森鋒尾が紹介されている。それによると、森鋒尾は1898(明治31)年に今泉尋常高等小学校の主席訓導として着任、1907(明治40)年まで勤務していた。書画音楽の才に秀でていたと記され、森鋒尾によるうつくしい手の「かな習字帖」の写真が掲載されている。また同誌には、「第三節 明治の学校の思い出を語る」の中に「六 森鋒尾先生のこと」という項目があり、森鋒尾の人となりかしのばれる一文があるので、ここで紹介する^⑪。

先生は御夫婦で教師をして居られた。たたくことなどなく、親切でやさしく、よくわかるように教えてもらえた。情熱的で厳しい先生でもあった。……当時、他の学校



図2 加茂野小学校 校庭の森鋒尾の頌徳碑

森森先生名鋒尾家世仕犬山藩以明治九年生
資性磊落容貌魁偉博涉諸技書畫音樂無所
不可三十一年承職我今泉校專心盡瘁教養
子弟當此時校名籍々遠邇四十年退職仍移
籍為比地人親蒙指授者實垂千名今也胥謀
建碑顯彰功績千不朽云

大正丙寅夏
川合為一撰書

ではあまり行っていなかった音楽教育に力を入れられ、その甲斐あってか近隣の学校にもなかった楽器、特にオルガンなどが備えつけられたとかいうことである。

森金次郎も兄鋒尾について「兄は書画には天才的で、音楽にも興味がありまして、横笛を上手に吹きました」⁽¹²⁾と同誌に思い出を寄せている。



図3 「森鋒尾先生頌徳碑建設 記念絵葉書」

森鋒尾は若くして亡くなっているが、当時、森鋒尾に学んだ児童、保護者の感謝の気持ちは、頌徳碑という形で校庭内に遺された。碑は今泉小学校同窓会により昭和3年5月に建立されている。なお、頌徳碑に文字が刻まれてから除幕式まで時間がかかっているが、同窓会担当者の転居等により遅れたものと言う。碑文は蜂屋の郷土史家である川合為一(かわいためいち: 1887年～1973年)によるものである。現在も加茂野小学校の校庭にひっそりとたたずんでいる(図2)⁽¹³⁾。さらにこの頌徳碑の建設を記念した絵葉書も作られている(図3)。

森金次郎は同誌に夏休みの帰郷時に兄宅を訪問した際の出来事として、鶏をつぶしてすき焼きにしたことや今泉学校の先生に石炭から染料がとれる話をしたことなどを寄稿している。

亡き兄森鋒尾追憶

亡き兄の 記念碑 建ちある 加茂野校

この秋改築 百年史の刊行⁽¹⁴⁾

4. 親友・有賀好風

有賀好風(ありがこうふう: 1890年～1975年)

は、加茂郡八百津町の教育者として知られている⁽¹⁵⁾。この有賀好風も、森金次郎と深い関係にある人物である。

有賀好風は愛知県知多郡半田小学校の代用教員を勤めた後、飛騨高山准教員養成所、岐阜県師範学校などを卒業、岐阜市京町高等学校、加納附属小学校などに奉職している。また加茂郡蜂屋小学校長や土岐郡土岐小学校長、武儀郡視学なども勤め、長く学校教育に携わった。蜂屋小学校長時代には、加茂郡太田村(現美濃加茂市太田町)生まれの坪内逍遙に校歌の作詞を依頼、快諾されている⁽¹⁶⁾。同校では現在も坪内逍遙作の校歌が歌い継がれている。当時としては珍しく若くして校長の職についたことが有賀里津(有賀好風の妻)の回想のなかで触れられている。その回想の記念誌『有賀好風先生』には多くの教え子や同僚、恩師友人からの師への温かい言葉が寄せられており、多くの人々から慕われた教師であったことがうかがえる。さらに1945(昭和20)年には八百津町長に就任(昭和24年に退職)、1954(昭和29)年には八百津町教育長、昭和35年には八百津町議会議長などの公職に就くなど、学校教育の現場だけでなく、教育行政、一般行政にも携わり、地域行政に深く関わり、八百津町のために多彩な活動を行った人物である。

ところで、1953(昭和28)年に森金次郎の父森勲の27回忌が地区で催された際、この有賀好風は森勲をしのぶ講演を行っている⁽¹⁷⁾。どのような講演内容であったのか、その内容は遺されていないが、森勲の息子の森金次郎と交流があったことから、有賀好風が講師を務めたことは、当然の流れと言えよう。これまで有賀好風は坪内逍遙との関わりでも広く知られていたが、今回森金次郎との関係を初めて知り得ることができた。

この二人は終生互いのことを思い合い、深い絆で結ばれていたことが、有賀好風と森金次郎、二人の遺した資料からうかがい知ることができる。

有賀里津は「六拾年を顧みて」⁽¹⁸⁾のなかで、有賀好風と森金次郎の交流のはじまりについて次のように語っている。

八百津小学校高等科四年卒業、十四才の

若輩で四月から愛知県半田小学校代用教員に採用され一ヶ年勤務する。

半田小学校勤務の理由は、当時八百津町松沢分校長さんに犬山藩士であられた森勲先生がいられましたが、その御子息森金次郎先生が在職していたからであります。若き先生との同宿生活は有意義であり楽しかったと思います。一ヶ年後には先生は東京高師に御入学されましたので已むなく帰宅いたしました。

一方、森金次郎が遺した『思い出草 昭和49年初夏』や先の『有賀好風先生』への森金次郎の寄稿文の中からも有賀好風への特別な想いが綴られている。例えば、「半田の二年」として愛知師範学校を卒業した後に勤務した知多郡半田小学校での勤務の様子の中、森金次郎は有賀好風について次のように述べている⁽¹⁹⁾。

ここで特筆すべき一事がある。私の幼少育った八百津町助役の一人息子で、有賀好風と呼ぶ少年が私の許にやって来た。十五才の彼は伶俐で素直な好少年である故、私の勤める校長に頼んで代用教員に採用され毎日私と共に出勤した。(傍点引用者)

森金次郎は、「有賀好風君と私」として、有賀好風の3周忌への記念誌『有賀好風先生』には、次のように二人のことを振り返っている⁽²⁰⁾。

四月初め懐かしき半田生活を終り、私は上京、好風君は帰郷することになったが、有賀君と私との関係は、爾来、明治・大正・昭和の三代、七十年間。両人間の親愛、敬慕の情は延々として続き、いささかも動揺することがなかったのは全く不解な因縁と申す外ない。私はこれを文字、文章で説明することは全く出来ない。(傍点引用者)

有賀好風の三回忌に著された『有賀好風先生』にも森金次郎の晩年の居所で撮影した写真が遺されている⁽²¹⁾。

この二人の交流は晩年まで続いた。孫の森亮二氏によると、東京の成城の居宅に有賀好風が

訪れ、もう一人の友人を招き、3人で楽しく語り合っていた様子や笑い声が思い出されるという。

5. 終わりに

森金次郎という人物に着目し、この岐阜県・加茂地域におけるゆかりの人物の足跡を少し辿ってみることで、これまで地域の中に埋もれていた、あるいは忘れられていた、人と人のつながりや人々が寄せた想い、生きた証に光を当てることができたのではないかと考える。

引き続き、森金次郎ゆかりのある人々の足跡を調べていきたい。

(にしお まどか 美濃加茂市民ミュージアム学芸員)

【謝辞】

森金次郎の研究業績や人物像を調べる中で、多くの皆様にご指導、ご協力をいただきました。ここにお名前を挙げ、感謝の意を表したいと存じます。ありがとうございました。

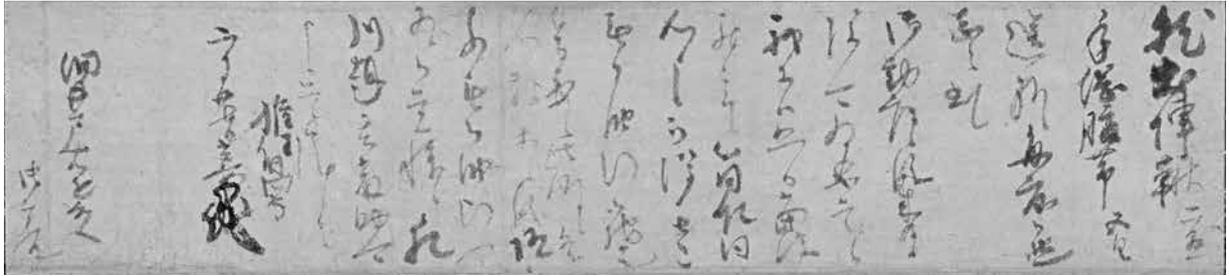
森亮二様、武居文雄様、二本木紘様
箕真理子様、八百津町松沢地区の皆様、公益財団法人 犬山城白帝文庫様、八百津町教育委員会様、美濃加茂市立加茂野小学校様

また棚橋源太郎の人物の交流を調べるにあたり、岐阜県博物館協会「のこす部会」のち「こと部会・研究会」のメンバーの皆様には、調査対象へのアプローチや同時代の教育・文化活動等について多々なご示唆、ご助言をいただきました。

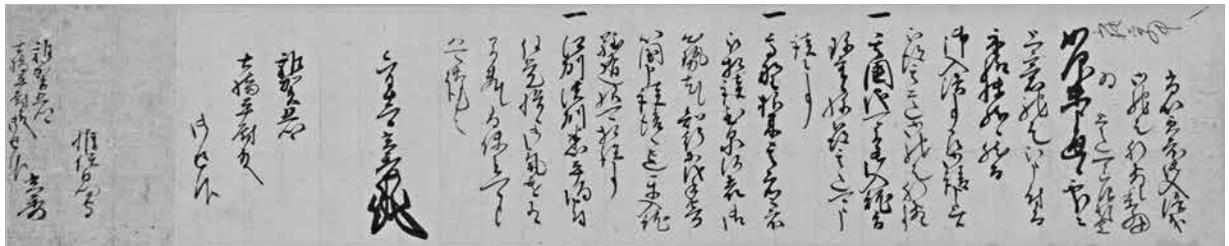
【脚注】

- (1) 森金次郎『思い出草 昭和49年初夏』1974年
- (2) 森金次郎『続編 思い出草 昭和52年秋』1977年
- (3) 前掲『続編 思い出草 昭和52年秋』7頁
- (4) 前掲『思い出草 昭和49年初夏』2頁
- (5) 佐藤弥太郎氏のまとめられた「八百津町教育史」の編纂のための資料「松沢の教え子旧師森先生の遺徳を偲ぶ」による。
なお佐藤弥太郎(さとうやたろう:1898年~1976年)は加茂郡八百津町出身の郷土史家である。

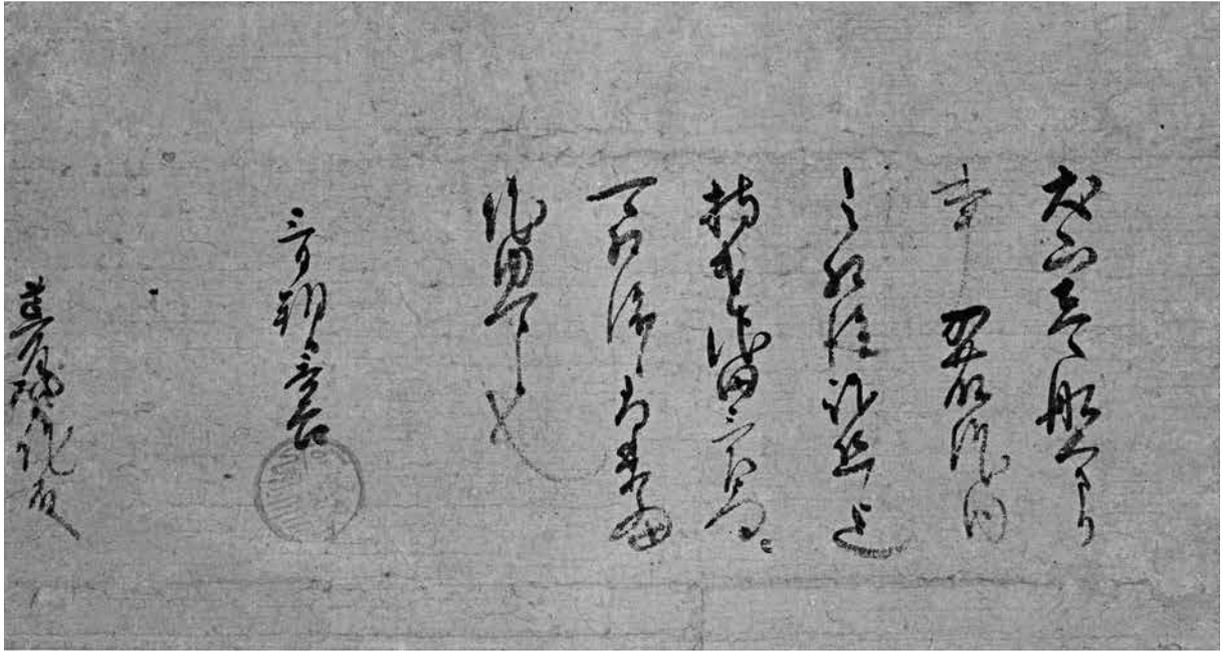
- (6) 前掲『思い出草 昭和49年初夏』2頁
- (7) 1892(明治25)年9月に建立されている。現在も地区の墓地の入口にひっそりと建っている。
- (8) 前掲(5)の資料による。
- (9) 前掲『思い出草 昭和49年初夏』3-4頁
- (10) 加茂野小学校開校百年記念事業委員会『美濃加茂市立加茂野小学校 百年のあゆみ』1978年
- (11) 前掲『美濃加茂市立加茂野小学校 百年のあゆみ』 45頁
- (12) 前掲『美濃加茂市立加茂野小学校 百年のあゆみ』 45頁
- (13) 頌徳碑の除幕式は昭和3年に行われた。当時は校庭の左端に設置されていたが、その後の校庭の拡張等により、現在は校庭の北側の校門近くにある。
- (14) 森金次郎『続編 思い出草 昭和52年秋』1977年秋 34頁
- (15) 有賀好風については、有賀里津『有賀好風先生』(昭和52年1月私家版)を参考にした。
- (16) その後も、有賀好風と坪内逍遙の手紙や書籍のやり取りなど、交流は逍遙が亡くなるまで20年続いた。
- (17) 前掲(5)「杣沢の教え子旧師森先生の遺徳を偲ぶ」による。
- (18) 前掲『有賀好風先生』 107頁
- (19) 前掲『思い出草 昭和49年初夏』7頁。またこの中で、森金次郎は有賀好風から森への書簡が数千通に達したと振り返っている。いかに二人が親しくやりとりを続けていたのかが伺える。
- (20) 前掲『有賀好風先生』15頁
- (21) 前掲『有賀好風先生』には、1974(昭和49)年8月に撮影された有賀好風と森金次郎の写真が掲載され、この写真は二人が最後に会った時のものであることが、森金次郎の歌から分かる。
- 「最後の写真」
去る年の夏二人並んでとりし写真
永き別れとなるぞ悲しき



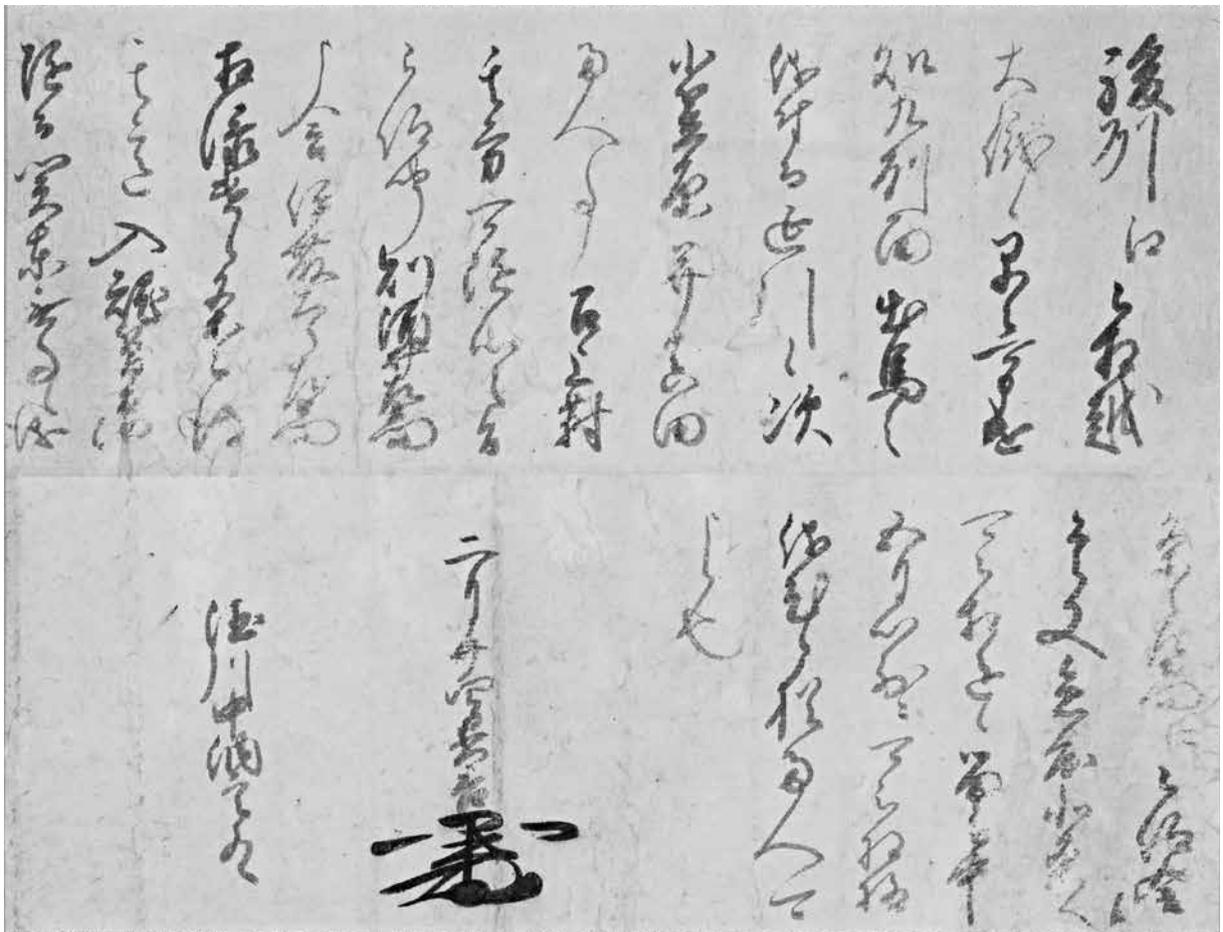
(13) 明智光秀 書状 H19911



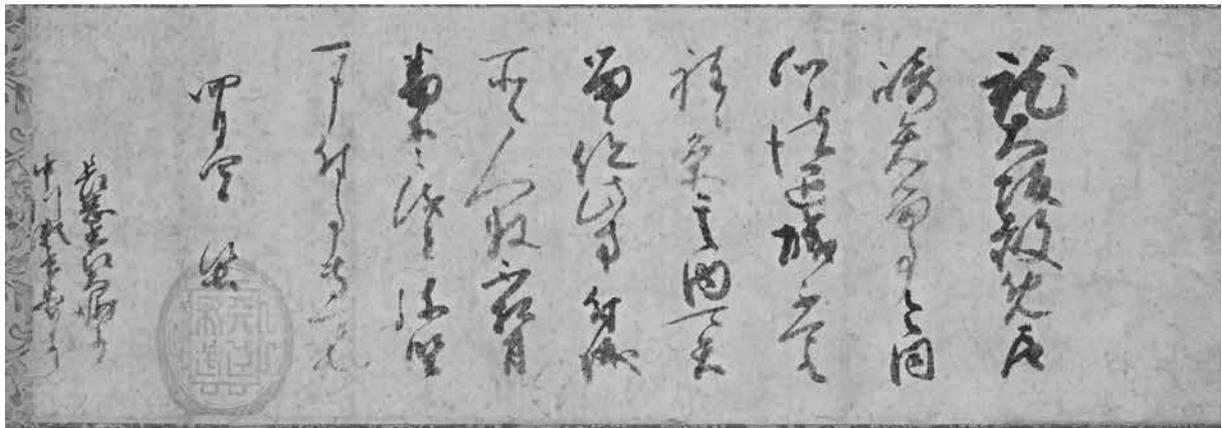
(14) 明智光秀 書状 H19912



(7) 豊臣秀吉 朱印状 H19898



(8) 豊臣秀吉 書状 H19899



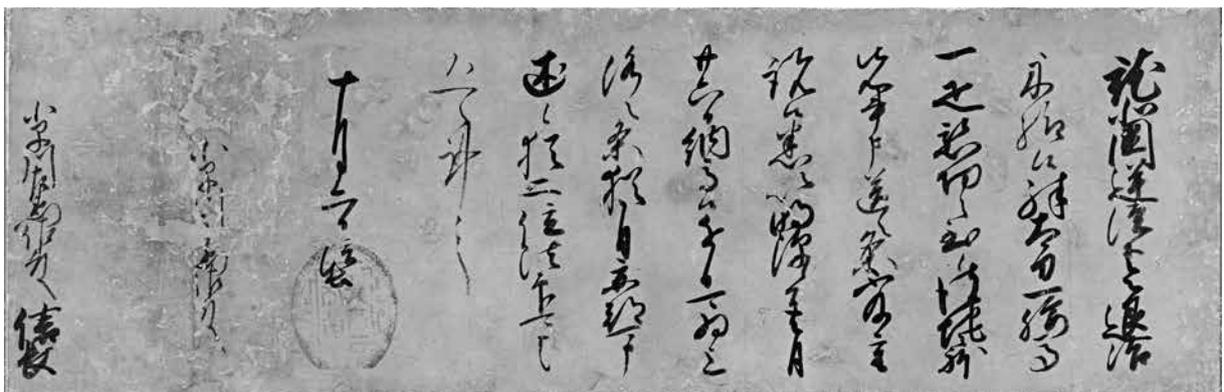
(5) 織田信長朱印状 H19891



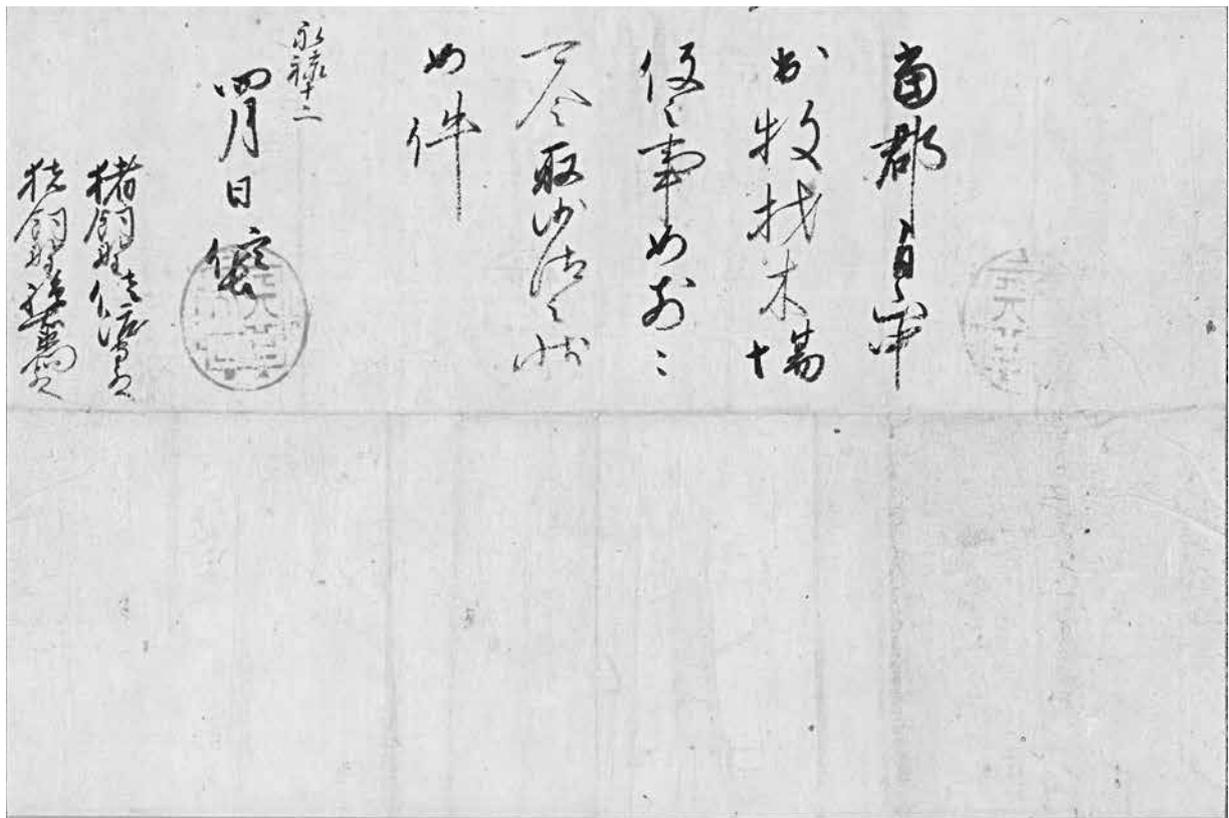
(6) 豊臣秀吉陣立書 H19896



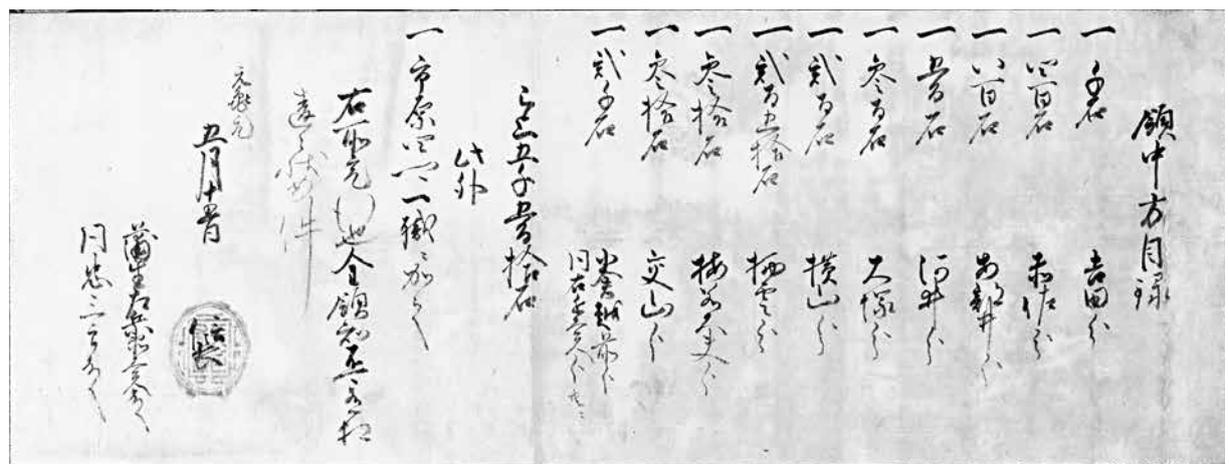
(3) 織田信長 書状 H19889



(4) 織田信長 黒印状 H19890



(1) 織田信長 朱印状 H19887



(2) 織田信長 朱印状 H19888

雑賀五郷

土橋平尉（重治）殿

御返報

（包紙）

「惟任日向守

雑賀五郷 光秀

土橋平尉殿 御返報」

意味と解説

仰せのように今まで手紙のやりとりがないところでしたが、（あなたが）將軍の味方をするという手紙を（あなたから）もらって嬉しく感じます。

（將軍の）入洛（京へ入ること）のことを私（光秀）が了解したので、その（私の）気持ちを踏まえて尽力することが大事です。

一 その国（紀州など）については、（あなたたちが）力を尽くしてくれていることはありがたい。よく相談するように。

一 高野や根来、そこ（雑賀）の衆は相談して、（將軍のいる）泉河へ出向き力を尽くすこと。知行などのことは年寄が相談し、これからずっとお互いに心を通わせ、不仲にならないように相談すること。

一 近江や美濃のすべての混乱をおさめ、自分の思うとおりになった。ご心配は不要です。使者がいろいろ申します。

御入洛のこと、援助や味方が大事です。詳しいことは將軍がおっしゃいますから、詳しくは述べません。

宛先の土橋平尉とは土橋重治（つちばししげはる）のことです。紀伊国の北西部の地侍集団で、反信長派であった雑賀衆（さいかしゅう）のリー

ダーでした。本能寺の変（六月二日）の直後の光秀のこの書状は、変の背景を探る上で極めて重要なものです。「上意」とは、將軍の足利義昭のことと思われる、光秀と雑賀衆と義昭の様々なやりとりを推測させるものです。

(14) 明智光秀書状

〔天正一〇年（一五八二）〕 土橋平尉（重治）宛

恐々謹言、

六月十二日 光秀（花押）

雑賀五郷

土橋平尉殿

御返報

尚以急度御入洛義、

御馳走肝要候、委細

為 上意可被仰出候条

不能巨細候、

（包紙）

「惟任日向守

雑賀五郷

光秀

土橋平尉殿御返報

」

読み

如仰未申通候処ニ
上意馳走被申付而
示給快然候、然而
御入洛事即御請申上候、
被得其意御馳走肝要候事、

尚以つて急度（もしくは「受衆」）御入洛の儀御馳走肝要に候、委細上意として仰せ出さるべく候条、巨細能わず候、

一 其国儀可有御入魂旨

珍重候、弥被得其意可申

談候事、

一 高野根来其元之衆

被相談至泉河表御

出勢尤候、知行等儀年寄

以国申談、後々迄互入魂

難遁様可相談事、

一 江州濃州悉平均申付

任覚悟候、御氣遣有

間敷候、尚使者可申候、

仰せのごとくいまだ申通わず候処に、上意馳走申されるに付いて示し給わり快然に候、然るに御入洛の事即ち御請申し上げ候、其の意を得られ御馳走肝要に候事、

一 其の国の儀御入魂あるべき旨珍重に候、いよいよ其の意を得られ申し談すべき候事、

一 高野根来其元（そのもと）の衆相談せられ、泉河表に至り御出勢尤に候、知行等の儀年寄国を以つて申し談じ、後々まで互いに入魂し遁れがたき様相談すべき事、

一 江州濃州ごとごとく平均申し付け覚悟に任せ候、御氣遣あるまじく候、尚使者申すべく候、恐々謹言、

六月十二日 光秀（花押）

御動座之儀来九日

弥可為必定候、

我等八五日当陣

罷立候、筒順同

心申候、被得其意

無御油断御地走

簡要候、此段之条

人数等之儀随

分無御油断可

有御覚悟候、猶

川越玄蕃助可

申候、恐々謹言

惟任日向守(明智光秀)

二月廿七日 光秀(花押)

細井戸右近殿

御宿所

読み

出陣に就き鞆二懸手綱腹帯五具送り給ひ候、毎度御懇志の至りに候、「信長の」御動座の儀は来たる九日にいよいよ必定たるべき候、我等は五日に当陣を罷り立ち候、筒順同心申候、その意を得られ御油断なく御地走簡要に候、此段の条人数等の儀随分御油断なく御覚悟あるべき候、

なお川越玄蕃助申すべき候、恐々謹言、

惟任日向守(明智光秀)

二月廿七日 光秀(花押)

細井戸右近殿

御宿所

意味と解説

出陣に際して鞆(しりがい・馬の体につける馬具などのこと)を二懸、手綱腹帯を五具送っていたとき、毎度の贈り物はともありがたい。御動座(信長の出陣)は来たる九日にいよいよ定められ、わたし(光秀)たちは五日に当陣を出発します。筒井順慶も同意しました。その上で油断なく援助や味方をするのが大事です。出陣の事、人数等のこと、十分に油断なく心づもりしなさい。なお川越玄蕃助が申します。

年不詳ですが、関連する信長らの様々な史料などから、武田を攻略する天正十年(一五八二)二月の可能性があります。

たので（そちらに行くことが）遅れてしまいました。いろいろと調整
説得することが決まったので、ほどなく上洛します。そちらの国のこ
とを放置しておくことはしませんので安心して下さい。元気で踏ん張っ
てしっかりとやって下さい。なお追々（そちらへ）言葉をかけます。

木作左衛門佐は織田信雄（のぶかつ）の家老で、戸木城の城主であつ
た木道具政（こづくりともまさ）と考えられます。小牧長久手の戦に
関連する伊勢南部の松ヶ嶋城をめぐる攻防と、当時の家康の状況を示
すものです。

(12) 明智光秀諸役免許状

天正四年（一五七六） 曾祢（曾根） 村惣中 宛

今度従氷上表

打入候刻、当村百姓

別而馳走之段懇

志不浅候、依之諸

役万雑公事令

免許畢、仍如件、

天正四

二月廿日（花押）

曾祢村

惣中

読み

今度氷上表より打ち入り候刻、当村の百姓別に馳走の段懇志浅からず
候、これにより諸役万雑公事（まんぞうくじ）免許せしめおわんぬ、よつ
て件の如し、

天正四年二月廿日（光秀）

曾祢（曾根）村

惣中

意味と解説

このたび（丹波）氷上郡（黒井城）を攻撃した際、村の百姓が援助
をしてくれ、その気持ちはとても深いものがありました。それにより、
曾根村の様々な課税を免除します。

明智光秀は織田信長から丹波攻略を命じられ、丹波黒井城を攻めま
した。その出陣に際して曾根村の者たちが光秀をあつく援助したため、
それに対して光秀が税を免除した文書です。光秀の勢力範囲がわかる
史料です。

(13) 明智光秀書状

〔年不詳（天正一〇年（一五八二）カ）〕 細井戸右近 宛

就出陣鞆二懸

手綱腹帯五具

送給候、毎度御懇

志之至候、

体調のよくなった秀吉が家康のことを心配して書いたもので、親愛の情が伝わってきます。年不詳ですが、両者の病気の歴史を調べていくと文禄四年（一五九五）に書いたものとも考えられます。

木作左衛門佐殿
戸木入道殿

(11) 徳川家康書状

〔天正二二年（一五八四）〕 木作左衛門佐（木造具政）・戸木入道

宛

信雄江御注進状即此方へ

御越候、委細遂披見候、仍去

十四夜松ヶ嶋へ被取懸、宿

城悉放火其上被及合戦、

始弥太郎其外随一之者共百

余被討捕、首共被差越之

由候、毎度か様之御手柄共無

比類儀可申様無之候、早々至

其表可出馬申候処、此中河

浅候間、諸城手懸依申付

遅延候、方々調略之子細

何も相卜候之間、上洛不可有

程候、殊其国之儀被捨置間敷候

間、可御心安候、弥丈夫被相踏

專一候、尚追々可申入候、恐々謹言、

五月十八日 家康（花押）

読み

信雄へ御注進状即ち此の方へお越候、委細は披見を遂げ候、よつて去る十四日夜松ヶ嶋へ取り懸かられ、宿城悉く放火し其の上合戦に及ばれ、弥太郎を始め其の外随一の者ども百余を討ち捕えられ、首ともこれを差し越される由候、毎度か様の御手柄とも比類なきの儀申すべくさまこれなき候、早々その表に至り出馬申すべき候処、この中河浅の間、諸城を手懸け申付くるによつて遅延候、方々調略の子細何も相卜（ぼく）し候之間、上洛程あるべからず候、殊其国の儀捨て置かれ間敷候間、御心やすかるべく候、いよいよ丈夫相踏まれ專一に候、なお追々申し入るべく候、恐々謹言、

五月十八日 家康（花押）

木作左衛門佐（木造具政）殿

戸木入道殿

意味と解説

信雄への報告書が、こちらへ届き詳しく読みました。（あなた（木造・戸木）は、）去る十四日夜に松ヶ嶋を攻め、宿や城を悉く放火して合戦になり弥太郎を始めとした強者百名余りを捕え首を差出しました。いつもの様のお御手柄とともに比類ないものです。早々にそちら（松ヶ嶋）へ向かい参陣するところですが、河が浅く諸城を攻撃するよう申し付けてい

八月九日（朱印）
寺西筑後守（正勝）殿

意味と解説

領地の増加として美濃国（加茂郡）蜂屋村の三千石を与えます。本領とあわせて一万三千八十石を与えます。（寺西は）すべてを領地にしない。

豊臣秀吉が家臣の寺西筑後守正勝に蜂屋村（現在美濃加茂市）の領地の三千石を追加して与えたもの。江戸初期に尾張藩領（約三千石）となった蜂屋領は、この時期に一旦寺西が支配していたことを示す貴重な史料です。

(10) **豊臣秀吉自筆書状**

〔年未詳（文禄四年（二五九五）カ）〕 大納言（徳川家康カ）宛

（重要美術品）

かへすくすき

とよくなり候はん間、

此方へもむやう

にて候

わづらいなにと候や、

心もとなく候まゝ、

一ふてとりむかいまいらせ候、

われく心かはやよく

候間心やすく候べく候、

けさたけた進之候、

よくやうしやう候て可然候、

かしく

大なごん殿 大かう

読み

患いなにと候や、心もとなく候まゝ、一筆とりむかいまいらせ候、われわれ心かはやよく候間、心やすく候べく候、今朝たけたまいらせ候、よく養生候てしかるべく候、

かしく

返すがえすすきと良くなり候はん間、この方へも無用にて候、

大納言（徳川家康）殿 大かう

意味と解説

あなたの患いはいかがでしょうか。不安な気持ちのまま手紙を書いていきます。私は（容体がよくなり）心が明るくなっていますので、安心してください。今朝（医師の）竹田をまいらせませす。よく養生してください。繰り返しですが（こちらは）すっきりと良くなっているのでご心配なくしてください。

秀吉（太閤）独特の筆使いで味のある書状です。宛先の大納言とは徳川家康のことと思われる。そのころ両者とも病気がちでしたが、少し

五月以前二可被相極

儀尤候、猶兩人可

申候也、

二月廿四日 秀吉(花押)

徳川中納言殿

読み

駿州へ相い越され大儀に候、早々申し遣わすべき処、九州面へ出馬の儀に付いて延引し候、次小笠原并真田両人事召上、その方に対して随心すべきの旨仰せ聞かされ、則ち酒井左衛門尉申し含み、伊藤大郎左衛門尉相い添え遣わし候条、其意を得られ、入魂簡要に候、随て関東無事の儀を条々左衛門尉ニ仰せ含められ候、是又急度北条へ相い進らせらるべく候、留主中五月以前に相い極めらるべきの儀もつとも候、猶兩人申すべき候也、

二月廿四日 秀吉(花押)

徳川中納言(家康)殿

意味と解説

(徳川中納言(家康)が)駿州へ到着したことはご苦労でした。早々に書状を出すところ、九州への出馬(準備)の件で遅れてしまいました。小笠原と真田両人のこと、召し上げてそちらに従うように命じました。酒井左衛門尉にそのことを申し含み、伊藤大郎左衛門尉を添えて遣わしましたので、その意をくみとって仲良くすることが大事です。さて、関

東の和平のことについて色々(酒井)左衛門尉に申し含めましたので、すぐに北条方へ伝えてください。自分が(九州に出陣している)留守中の五月までに決着してください。兩人(酒井と伊藤)がこのようなことを申します。

(9) 豊臣秀吉朱印状

天正一九年(一五九二) 寺西筑後守(正勝)宛

為加増美濃国

蜂屋村三千石

本知壹万八十石

都合一万三千

八十石事、令扶

助之訖全可領

知者也、

天正十九

八月九日(朱印)

寺西筑後守殿

読み

加増として美濃国蜂屋村の三千石、本知壹万八十石の都合一万三千八十石の事、これを扶助せしめおわんぬ、全て領知すべき者也、
天正十九

(7) 豊臣秀吉朱印状

〔天正一三年（一五八五）〕 荒尾次郎作（隆重）宛

犬山在候船くさり

事、加藤作内

令相談、岐阜迄

持遣、池田三左衛門尉ニ

可相渡候、尚委細

作内可申候也、

三月朔日 秀吉（朱印）

荒尾次郎作殿

読み

犬山にあり候船くさりの事、加藤作内相談せしめ、岐阜迄持ち遣わし、

池田三左衛門尉ニ相渡すべき候、尚委細は作内申すべき候也、

三月朔日 秀吉（朱印）

荒尾次郎作（隆重）殿

意味と解説

（尾張の）犬山にある船鎖について加藤作内（犬山城主の加藤光泰）と相談し、岐阜まで運送し、池田三左衛門尉（池田輝政・当時の岐阜城主）に渡しなさい。なお詳しくは加藤作内が申します。

「船鎖」（ふなくさり）とは船をつないで川を渡る舟橋にするための鎖

ではないかと思われませんが、詳しくはわかりません。これに関連する別の史料から、この後近江へ、さらに越前まで運ばれることになっていたようです。

荒尾次郎作（隆重）は、信長の家臣池田氏の家老として仕えた人物です。

なお、秀吉はこの年の九月、豊臣の姓を受けます。

(8) 豊臣秀吉書状

〔天正一五年（一五八七）〕 徳川中納言（家康）宛

駿州江被相越

大儀候、早々可申遣

処、九州面出馬之

儀付而延引候、次

小笠原并真田

両人事召上、対

其方可随心之旨

被仰聞、則酒井左衛門尉

申含、伊藤大郎左衛門尉

相添遣候条、被得

其意、入魂簡要候、

随而関東無事之儀、

条々左衛門尉仁被仰含候、

是又急度北条へ

可被相進候、留主中

(中四)

木下与右衛門 百廿

「雑賀」孫一 式百

「舟越」 百

「多賀」宗十郎 百五十

木村や一右衛門 百卅

「宮木」藤左衛門 七十

「生熊」源介 百廿

「伊藤」弥吉 百五十

「野村」内匠介 百五十

合千式百

(右五)

河尻与四郎 百卅

「福島」市兵衛 式百五十

「加藤」孫六 百五十

「佐久間」忠兵衛 百廿

「戸田」三郎四郎 三百

池田久左衛門 九十

松下「嘉兵衛」 百

津田小八郎 百五十

合千三百

(左五)

「森」三右衛門 百

「加藤」虎之介 百五十

「尾藤」甚右衛門 五百

「平野」権平 百五十

「瀧川」義太夫 百

「早川」喜八郎 百五十

「蜂屋」五郎介 式百五十

合千四百

(六)

「伊藤」七蔵くミ

「津田」与左衛門くミ

「真野」左近くミ

三千

秀吉(花押)

「早水」勝太くミ

「佐藤」主計くミ

「尼子」六郎左衛門くミ

此備都合壹万五千

解説

羽柴(豊臣)秀吉が作成した陣立書。陣立書(じんだてしよ)とは出陣の命令を下す際に一番手、二番手と家来を組み分けし、その組をひきいる武将と組の人数を記したものです。

この史料はかつて、秀吉の朝鮮征伐の際のものと伝えられていたことがありましたが、武将の顔ぶれから判断して小牧長久手の戦にあたっての陣立書と思われる。秀吉が最後尾に書かれ、左五(五段目左側)に加藤虎之介(加藤清正)、蜂屋五郎介の名がみえます。

合千三百

(左五)

もり三右衛門尉 百

かとう虎介 百五十

ひとう甚右工門 五百

ひらの権平 百五十

たき川ぎ太夫 百

はや川喜八郎 百五十

はちや五郎介 貳百五十

合千四百

(六)

いとう七蔵くミ

つ田与左衛門くミ

まの左近くミ

三千

秀吉(花押)

はやミ勝太くミ

さとう主計くミ

尼子六郎左衛門くミ

此備都合壹万五千

読み

(一)

〔池田〕孫次郎 三百五十

〔山崎〕源太左衛門尉 七百五十

〔多賀〕新太左衛門尉 三百

合千四百

(右二)

木村隼人 千五百

〔堀尾〕毛介 六百

合貳千百

(左二)

〔加藤〕作内 千

みこ田平左衛門 六百

一柳市助 七百

合貳千三百

(中三)

〔生駒〕市左衛門 百八十

〔柘植〕与八 百廿

〔赤松〕弥三郎 四百

〔大塩〕金右衛門 百八十

〔牧村〕七兵衛 三百

〔毛利河内〕 四百廿

山内〔伊右衛門〕 百八十

〔古田〕彦三郎 百八十

〔糟谷〕助右衛門 百五十

合貳千百十人

(左二)

千

かとう作内

六百

ミこ田半左衛門

七百

一柳市助

合式千三百

(中三)

百八十

いこま市左衛門

百廿

つげ与八

四百

あか松弥三郎

百八十

大しほ金右衛門

三百

まき村長兵衛

四百廿

もりかわち

百八十

山内いゑもん

百八十

ふる田彦三郎

百五十

かすや助右衛門

合式千百十人

(中四)

木下与右衛門

百廿

さいか孫一

式百

ふなこし

百

たか宗十郎

百五十

木村や一右衛門

百卅

みや木藤左衛門

七十

いくま源介

百廿

いとう弥吉

百五十

の村たくミ

百五十

合千式百

(右五)

河尻与四郎

百卅

ふく島市兵衛

式百五十

かとう孫六

百五十

さくま忠兵衛

百廿

と田三郎四郎

三百

池田久左衛門

九十

松下かひやうへ

百

津田小八郎

百五十

程候条、其内可矢
留候、但此方付城
所々人数不相甘、
番等之儀者、弥堅
可申付事專一候也、

四月四日 信長（朱印）

長岡兵部大輔殿
中川瀬兵衛尉殿

読み

大坂赦免について、尼崎矢留の事同心せしめ候、彼退城程あるべからず
候条、其の内矢留すべき候、但し此方付城の所々人数相甘（くつろげ）ず、
番等の儀はいよいよ堅く申し付けるべき事、專一に候也、

四月四日 信長（朱印）

長岡兵部大輔（藤孝）殿
中川瀬兵衛尉（清孝）殿

意味と解説

大坂赦免について（信長が）尼崎の停戦について同意し、尼崎からの
退城がほどなくおこなうので、その間は停戦しなさい。しかしながら（こ
ちらの）付城の所々に置く人数は気を抜くことなく、守備のことは固く
行うように申し付けます。しっかりと心がけなさい。

「大坂赦免」とは長く続いた大坂の石山本願寺と信長との抗争について
の和睦（天正八年三月）のことで、その直後の状況を示しています。尼
崎の付城を守る長岡兵部大輔（藤孝）と中川瀬兵衛尉（清孝）に対し、
石山本願寺との和睦によって本願寺側が尼崎から撤退し明け渡すことにな
っていましたが、信長は警護を厳重に続けるよう指示しています。い
わゆる「石山戦争」の終結時の様子を伝える貴重な史料です。

(6) 豊臣秀吉陣立書

〔天正十二年（一五八四）〕

(一)

いけ田孫次郎

三百五十

山さき源太左衛門

七百五十

多か新左衛門尉

三百

合千四百

(右二)

千五百

木村隼人

六百

ほりを毛介

合式千百

(4) 織田信長黒印状

〔天正三年（一五七五）〕 小早川左衛門佐（隆景）宛

就北国逆徒等令退治

示給候、殊太刀一腰馬

一疋懇切之至候、彼地之躰

先書申送之条、不及重

説候、悉以明隙候間去月

廿六日納馬候、近日可為上

洛之条、猶自京都可申

述候、猶二位法印可申候、

恐々謹言、

十月二日 信長（黒印）

小早川左衛門佐殿

（切封ウハ書）

「小早川左衛門佐殿 信長」

読み

北国逆徒等退治せしむるにつき示し給ひ候、ことに太刀一腰と馬一疋懇切の至に候、彼地の躰先書申し送るの条、重ねて説くに及ばず候、悉く以つて隙き明き（すきあき）候間、去月廿六日納馬候、近日上落たるべく、の条、猶京都より申し述ぶべき候、猶二位法印申すべく候、恐々謹言、

十月二日 信長（黒印）

小早川左衛門佐（隆景）殿

（切封ウハ書）

「小早川左衛門佐殿 信長」

意味と解説

北国逆徒（越前一向衆）等を討伐したことについて手紙をいただきました。（それにあわせて）太刀一振りと馬一疋を頂戴し感謝しています。討伐の様子は先に書状で送ったとおりなので重ねて説明することはありません。すべて決着がつき先月（九月）二十六日に（岐阜へ）帰陣しました。近日中に京へ上がりますので、京都から手紙を出します。このことは（使者の）二位法印（右筆の武井夕庵）が申します。

長く続いていた一向一揆について、天正三年（一五七五）八月、信長は自ら越前へ出陣して壊滅させ、九月二十六日に岐阜に帰陣しました。毛利側から進物として太刀と馬を贈られ、小早川左衛門佐（隆景）に対して感謝の気持ちを表わしています。

(5) 織田信長朱印状

〔天正八年（一五八〇）〕 長岡兵部大輔（藤孝）・中川瀬兵衛尉（清

秀）宛

就大坂赦免、尼

崎矢留事、令同

心候、彼退城不可有

なお、忠三郎（氏郷）は永禄一二年に信長の娘と婚姻を結び信長の婿になっており、両者は極めて親密な関係でした。

遊佐

(3) 織田信長書状

〔元龜元年（一五七〇）〕 遊佐〔信教〕宛

其表之趣、如何候哉、

徳川三河守着陣候、

向近江□候丹羽

木下已下も令

渡湖候間、徳川二

相加、東福寺清水

栗田口辺二可執

陣候、敵淀川を越候、

間近寄候者、此表

儀者、志賀勝軍

□ 残人数、

信長即時□

可討果、敵働

様子被見届、可

被合手候、為其

申送候、恐々謹言、

十月二日 信長（花押）

読み

其の表の趣、如何に候哉、徳川三河守（家康）着陣候、近江に向かい□
候丹羽（長秀）・木下（秀吉）已下も湖を渡らしめ候間、徳川二相加え、
東福寺・清水・栗田口辺二陣を執るべく候、敵淀川を越し候、間近に寄
り候はば、この表の儀は、志賀・勝軍に □ 人数を残し、信長即時□
討果すべし、敵の働きの様子を見届けられ、手を合せらるべく候、其の
為に申し送り候、恐々謹言、

十月二日 信長（花押）

遊佐

意味と解説

その表（大坂方面）の様子はいかがでしょうか。（こちらは）家康が応援のために着陣しました。（長浜・横山城にいた）丹羽長秀と木下秀吉に湖（琵琶湖）を渡らせ、家康に加わって（京都東部の）東福寺・清水・栗田口に陣を取ることになります。敵が淀川を越えて（そちらに）攻め寄ってくれば、志賀（大津）や勝軍地蔵山（京都左京区）に軍勢を残し、（近江にいる）信長自らが出陣して討ち果たすつもりです。敵の動きを監視し応戦して下さい。そのためにこの手紙を届けました。

宛先の遊佐（ゆき）は、河内の畠山昭高（あきたか）の重臣の遊佐信教（のぶのり）と思われる。家康の着陣や京都周辺の動きから元龜元年（一五七〇）のものとされます。

以前のとおり取ってもよろしい。

宛先の猪飼野（いかいの）氏は近江の志賀郡の一族と推定されます。課税について信長が認め、猪飼野氏に伝えたものです。

(2) 織田信長朱印状

元龜元年（一五七〇） 蒲生左衛門大夫（賢秀）・蒲生忠三郎（氏郷）

宛

領中方目録

- 一 千石 吉田分
- 一 四百石 赤佐分
- 一 八百石 安部井分
- 一 五百石 河井分
- 一 参百石 大塚分
- 一 貳百石 横山分
- 一 貳百五拾石 栖雲分
- 一 参拾石 梅若大夫分
- 一 参拾石 交山分
- 一 貳千石 小倉越前分
- 同右近大夫分共二
- 已上五千五百拾石

此外

- 一 市原四郷一職ニ加之

右所充行也、全領知不可有相

違之状、如件、

元龜元

五月十五日 信長（朱印）

蒲生左衛門大夫殿

同 忠三郎殿

読み

領中方目録

（中略）

此外

- 一 市原四郷一職に之を加う、
右充て行う所也、すべて領知し、相違あるべからざるの状、件の如し、
元龜元年五月十五日 信長（朱印）
蒲生左衛門大夫（賢秀）殿
同 忠三郎（氏郷）殿

意味と解説

吉田分の千石をはじめとする五千五百十石と、この他市原分（現在の永源寺周辺）をあわせ、すべて領地として（蒲生氏に対して）支配なさい。

宛先の蒲生（がもう）は、近江国蒲生郡の日野城主の蒲生賢秀・氏郷親子です。永禄一年（一五六八）に信長が近江に侵攻した際に、蒲生氏はその下に降りて従軍しました。そうしたことを受けて信長は、二年後のこの年（元龜元年・一五七〇）領地を与えたものです。

(7) 「豊臣秀吉朱印状」 H19898

荒尾次郎作（隆重）宛て 「天正一三年（一五八五）」三月朔日 226 × 420

(8) 「豊臣秀吉書状」 H19899

徳川中納言（家康）宛て 「天正一五年（一五八七）」二月二十四日 330

× 428 〈大阪城天守閣「豊臣と徳川」（二〇一五）No.19〉

(9) 「豊臣秀吉朱印状」 H19901

寺西筑後守（正勝）宛て 天正一十九年（一五九一）八月九日 216 × 552

(10) 「豊臣秀吉自筆書状」 H19903

大納言（徳川家康力）宛て 「年不詳（文禄四年（一五九五）カ）」 351

× 640 *重要美術品

(11) 「徳川家康書状」 H19905

木作左衛門佐（木造具政）・戸木入道宛て 「天正一二年（一五八四）」

五月一八日 110 × 458

(12) 「明智光秀諸役免許状」 H19910

曾祢（曾根）村惣中宛て 天正四年（一五七六）二月二〇日 266 × 427

(13) 「明智光秀書状」 H19911

細井戸右近宛て 「年不詳（天正一〇（一五八二）年カ）」 二月二七日

140 × 634

(14) 「明智光秀書状」 H19912

土橋平尉（重治）宛て 「天正一〇年（一五八二）」六月二二日 114 ×

568

(注) (11) 「徳川家康書状」について、展示時には寄託資料であったが、その後寄付手続が行われ、現在は館蔵となっている。

(1) 織田信長朱印状

永禄一二年（一五六九） 猪飼野佐渡守・猪飼野孫右衛門尉 宛

当郡自山中

出牧材木場

役之事、如前々

可令取沙汰之状、

如件、

永禄十二

四月日 信長（朱印）

猪飼野佐渡守殿

猪飼野孫右衛門尉殿

読み

当郡山中より出す牧材の木場役の事、前々の如く取沙汰せしむべきの状、件の如し、

永禄十二

四月日 信長（朱印）

猪飼野佐渡守殿

猪飼野孫右衛門尉殿

意味と解説

（かにみつお 美濃加茂市民ミュージアム館長）

当郡（志賀郡）の山から狩り出される木材の木場（貯蔵場）の税について、

「文化の森」レクシオン展」展示資料について

可児 光生

美濃加茂市民ミュージアムでは、市内在住の森俊郎氏から、これまでに自身が収集された資料及び森家に伝わってきた貴重な資料をこのほど多数寄贈いただいた。寄贈資料の内訳は、安土桃山時代の古文書、美濃加茂市ゆかりの岡本一平・かの子の作品、その他地域の歴史資料など約五〇点で、他に古文書数点を寄託いただいた。

二〇一七年（平成二九）四月二三日（土）から六月四日（日）の会期中美濃加茂市民ミュージアムでは「文化の森レクシオン展」を開催し、寄贈及び寄託資料のうちから織田信長、明智光秀、豊臣秀吉、徳川家康に関する古文書一四点を展示した。

ここでは、展示時の翻刻と若干の解説を再掲し、合わせて写真を掲載するものである。

貴重な史料をご提供いただいた森俊郎氏、及び翻刻と解説を記述するにあたってご指導いただいた鳥居和之氏（名古屋市逢左文庫・文庫長）に心から感謝申し上げます。

【展示資料リスト】

No. / 史料名 美濃加茂市民ミュージアム資料登録番号 / 宛所等

年月日「」は推定 / 寸法（本紙 縦×横・mm） / 備考（出品履歴等）

- (1) 「織田信長朱印状」 HI19887
猪飼野佐渡守・猪飼野孫右衛門尉宛て 永禄二二年（一五六九）四月
312×462 〈岐阜市歴史博物館「織田信長と美濃・尾張」(二〇一一)
No.24〉
- (2) 「織田信長朱印状」 HI19888
蒲生左兵衛大夫（賢秀）・蒲生忠三郎（氏郷）宛て 元亀元年（一五七〇）
五月一五日 264×703 〈岐阜市歴史博物館「織田信長と美濃・尾張」
(二〇一一) No.25、安土城考古博物館「信長の家臣たち」(二〇一六)
No.37〉
- (3) 「織田信長書状」 HI19889
遊佐「信教」宛て 「元亀元年（一五七〇）」一〇月二日 245×350 〈岐
阜市歴史博物館「織田信長と美濃・尾張」(二〇一一) No.26〉
- (4) 「織田信長黒印状」 HI19890
小早川左衛門左（隆景）宛て 「天正三年（一五七五）」一〇月二日
171×532 〈岐阜市歴史博物館「織田信長と美濃・尾張」(二〇一一)
No.77〉
- (5) 「織田信長朱印状」 HI19891
長岡兵部大輔（藤孝）・中川瀬兵衛尉（清秀）宛て 「天正八年（一五八〇）」
四月四日 144×411 〈岐阜市歴史博物館「織田信長と美濃・尾張」
(二〇一一) No.38〉
- (6) 「豊臣秀吉陣立書」 HI19896
「天正二二年（一五八四）」 489×301

美濃加茂市民ミュージアム 紀要

第17集

2018年（平成30）3月発行

編集・発行

美濃加茂市民ミュージアム

岐阜県美濃加茂市蜂屋町上蜂屋 3299-1（〒505-0004）

TEL 0574-28-1110 / FAX 0574-28-1104

<http://www.forest.monokamo.gifu.jp/>

印刷 有限会社 永田印刷

美濃加茂市民ミュージアム紀要 第17集(2018)

岐阜県可児地域に分布する平牧層の含巨礫凝灰岩層

鹿野 勘次

美濃加茂地域の地形・地質と地名の関係について

鹿野 勘次
水谷 敬

美濃加茂市川合町の古墳出土須恵器とその背景

渡邊 博人

尾崎遺跡25号住居址出土資料について

磯谷 祐子

森金次郎—その家族と親友・有賀好風

西尾 円

「文化の森コレクション展」展示資料について

可児 光生



MINOKAMO CITY MUSEUM